

第4章 龍子向イ山古墳群

龍子三ツ塚古墳の位置している尾根から派生した支尾根のうち、最も北へ延びた尾根の先端には龍子神社が鎮座している。この尾根の尾根上及び西斜面で、前述の龍子向イ山遺跡のほかには2基の古墳が立地しており、またこの尾根と小さな谷を隔てて南にある北西向き斜面では3基の古墳が立地していた。この5基の古墳から構成される古墳群を「龍子向イ山古墳群」と呼称することにした。

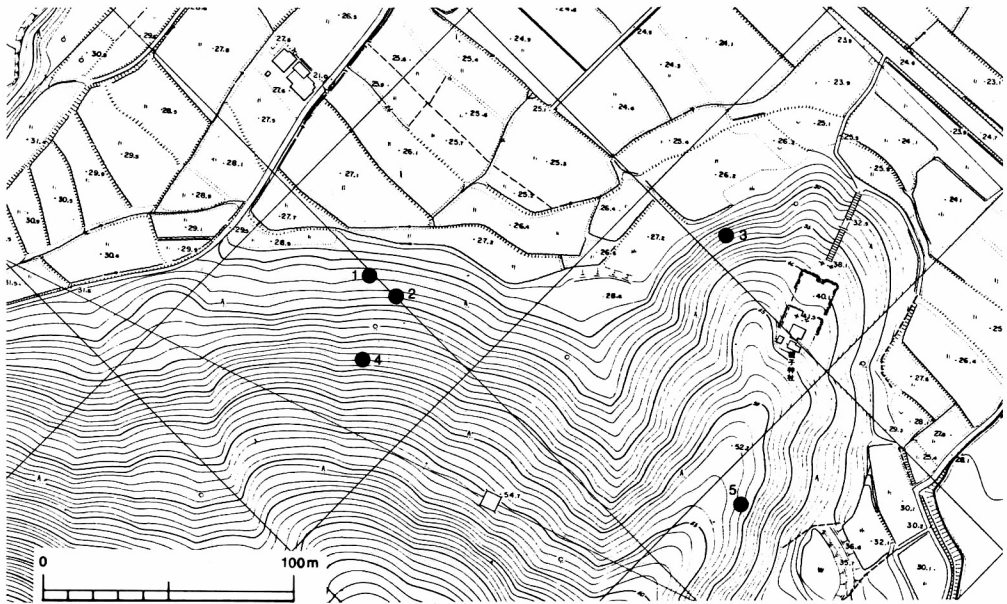
また発掘調査範囲のうち、谷の北側の斜面を「北地区」、南側の斜面を「南地区」と呼ぶものとした。北地区は3号墳・5号墳の2基から構成され、南地区は1号墳・2号墳・4号墳の3基から構成される。

5基の古墳は、いずれも横穴式石室を埋葬施設に持つ円墳で、1～4号墳について発掘調査を行った。

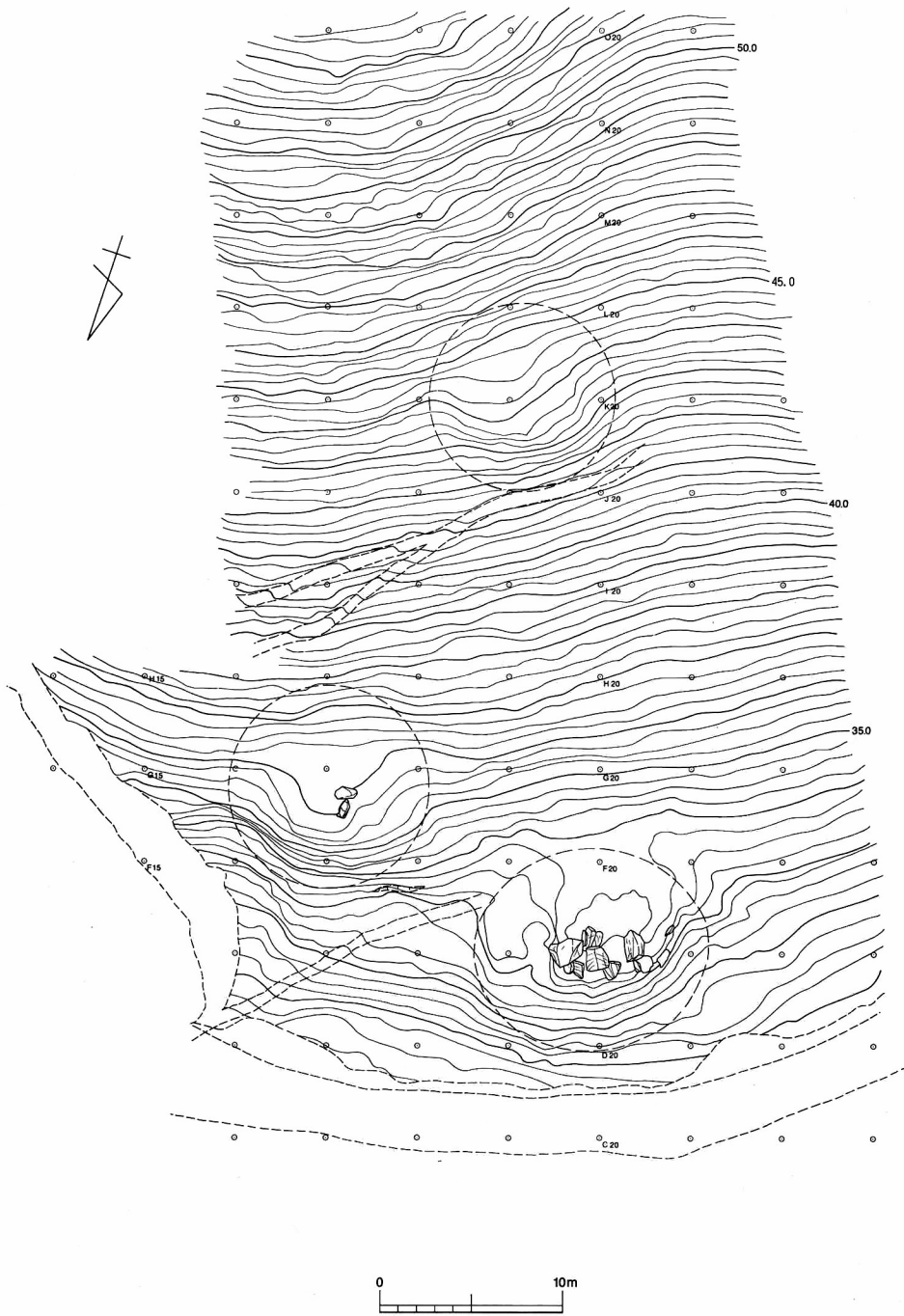
第1節 龍子向イ山1号墳

1. 位置

1号墳は、龍子向イ山古墳群南地区に立地する3基の古墳のうち、最も斜面の下方に位置している。



第61図 龍子向イ山古墳群分布図



第62図 龍子向イ山古墳群 1・2・4号墳 地形測量図

発掘調査を開始する前は、南地区は雑木や柴・草などが生い茂り、周囲を見通す事ができる状態ではなかったが、1号墳は天井石の一部が露出していたため、その存在を知ることができた。

標高31～34m付近に築かれており、これは南地区の斜面がややその傾斜を緩めていく傾斜変換点にあたる。1号墳の北側の墳丘裾近くには山道が通っており、その北側は削り取られて段を作り、段の下は水田や畑として利用されていた。

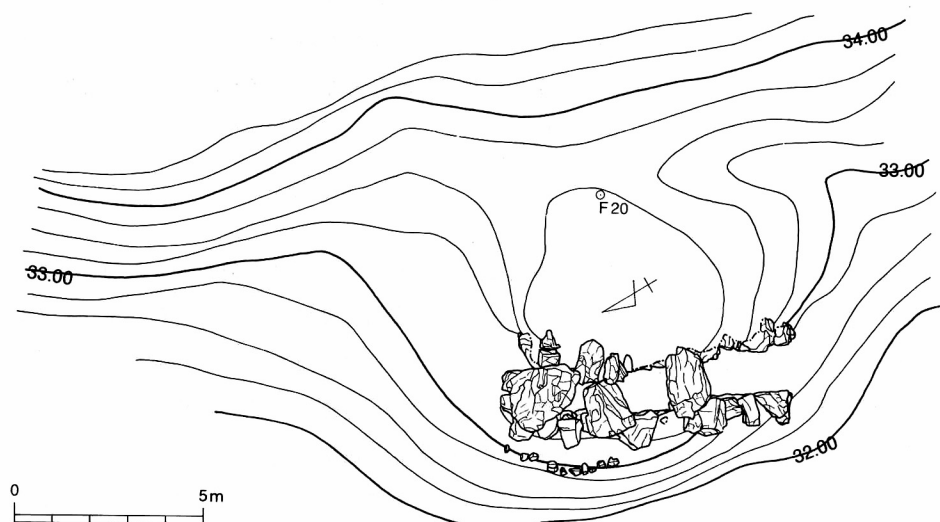
1号墳からの眺望は、平野部との比高差があまりないため良いとは言えない。北西方向には現在の龍子の集落を望むことができるが、北より東側については北地区のある尾根の張り出しがあるため遮られ、北地区を望むにすぎない。南は、龍子長山古墳群の立地する尾根が北へ延び視界を遮っており、現在の南山の集落(龍子の集落の約250m西に位置する集落)すら望むことができない。

以上のように、南地区で特に標高の低い1号墳(2号墳)からの眺望は、非常に限られたものである。

2. 外形

1号墳が調査に入る以前に古墳であると判断できたのは、天井石が露出していた事と明らかに盛土と思われる高まりが認められたためである。

1号墳の墳丘は、長軸(東西方向)13m・短軸(南北方向)11mの楕円形をしている。これは楕円形を意識したものではなく、斜面地という地形に影響されたものであろう。北からは比高5mを測る。表土を除去する以前の状況を見てみると、南北ラインでは、斜面の上方からの傾



第63図 龍子向イ山1号墳 墳丘測量図

斜が標高34m付近で緩やかになり、露出した天井石までの約6mはほとんど水平あるいは30cm程の盛り上がりを見せていた。天井石の北側では、周囲の斜面の傾斜以上の急傾斜(32°)が認められた。

3. 墳丘築成

墳丘の構築にあたっては、まず地山を掘削して石室を築くための墓壙を穿っている。地山は石室の南側で75cm、北側で15cm掘削している。その後、石を積みながら墳丘を盛り上げているが、墳端を示すために地山を掘削したような形跡は認められない。墳丘の南側(山側)では、溝状の黒色土の堆積が4分の1周にわたり認められた。当初周溝とも考えられたが、墳丘の断面を観察した結果、地山の溝状掘削は認められなかった。周溝状部分から墓壙にかけての地山はほぼ直線的で、自然傾斜とも考えられる。この黒色土の堆積は、幅1.8m・深さ20cm前後の浅いもので、東側は2号墳と墳丘裾を接する付近まで、西側は石室の開口部分近くまで続いている。

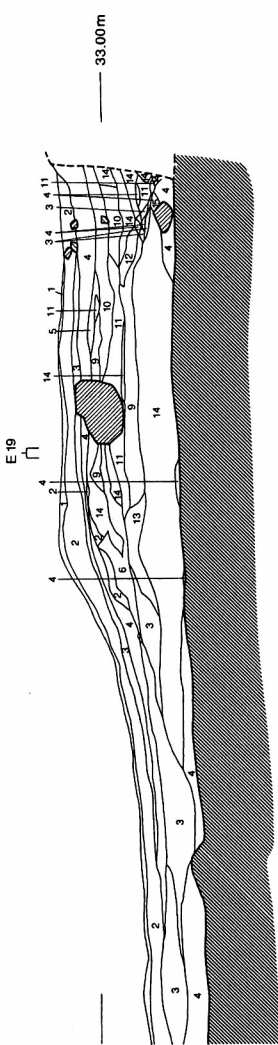
南側の墳丘断面では、墓壙付近から盛土の堆積状況が変わり、墓壙の南側では石室に向かって高くなるように積まれている。しかし墓壙ラインから石室にかけては、水平かやや石室に向かって下がるような土層堆積をしている。これは石室の南側側壁が土圧のため北側に傾いてきたために、墳丘が落ちこんだことを示している。

石室の北側の墳丘は、盛土の一部が流出しており、急傾斜となっている。表土を除去したところ人頭大の角礫10個を検出した。この角礫は標高33m付近に等高線に沿って一列に並んでいる。この石列は、東・西側の墳丘では全く検出されなかった。南側の墳丘では数個の角礫が検出されたが、北側のものよりも小さく揃いで、列をなしている様子も認められなかった。また北側墳丘にトレンチを入れたところ、石列に使われたのと同様な石が認められた。この石や石列は盛土の裾に位置しており、より多くの盛土を上げねばならない北側墳丘を構築する際、土止めの役割を果たしたものではないかと思われる。

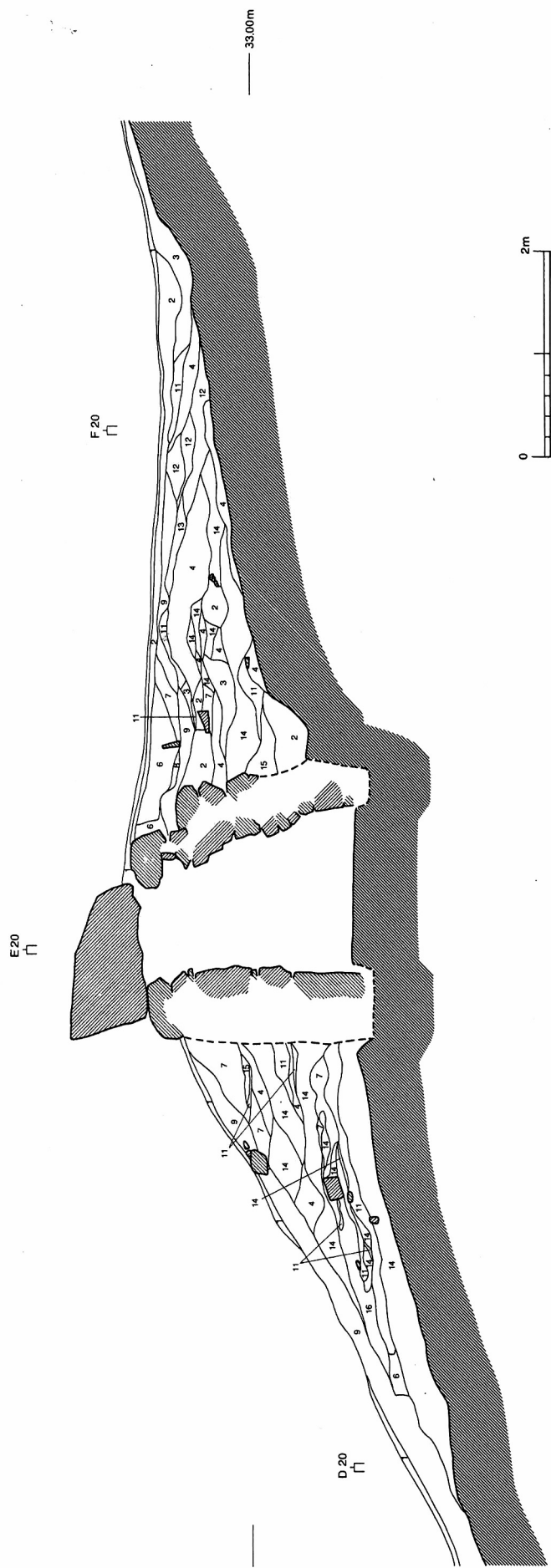
4. 横穴式石室

1号墳は、右片袖の横穴式石室を埋葬施設としている。天井石は、調査に入る前より露出していたが、奥壁の上に1石、玄室上に1石、羨道部の玄門寄りに1石の計3石が遺存していただけである。また羨道部の天井石と思われる石が羨道内に落ち込んだ状態で検出された。

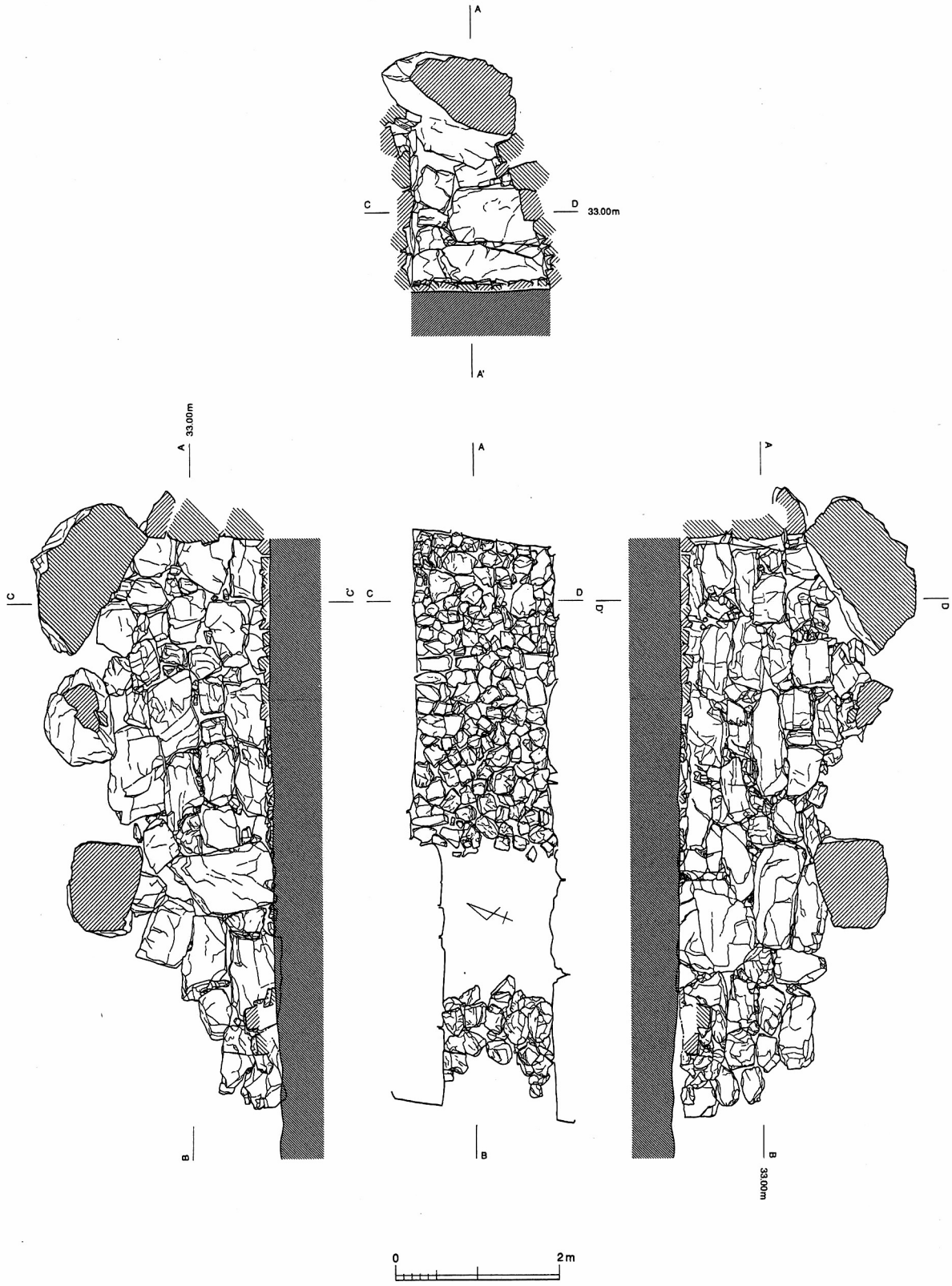
石室の横断面を見ると、標高の高い南側は内傾が著しく、標高の低い北側は2号墳程ではないが、側壁の上半分が若干外傾する様相を見せている。北側墳丘の流失が著しいため南側からの土圧で傾いたものであろう。奥壁上の天井石は、玄室側から奥壁側に傾斜したまま遺存している。東側墳丘に奥壁に使用されたと思われる石材が認められており、本来奥壁上の天井石は



1. 腐蝕土
2. 暗赤褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 赤褐色土
5. 淡赤黄色土
6. 暗黄褐色土
7. 黑灰色土
8. 灰色土
9. 暗褐色土
10. 黄褐色土
11. 黑色土
12. 赤褐色土
13. 黑褐色土
14. 暗黄色土
15. 黄色土
16. 暗褐灰色土



第64图 龍子向イ山1号墳 墳丘断面図



第65図 龍子向イ山1号墳 石室実測図



第66図 龍子向イ山1号墳 石室上面図

より水平に近く置かれていたものであろう。

石室の規模は、全長6.8m、玄室長3.75m、羨道長3.05m、奥壁幅1.6m、玄門幅1.45m、羨門幅1.4mを測る。主軸はN-70°-Eで、西向きつまり龍子向イ山古墳群と龍子長山古墳群の立地する両尾根で挟まれた谷の奥を望むような方向に開口している。

南側側壁の傾きが著しいことはさきに述べたが、基底石から北側へ内傾している。

石室の構築は、石材の積み方を見ると、まず玄室が造られその後に羨道が造られている。玄室についても構築の際基準としたであろう石が認められる。(そのうちの1石は袖石である。)

側壁の構築については、北側側壁では袖石が、南側側壁では袖石に対応する石が基準となっている。北側側壁についてみると、袖石の上端部が玄室部の側壁の第3石目の上端のラインと一致している。袖石から奥壁に向かって3石目(約2m)まではこの傾向が明瞭に見られる。また基底石の上端・2石目の上端のラインも通っている。袖石から2~3mについてはラインが乱れているが、最も奥壁寄りでは下の2石は基底石の上端と第3石の上端のラインを通している。

南側側壁についてみると、袖石に対応する石は玄門部より約50cm開口方向に寄っている。この石が南側側壁構築の基準となったことは明瞭である。つまり、玄室内南壁の2石目上端のラインが、この石の上端と一致している。そして、基底石の上端もラインが通り、基準の石の高さの2分の1の高さに積まれている。3石目の上端もラインが通っている。基準石の上に置かれた石は、その半分を基準石の上に乗せ、残りを奥壁側に乗せているが、玄室内の石よりは一回り大きいものを使用しており、その上端は3石目の上端ラインに一致している。4石目についても同様で、ラインが通っている。

奥壁の構築については、南側の基底石(高さ50cm、横幅1.3m)が基準となっていて、同じ高さの石を左側に据えている。この基底石の上端は、両側壁の基底石の上端のレベルと一致している。基準石の北側には基底石を含め4石が遺存しているが、基底石以外の3石については北側側壁のラインとは一致しない。次に羨道部の両側壁についてみると、南側壁では、各石積みの上端は玄室の側壁のラインと一致するが、石材が玄室内よりも小ぶりなものを使用している。反対に北側側壁では、玄室よりも大きな石を使用している。ただし半分は欠損しており、開口部では2石が遺存しているだけである。

羨道内には袖部より西へ1.7mの地点に閉塞石が認められるが、3～4石が残っているのみである。崩れた閉塞石の一部は、羨道内の床面で検出された。

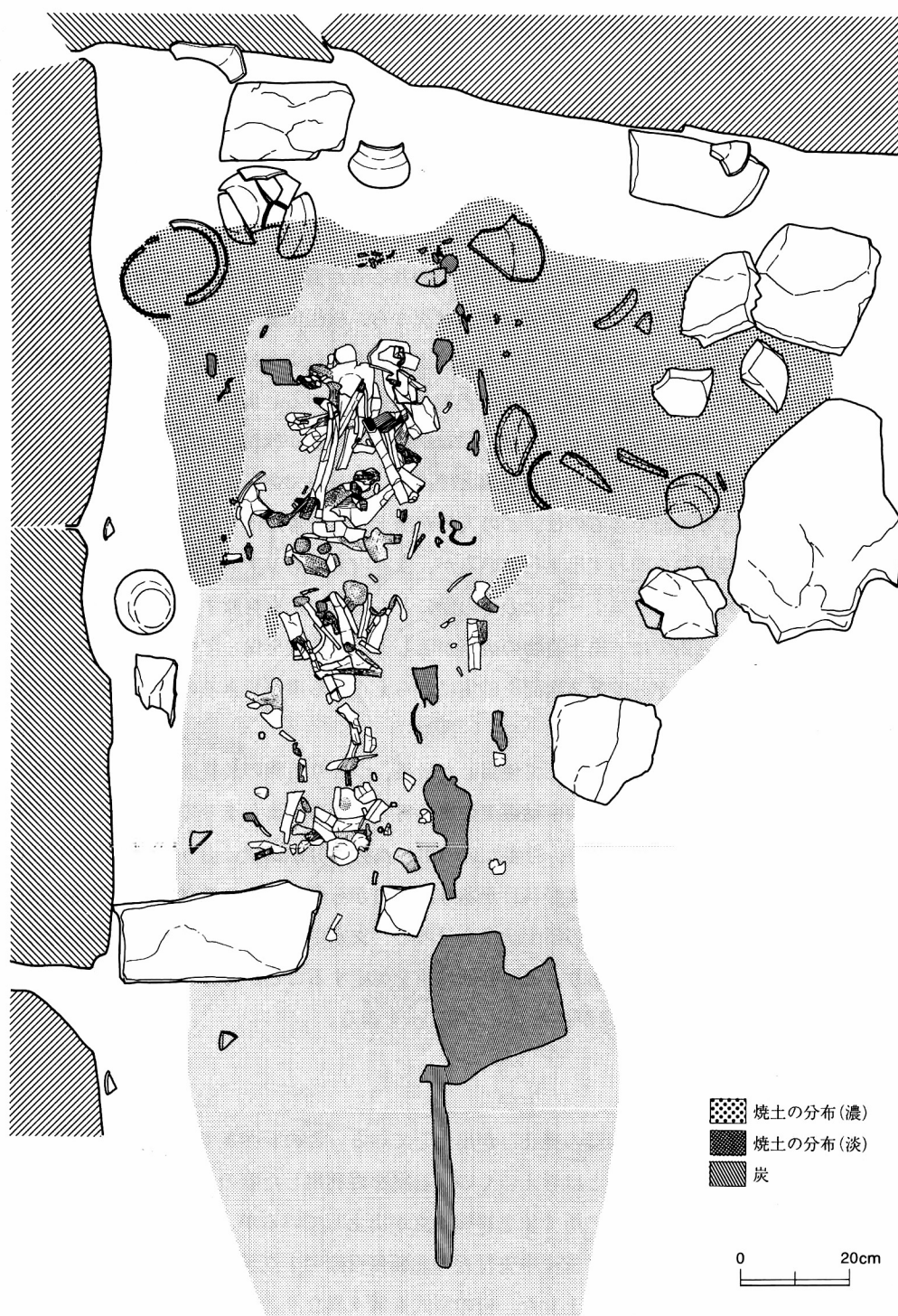
5. 遺物出土状態

玄室の床面には人頭大の石材を使用した敷石がみられ、この面が本来の埋葬面である。この面を第1次面と呼ぶとすると、この上方にあと2面の追葬面(同じく第2次面・第3次面と呼ぶ)が認められる。第1次面と第3次面のレベル差は約10cmを測る。ほとんどの石室内出土遺物はこの3面から出土しているが、第3次面の約20cm上方で土師器甕片(第83図87)が1点、更にその約20～40cm上方で須恵器椀4点(第84図82～85)が出土している。

第1次面は敷石面であるが、遺物は敷石あるいは敷石上で出土している。敷石間出土の土器は破片でしかも小片が多く、明らかに副葬されていたものが追葬の際に破損し、敷石の間に落ち込んだものである。鉄製品(44・49)、耳環(2・8)などが敷石間より出土している。

敷石上では土器は、杯蓋(7～13)、杯身(29～33)、高杯(43・45)・直口壺(60)・平瓶(71)などが出土している。いずれも須恵器である。平瓶は底面が欠損しており、口頸部を下にして敷石の間に突っ込むように出土している。この平瓶には土が堆積していたが、土の上には炭の堆積がみられた。その堆積状態から、元は副葬品として石室内におかれた平瓶が追葬の際に底面が壊れ、上下逆に敷石間に落ち込んだもので、その後第2次面で「火葬」が行われた時に炭が堆積したものであろう。

鉄製品では、鉄鏃・刀子が出ているが、その他に鋳留金具(51)、馬具(37～39)が出土してい



第67図 龍子向イ山1号墳 第2次面人骨検出状態図

る。馬具は轡(37)と鉸具付兵庫鎖(38・39)で、玄室中央の南壁寄りでまとまって出土しており、一括の副葬品と考えられる。

第2次面は、玄室の北東隅で検出した人骨に伴う面である。敷石面直上であるが、焼土を伴っているため第1次面とは別の面と考えている。

人骨は奥壁から約50cm、北側側壁より約25cm離れて、東西1m南北50cmの範囲で検出されており、骨の部位もある程度推測できる状態である。頭蓋骨は欠損しているが、橈骨・尺骨と思われる骨が奥壁よりで、大腿骨あるいは脛骨と思われる骨が玄室の中央よりで検出されており、比較的まとまって出土している。この骨は検出状況から、検出位置で埋葬されたものであろう。また人骨に伴って焼土と炭の分布が見られる。焼土は骨を囲むように分布しており、特に奥壁から30～90cmの範囲に見られる「コ」の字形の焼土は顕著である。炭はこのラインに沿うように分布している。人骨の足元と思われる部分には20cm四方の炭が検出された。炭を見ると、木材の目は石室の長軸に平行したものがほとんどであり、木棺材であるかもしれない。

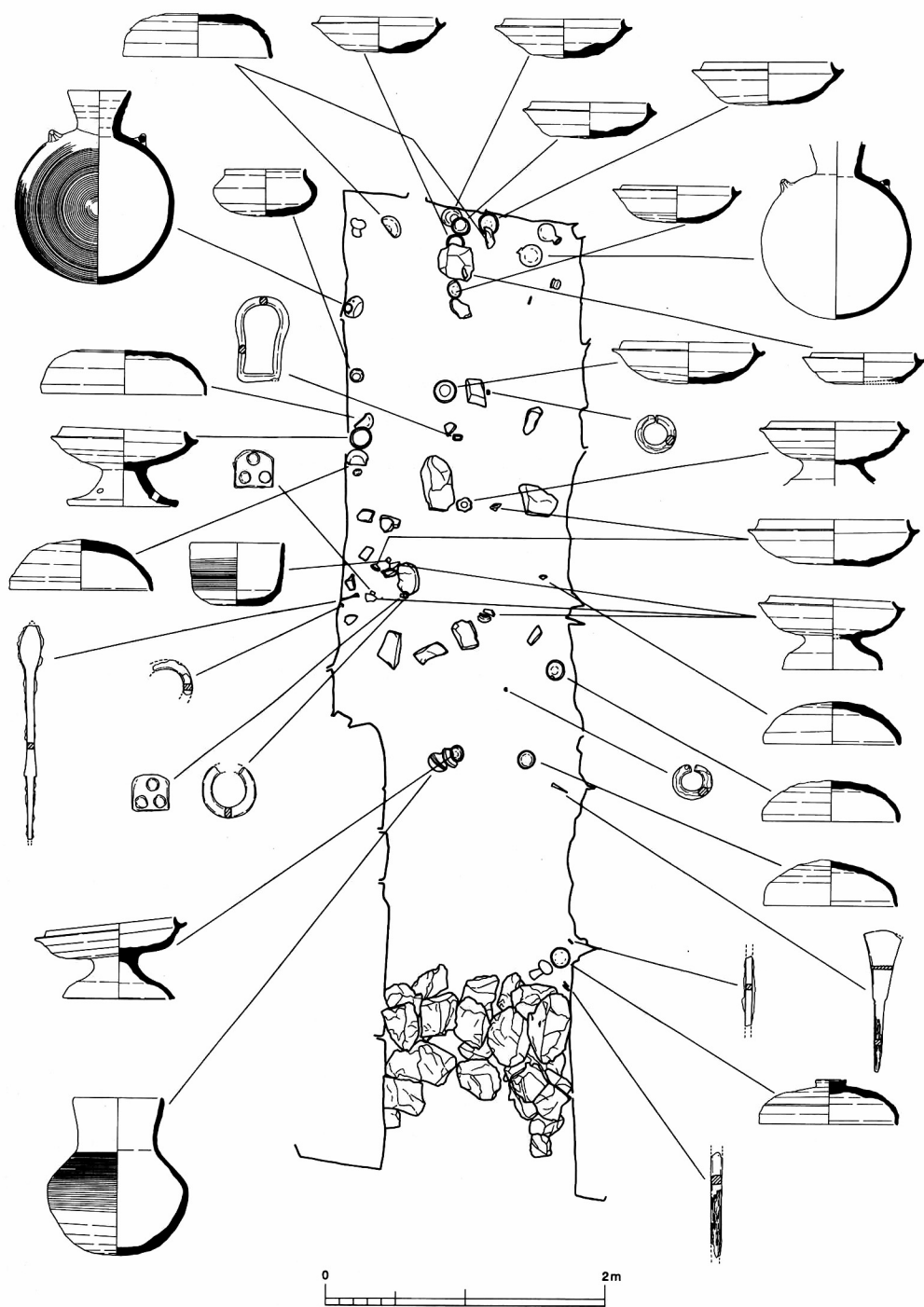
第2次面がはっきり確認できるのは、この人骨が出土した一帯だけである。焼土・炭とともに人骨が玄室内・羨道内を問わず出土しているが、玄室内では第1次面と第3次面の間の土の堆積が厚くないため、遺物が第1～3次のどの面にもなうのかを判断するのが極めて困難な状態である。また羨道内では、出土遺物の破損が著しく、原位置を保っていると考えられるものはほとんどない。したがって第2次面を確実にとらえられる事ができるのは、玄室北東隅の人骨が出土した部分だけである。

第3次面は、横穴式石室を墓室として使用した最後、つまり追葬の最終面である。敷石面より10cm上方である。遺物は、玄室の中軸線上の奥壁寄りで杯身がまとまって出土しており、北側側壁寄りで直口壺(58)、提瓶(67)、杯蓋(3・10)、高杯(40)が側壁に沿うように出土している。また、中軸線上に杯身(34)と高杯(41)があり、袖石から奥へ90cmの地点で、鉄製品や須恵器片が少量出土している。これらの出土状況を見ると、玄室中軸線より北側と南側の2箇所遺物が出土していない空白部があり、この範囲に棺を想定することができる。空白部の規模は、北側が長さ1.5m・幅30cm、南側が長さ1m・幅50cmを測る。

6. 石室の再利用

第1次面の約30cm上方で土師器の甕(87)が出土している。このレベルで出土した遺物はこの1点で、石室の埋葬に伴うものとは考えにくい。石室を再利用した際の混入であろう。

また敷石面のさらに上方60cmの所で須恵器椀4点が出土しているが、これも再利用時の遺物である。玄室東南隅で1点(82)、玄室中央付近の北側側壁際で1点(85)、羨道部内の閉塞石北側の側壁寄りで2点(83・84)が出土した。椀の型式も個々異なり、時期差が見られる。最も古い形式の椀(82)が4つの椀の中で高いレベルより出土しており、他の椀と同一面とは考えにく



第68図 龍子向イ山1号墳 第3次面遺物出土状態図

い。10世紀以降何度か石室が使用されたことがわかる。

石室の前方には長さ1.8m・幅1.2m位の平面が三角形に近い落ち込みがあり、黒色土が堆積していた。この黒色土は閉塞石まで続いている。中からは多数の土器片が出土したが、復元すると大甕1個体となった。この甕の破片は一部羨道内から出土しているが、副葬されたものが追葬の際に掻きだされたのではなくて、石室の前方での祭祀的な意味合いをもつものと考えられる。

1号墳の南側を巡る浅い溝状部分からも土器が出土しているが、復元できるのは広口壺(79)と三耳壺(80)のみである。時期的には、古墳の築造や埋葬などに関係するものではない。墳丘とくに北東部分や北西部分の墳丘裾からも土器が出土しているが、古墳時代に属する遺物については1号墳に伴うとは断言できない。上方にある2号墳・4号墳から流れ落ちてきたと考えられるものもある。また古墳時代に属さない土器も含まれており、後世に混じりこんだものである。

7. 出土遺物

(1) 土器

1号墳からは2号墳～4号墳と比べると、非常に多くの土器が出土しているが、閉塞石際で出土した土師器長頸壺1点と再利用時の土師器甕(87)の2点の土師器以外は全て須恵器である。器種は杯蓋・杯身・高杯・椀・短頸壺・直口壺・提瓶・平瓶・甕と多種類におよぶ。

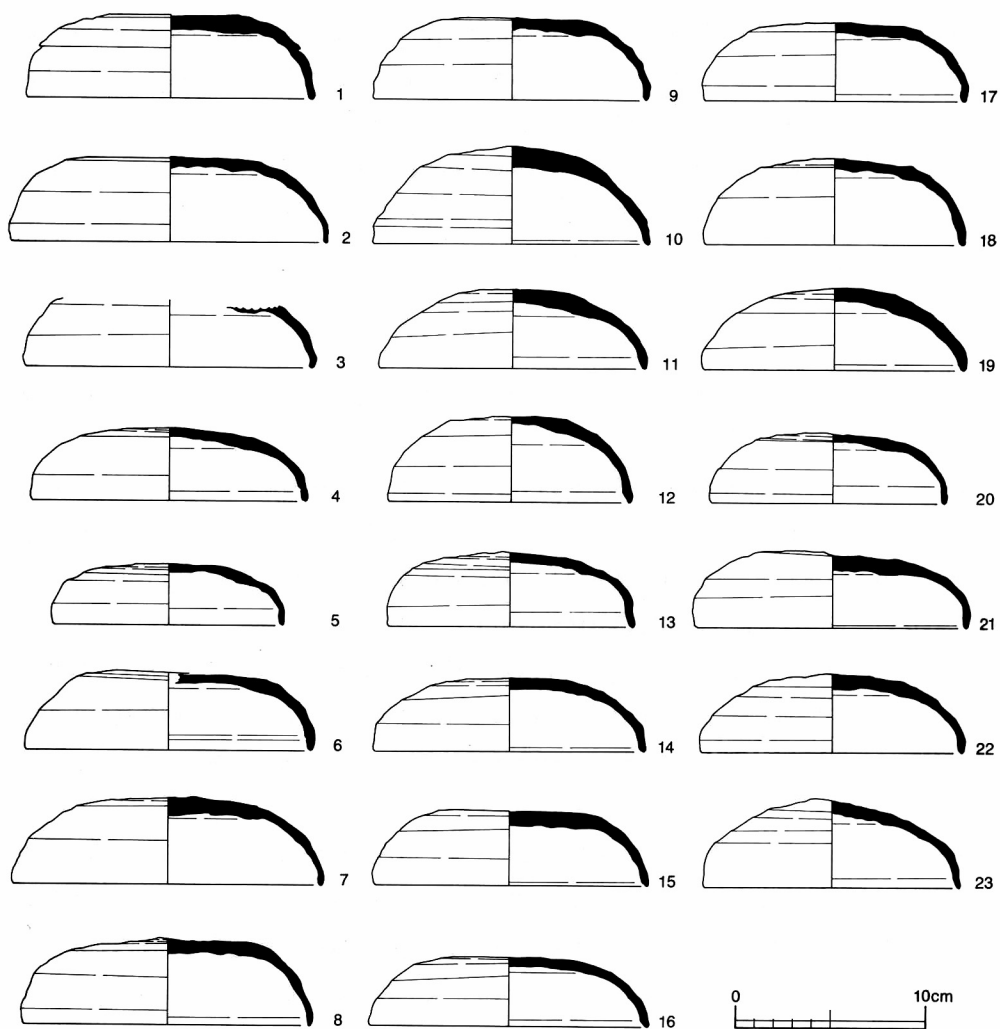
杯蓋(1～23)

杯蓋は総数23点を数えるが、若干の時期差が認められる。成形・調整方法を見ると、天井部外面はヘラ切りの後ヘラ削りを行い、外面の体部から口縁にかけてと内面をヨコナデで仕上げているのが一般的である。

(1)は石室外より出土したもので開口部の外で検出した。杯蓋の中では最も古い型式のものである。約4分の1が遺存しているだけであるが、体部には稜が残っている型式である。口径15cm・器高4.4cmを測る。(2)も破片の一部が石室外より出土しており、石室内第2次面出土の破片と接合した例である。口径16.6cm・器高4.4cmを測り、1号墳出土の杯蓋の中では口径の最も大きな部類に属する。(1・2)は杯蓋の中でも古い形態を有し、石室外から出土していることから、第1次ないしは第2次面での埋葬に伴う遺物が追葬時に破碎され、掻き出されたものであろう。

(3～5)は敷石面から破片が出土したもので、第1次面の埋葬に伴うものと思われる。(6)は1号墳から出土しているが、出土面は不明である。口径15cm・器高4cmを測り、口縁内面に1条の沈線が巡っている。

(7～13)は第1次面出土の杯蓋である。(7)は第2次面で出土した人骨の下から1片が出土



第69図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(1)

しており、この人骨より前の埋葬に伴うものであろう。最大径16.4cm・口径4.5cmを測る大型品である。(9)は口縁が5cm程欠損しているもののほぼ完形で、人骨の下から出土している。体部外面にろくろによるヨコナデが強く見られる。(10)は破片が第1～3次の各面から出土している。口径14.6cm・器高5.1cmを測り、他の杯蓋と比べると、口径に対して器高が高いもので、天井部はヘラ切り未調整である。(12)は焼け歪んでいるが、口径約12.6cm・器高4.7cmを測る。(13)も焼け歪んでおり、図面で口縁が外反しているのはこのためである。

(14～19)は、第2次面出土の杯蓋である。口径が14cm以下で器高が4cm以上(17～19)のものと、口径14cm以上でも器高が4cm以下のもの(14～16)の2種類に大別でき、(13)以前のものと比べると、やや小振りになっている。(20)は口径12.5cm・器高3.7cmを測り、小振りである。

口縁部はほとんど垂直に下がっており、天井部も薄く作っている。1号墳出土の杯蓋の中で器壁が薄いものの1つである。(14~16)の口縁部は外側に開いており、最大径が口縁端に求められるが、(17)では口縁端部はやや内傾している。

(21~23)は第3次面に伴うものである。(21)は最大径14.8cm・口径14cm・器高4cmを測る大型品である。焼け歪んでいるが、内面は二次焼成を受けたように釉がはじけ、白くなっている。(22)は天井部内面に一方向のナデを施している。

杯身(24~36)

総数15点出土しており、杯蓋が23点出土しているのに比べるとその数は少ない。追葬時の掻き出しも考えられる。

(24・26~28)は敷石間から出土したものである。(24)は口径15cm・最大径17.4cm・器高4.5cmを測る大型のもので、この杯身に被せることのできる杯蓋は(2)だけである。(2)は石室外からの出土であるが、追葬時の掻き出しと考えられるため、(2)と(24)はセットであったかもしれない。(25)はやはり開口部の外側から出土しているもので、同じく掻き出されたものであろう。口径14cm・最大径16cmと(24)に比べるとやや小さいが、器高が5cmと高く、容積は(24)を上回るものである。(24~26)は受け部の立ち上がりが約1.5cmあり、比較的長いものである。(28)は口径8.8cm・最大径10.8cm・器高2.8cmを測り、小型である。内面に朱が付着している。

(29~32)は、第1次面の敷石上面から出土した杯身である。(24~26)と比べると、受け部の立ち上がりが1cm前後短くなっている。(29・31)は、体部から底部にかけて四角い印象を与えるものである。(31)では立ち上がりが内傾しつつ、口縁端部で外反している。底部内面には同心円状の当て具の痕が見られる。(32)は立ち上がりが太く短くなっており(1cm未満)、口径も10.5cmと小振りなものである。

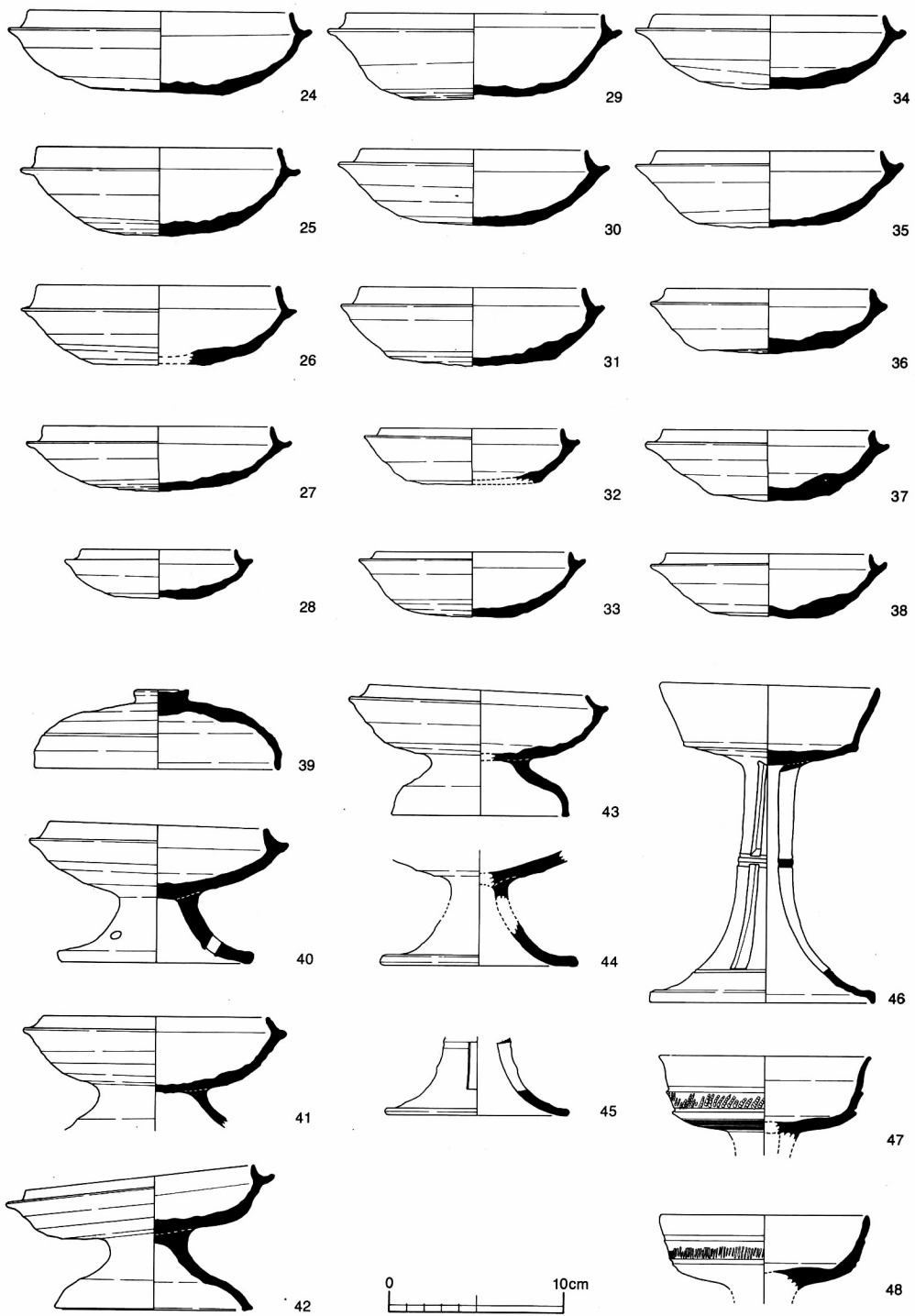
(33)は唯一第2次面に伴う杯身で、外面は部分的に表面が荒れており、二次的焼成を受けた感じをうける。立ち上がりが5mm程度短くなり、受け部が非常に浅くなっている。最大径13cm・口径11.2cm・器高3.7cmを測る。受け部に重ね焼きの痕跡が残る。

(34~38)は、第3次面に伴うものである。(34)は体部から底部にかけて丸味を帯びているが、他のものは体部が直線的である。

高杯(39~48)

1号墳から出土した高杯には、蓋1点(39)と有蓋高杯(40~43)と無蓋高杯(46~48)がある。

(39)は第3次面から出土しており、口径14cm・器高4.5cmを測る。口縁端部は若干内傾している。



第70図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(2)

(40)も第3次面から出土している。(39)とセットと考えることもできるが、出土地点が奥壁際と羨道内というように離れており、確実ではない。脚端部は丸く作り、脚部に直径7mm前後の円孔を3箇所を開けている。立ち上がりは、内傾し外反しており、太いものである。(41)も短脚の有蓋高杯であるが、受け部が丸く短いため、あまり蓋受けを意識していないような作りである。脚端は欠損しているが、(40)のような透し孔は認められない。(42)は第2次面より出土しており、杯部の大きなもので、最大16cm・口径13.4cmを図る完形品である。杯身の部分を見ると、口径の割りに器高が3.2cmと浅く扁平な感じをうける。脚は杯部から外反して広がってきたものが、脚の中央付近で逆に内反してきて端部に至っている。脚端部も平坦に作った上に調整の際にやや強くナデを施しているため、1条の凹線を施したようになっている。杯部と脚部とが接合の際に歪んで接着されている。(43)は第1次面に伴うもので、杯部の器高が4cmと深い。脚部は(42)の脚部下半分より屈曲させたような形のもので、透し孔はない。(44)は石室外及び9Tから出土したものである。脚端部は(40)と同じく丸く仕上げている。(45)も脚片であり、第1次面から出土している。方形の透しを待ち、透しの上端には1条の沈線が巡っている。

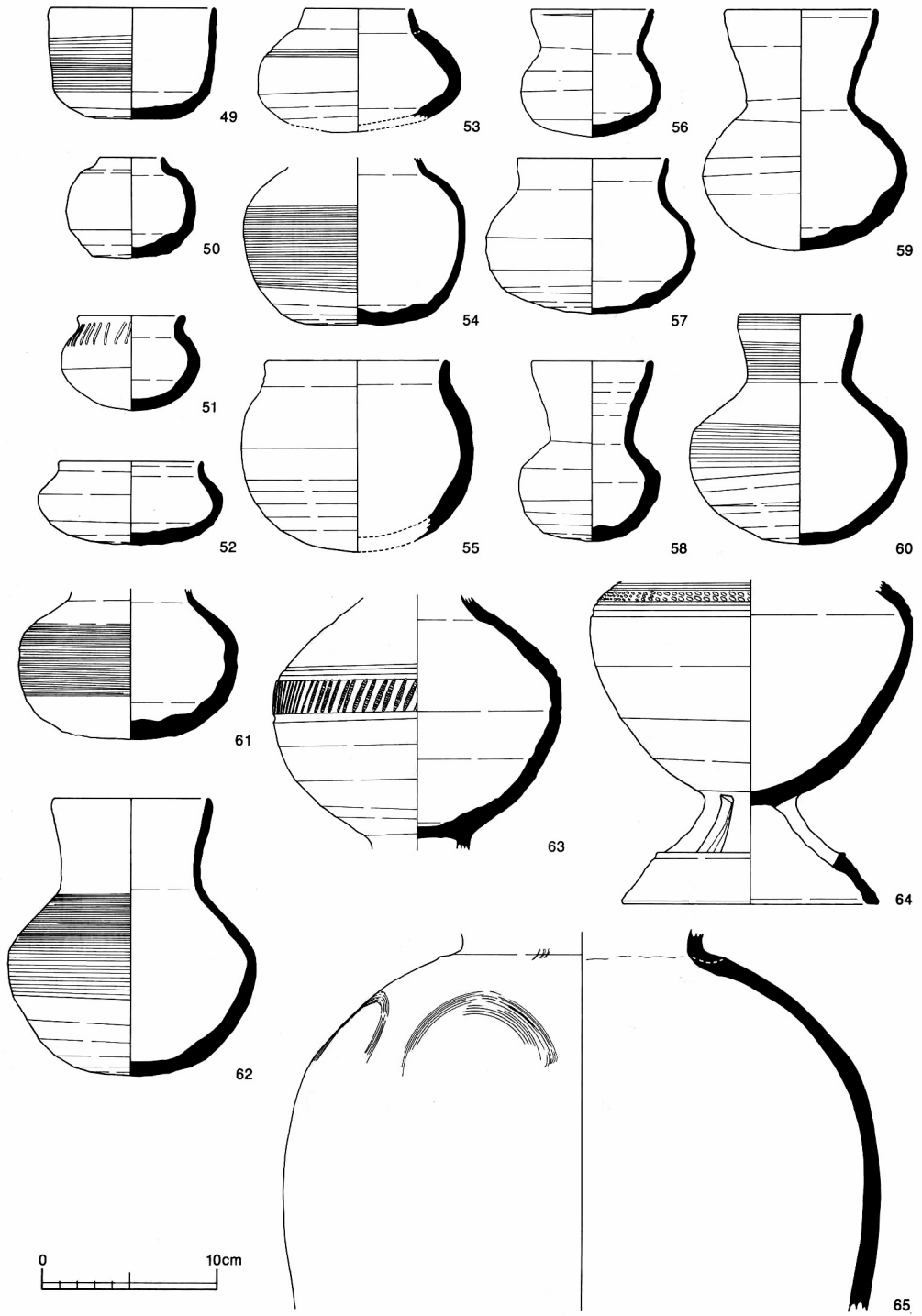
(44~48)は長脚無蓋の高杯であるが、脚部が残っているのは(46)のみである。(46)は第1~3次面と石室外から破片が出土しており、三方に二段の方形透しをもつ。上下の透しの間には2条の沈線を巡らす。下の透しの下方には浅い1条の沈線が巡っている。脚端部は外方へ広がった後下方に曲がっている。(47・48)は杯部体部に文様を巡らすもので、共に文様の上下を1条の沈線で区切っているが、文様面と段差があるため、2条の稜線が巡っているように見える。(47)はヘラ状工具による列点文を施し、杯部の底部にはカキ目を施している。口縁端部はやや外反する。(48)は櫛描きの列点文を巡らしている。カキ目は見られず、(47)より器壁が厚い。

椀(49)

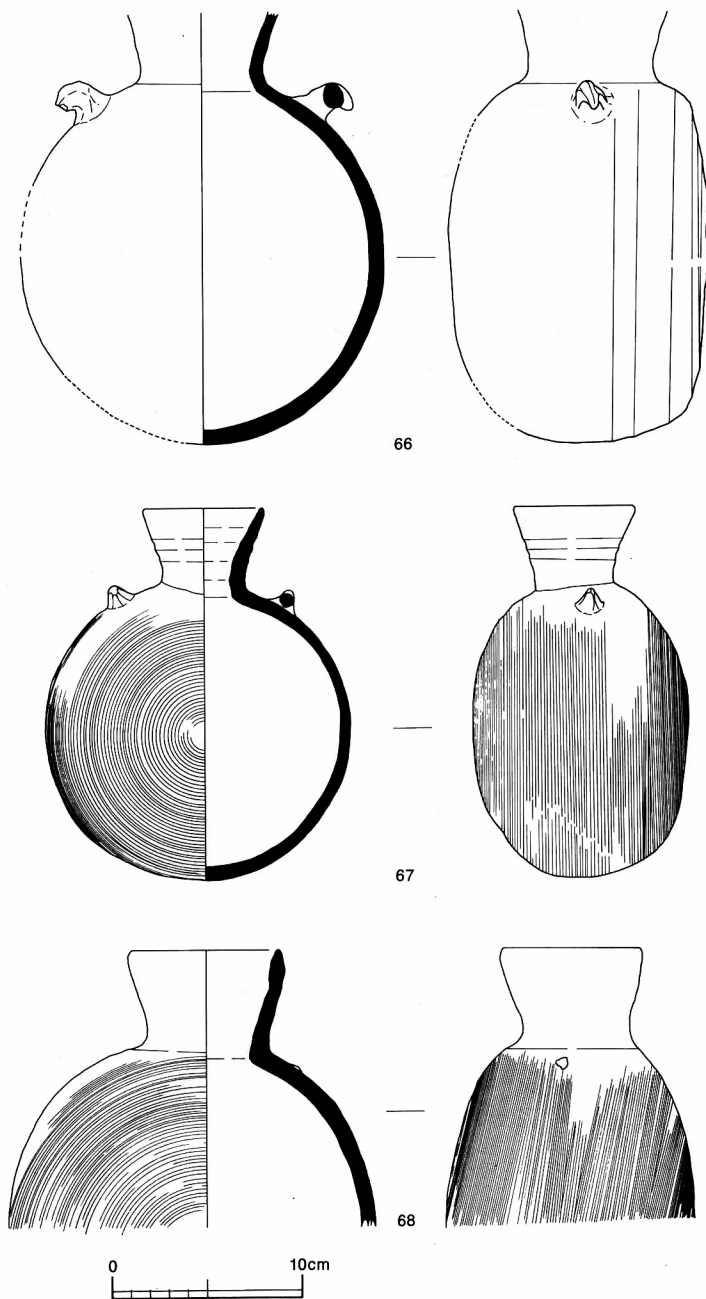
口径9.3cm・器高6.4cmを測るコップ形の須恵器で、出土面は第1~3次面にわたる。体部外面にカキ目を施している。焼け歪んでいる。

短頸壺(50~55)

(50)は小壺とでも称すべきもので、底部および胴部の下3分の1はヘラ削りが施され、上半分はヨコナデが施されている。(51)は閉塞石内から出土している。肩部が窄まり、口縁部は直立し、口縁端部に至ってはやや外反している。肩部から口縁部にかけてヘラ状工具による刺突文が施されている。(52)は第3次面からの出土で、(53)は石室外の出土である。(53)は3号墳から出土した短頸壺に近い形をしており、胴部上半には2条の沈線が巡る。(54)は肩部より下



第71図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(3)



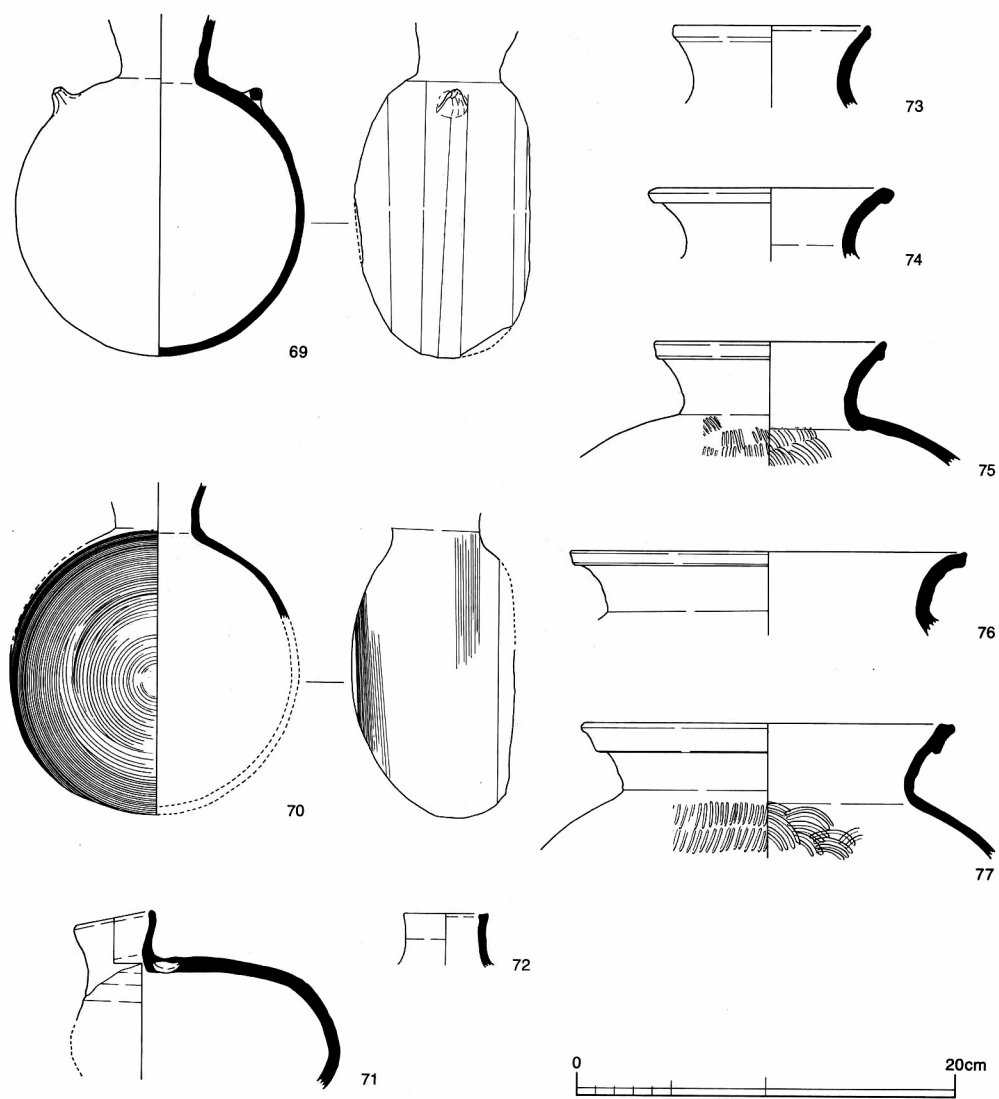
の胴部3分の2にカキ目が施されている。胴部の下方3分の1から底部にかけては回転ヘラ削りが行われている。(54)は器壁が厚く7mm~1cmを測る。

直口壺(56~62)

(56・62)は第3次面に、(57)は第2次面に、(59・60)は第1次面に伴う遺物である。(59)は第1次面・敷石間・石室外出土の破片が接合しているので、最初の埋葬に伴うものであるろう。(61)は9Tより出土しているが、1号墳に伴うものであるかどうかは不明である。短頸壺になるかもしれない。(63・64)は脚付きの壺で、共に石室外・開口部外からの出土である。(63)は脚付きの長頸壺で、胴中央部に楯状工具による刺突文が施されており、その上方に2条、下方に1条の沈線が巡っている。胴部下半はヘラ

第72図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(4)

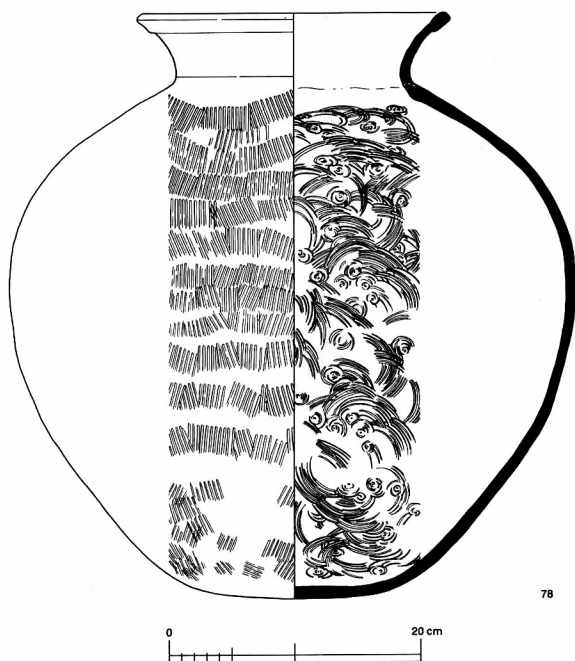
削りが施されている。(64)は脚部の三方に方形の透しを持つ長頸壺である。肩部には刺突文が巡り、その上下に2本ずつの沈線が巡る。



第73図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(5)

提瓶(66~70)

1号墳の石室内から出土しているのは(67)と(69)で、いずれも第3次面に伴う。(66)は5つの提瓶の中で型式学的に最も古いものである。体部両側の耳が鉤形に曲がっている。(67)は体部全面にカキ目を施している。耳は(66)より退化しており、鉤形の屈曲すら見せない。(69)も耳については同様で、体部上面はヨコナデ仕上げをしている。(68)は1号墳の東側墳丘上で出土しているが、2号墳出土の破片などと接合しており、1号墳に属するものではないようである。体部は全面カキ目を施している。耳は剥離しているが、(67)と同様な退化した型式のもの



第74図 龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(6)

を付けていたと考えられる。(70)も石室外出土である。体部にカキ目を施している。欠損部分が多いが、耳はその痕跡すら留めていない。

平瓶(71・72)

(71)は第1次面出土で、底部が欠損している。全般的に丸味があり、稜線を見ない。口縁は外方に広がり、端部付近で内傾し、漏斗状をしている。体部上面に小さな円形の粘土粒を口縁部を挟んで各1個ずつ貼り付けている。(72)は平瓶の口縁部かと推測される破片で、端部は平坦に仕上げ、端部の中央を調整の際強く押さえている。

甕(65・73~78)

(65)は1号墳の東側墳丘から出土しており、2号墳に伴う遺物の可能性が大である。口縁部と胴部下半は欠損している。外面はヘラ削り調整がなされ、内面はナデで仕上げられている。胴部上半には櫛状工具により下向きに開いた半円形の文様がつけられている。出土した破片が少ないため文様は3単位分を認めるだけであるが、全周に施されていたとすれば7ないし8単位であったろうと推測される。

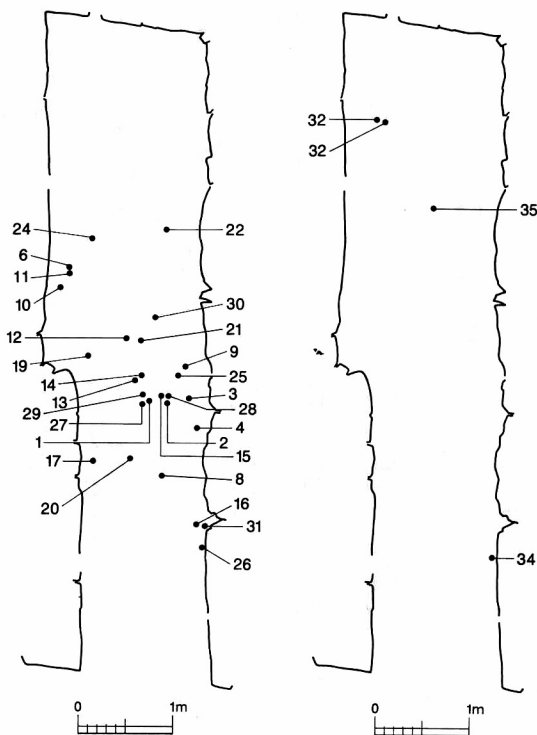
(73~78)は全て石室外出土である。(73)は外反した口縁部が端部に至って直立するもので、頸の短い提瓶につけられる口縁部に似ている。(74)は9 T出土の破片と接合しており、西側墳丘から9 Tまでの広範囲から破片が出土したものである。(75)は8 Tからの出土であるため、1号墳に伴う遺物ではないであろう。(78)は石室前方の浅い窪みから出土しており墓前祭祀に伴う遺物と考えることもできる。口径約24cm・最大径約43cm・器高45cmを測る。体部外面は縦方向の平行叩き目が残り、内面は同心円の叩き目を残している。

(2)鉄器

鉄鏃(1~31)

鉄鏃は様々な形式のものが出土している。(1)は有茎腸袂三角形式の鉄鏃で、深い逆刺を有

する大型品である。完存しており、全長14cmを測る。(2)も同じく有茎脇挾三角形式の鉄鏃であるが、逆刺は浅い。(1)より短く全長11cmである。(1)と(2)は羨道内落石間より出土している。(3)は圭頭斧箭形式で平造りである。(4・5)は圭頭斧箭形式というよりも方頭斧箭形式とした方が良いと思われ、茎に木質が遺存している。(6)は(3)と同じく圭頭斧箭形式であるが、切先が(3)よりも丸味を帯びており、刃部の長さは(3)より長い。(7)は脇挾を持たない形式のものである。(8)は欠損部分が多く、逆刺の有無は不明であるが、鏃身は両丸造りである。茎と鏃身との境に棘状の篋被を持つ。(9)も(2)と同様浅い逆刺をもつ有茎脇挾三角形式の鏃であるが、棘篋被を持つ。茎部には木質が遺存している。(10)は柳葉形式の鏃であるが、刃部は銹化によって膨れており、刃部の厚さを割り出すことはできないが、恐らく両丸造りであったと思われる。(11~13)は同じく柳葉形式であるが、(10)より刃部が細身でしかも片丸造りである。(12)では棘篋被が見られる。(11)では銹のため篋被は不明である。(14~17), (19~27), (30)は茎である。茎の太さ・形態から多種類の鏃があったと想定される。(14)は(13)の隣で、同一面でも出土しており、同一個体である可能性が大である。棘篋被のある茎である。茎の一部に木質が遺存している。(15~17)も(11~13)のような柳葉形式の鏃の茎であろう。(18)は深い逆刺の付く両丸造脇挾三角形式である。(1)と同形式であるが、一周り小さい。

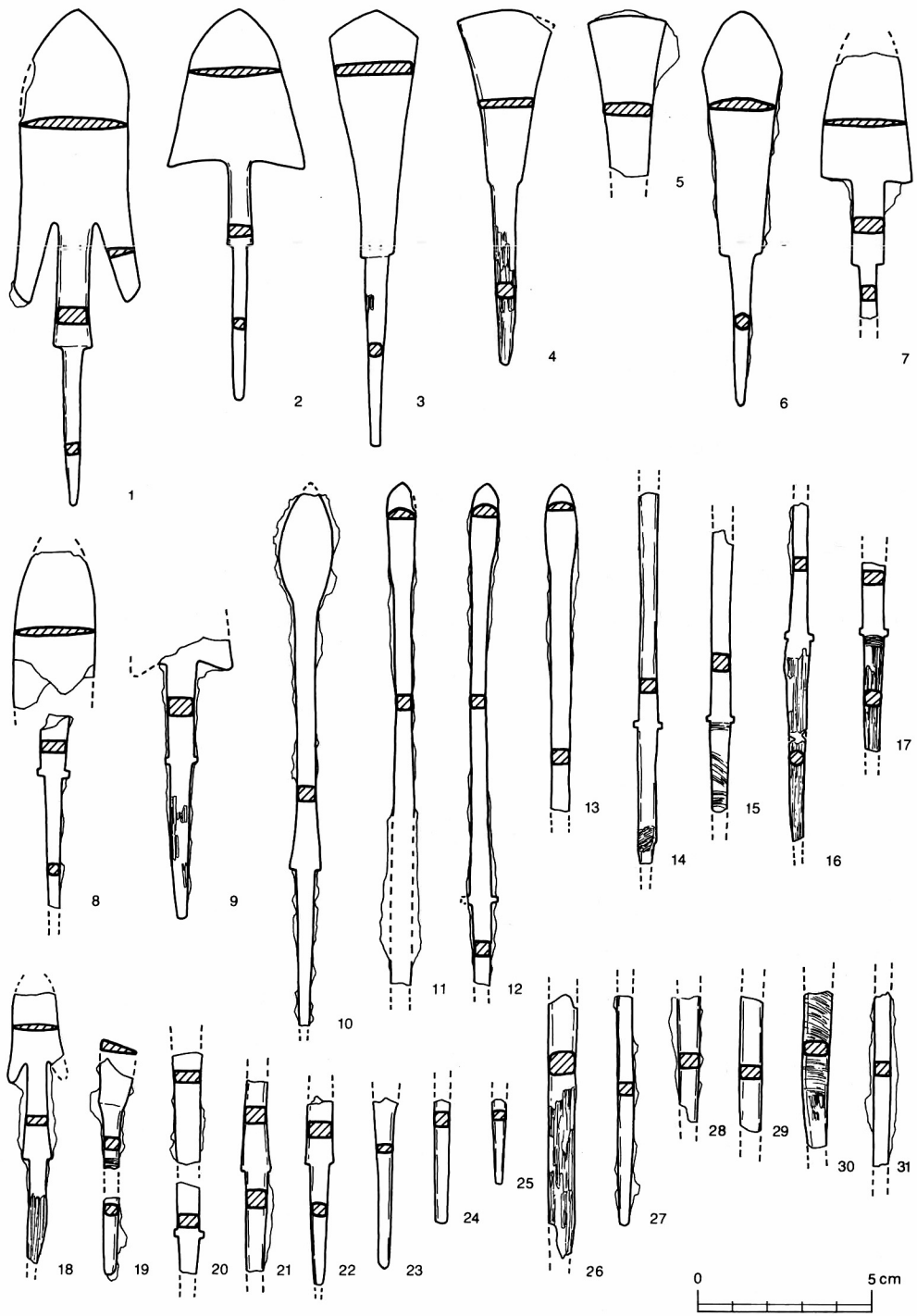


第75図 1号墳出土鉄器分布図(1)[鉄鏃・刀子]

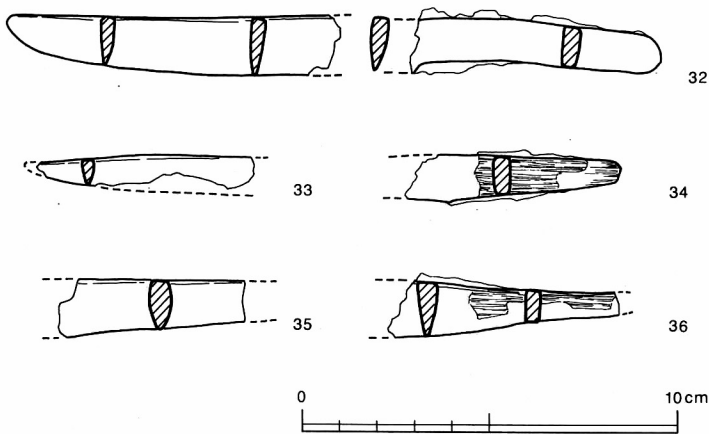
1号墳から出土した鉄鏃は、茎に木質が遺存しているものと遺存していないものがあるが、本来は矢柄に装着された状態で副葬されたものと思われる。

刀子(32~36)

刀子は、全部で5点出土しているが、全体のわかるものは(32)1点だけである。(32)は第2次面の玄室内北東隅で検出した人骨の下から出土しており、第1次面に伴うものである。2片に割れているが、同一個体である。平棟造りで全長16~18cmと推定される。茎側の破片には関が見られるが、刃部側の方に関を持つ片関造りである。(33)は切先のみである。(34・36)はともに茎で木質が遺



第76図 龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(1)〔鉄鏃〕



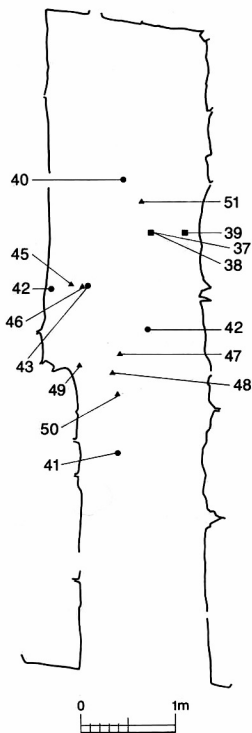
存している。(36)は刃部に近い部分まで遺存しているが、明瞭な関は見られない。(35)は刃部の一部と考えられるが、錆膨れのため刃部が丸味を帯びている。刀子は全て平棟造りである。

馬具(37~39)

第77図 龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(2)〔刀子〕

(37)は轡で、片方の鏡板が欠損しているが、引手・銜は完存している。鏡板は長径8.3cm・短径6.4cmの素環で、一方に長方形の立間を付けている。銜は径7.5mmの鉄の棒の両端を曲げて環にした長さ10cmのものを2本繋げたものである。鏡板と引手はこの銜の両端の環によって連結している。引手も径9mmの鉄棒の両端を環状に曲げた長さ19cmのもので、銜に繋がらない側は約45度の角度を以て曲げられている。

(38・39)は鉸具付きの兵庫鎖で一對のものである。(38)にはU字形の留金具が付いている。錆のためU字形金具に付属する鉸は欠損していたが、一方に3個ずつの鉸が付いていて、木製の壺鍔が付いていたものであろう。(38)は鉸具に、径6mmの鉄棒を環にしてU字形に曲げた鎖状のものを三連つなげ、U字形の留金具を繋いだものである。(39)は(38)から鎖状金具一連とU字形金具が欠けたものである。錆化によって欠損したのであろう。

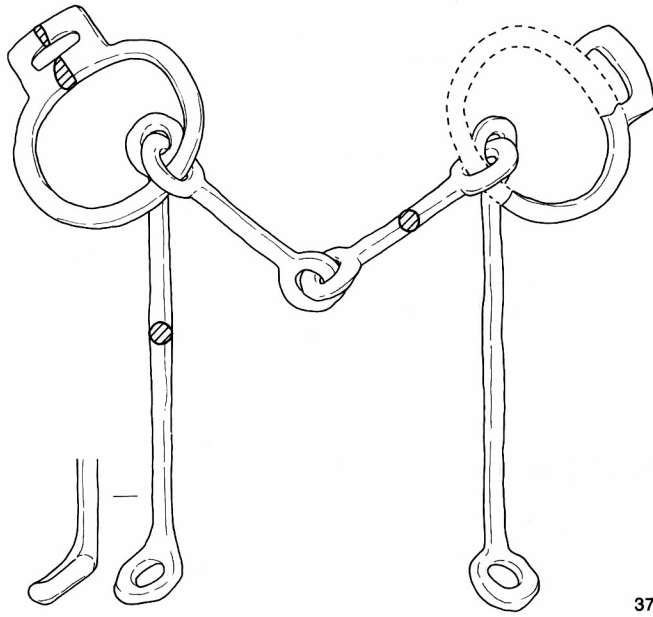


第78図 1号墳出土鉄器分布図(2)
〔馬具・鉸具・鉸留金具〕

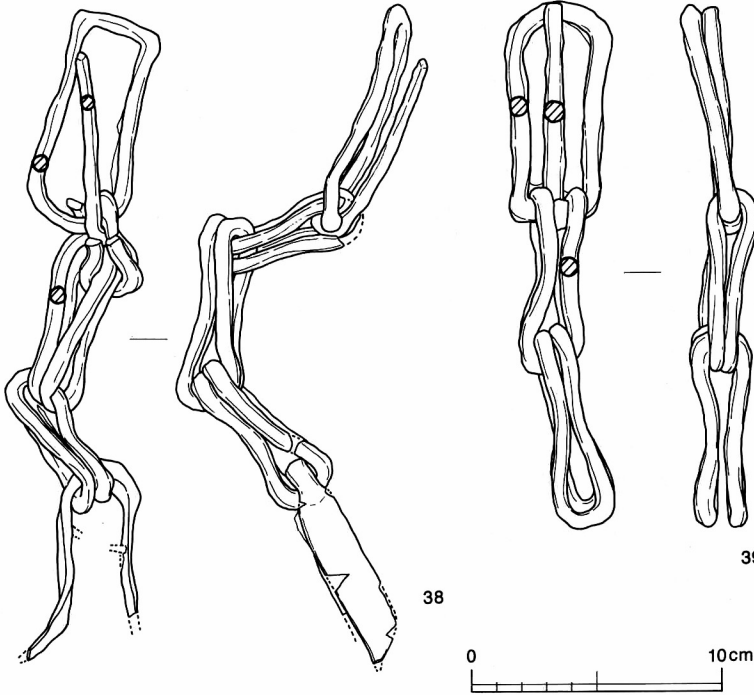
鉸具(40~44)

明瞭に鉸具と判断できるのは(40・41)である。長さ6cm幅5.7cmの、円形と方形を付けたような形態をしている。出土位置は、(40)は玄室内中央部の第1次面、(41)は羨道内落石上である。両者とも原位置を保っていない可能性が大きい。(42)は(40・41)と同じものと推定される。(43・44)は径約4cmの円環の一部で、断面は端部が丸い長辺6mm短辺4mmの長方形をしている。

鉸留金具(45~51)

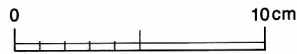


37



38

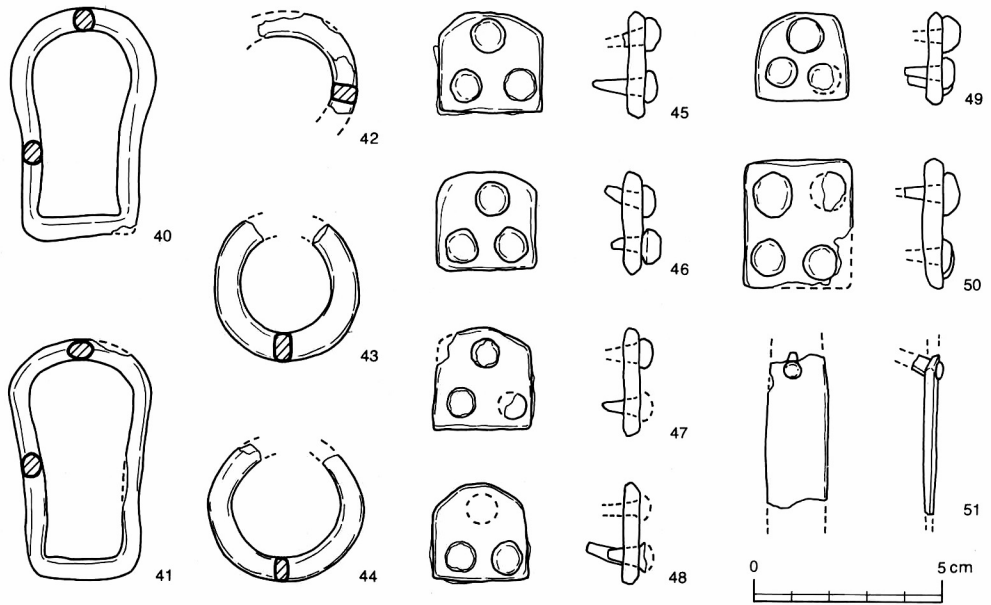
39



鉤留金具は7点出土している。(45～49)は長方形の一片に台形を付けた六角形をしており、台形の部分に1つ、長方形の部分に2つの計3つの鉤を打っている。(50)は方形の金具に4つの鉤を打ったもので四点鉤はこの1点のみである。以上の6点は羨道内から玄室にかけて出土しているが、袖石際の約1 m位の範囲に集中している。出土面は第1～3次面にわたっているが、あまり大きく移動はしていないようである。もともと単独で副葬されたものではなく、他の副葬品の付属として存在したため、本体が動かされたとしても、金具相互の位置関係は動かなかったであろう。

(51)は欠損部分が多いが、2つの鉤を持つ金具だと思われ、長方形の鉄板に1個

第79図 龍子向イ山1号墳出土鉄器実測測図(3)〔馬具〕



第80図 龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(4)〔鉸具〕

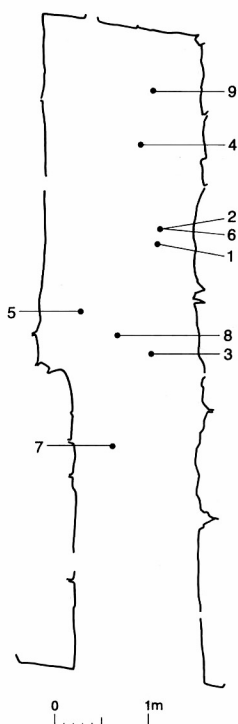
ずつの鋳を打ったものである。(45～50)とは出土位置が離れているため、同じ副葬品に使用されたかどうかは明らかではない。

(3) 耳環(1～9)

耳環は9点出土している。耳環(1・2)は共に金環で、銅芯に金箔を張ったものである。両者とも15cmと離れず第3次面から出土している。また金環はこの2点のみであり、重量も30.1gと同じであることから、一対のものと考えられる。またこの2点は馬具(37～39)と同じ場所から出土しているため、一括の副葬品と考えられる。

耳環(3～8)は銅芯に銀箔を張った銀環であるが、(3)は銀箔の上にさらに鍍金を施している。(4)は銀環であるが、(3・4)とも第3次面から出土しており、重量も1号墳で出土した耳環の中でもっとも近い値をしている。出土位置は離れているが、本来は一対のものかもしれない。(5・6)も重量が23.7gと23.1gと近く一対のものである。第1次面あるいは第2次面の埋葬に伴うものと考えられる。(7)は唯一羨道内より出土している。羨道内に崩落した閉塞石の上から鉸具(41)とともに出土しているが、原位置を保っていないと思われる。(8)は敷石から出土しているが、出土位置・重量などを考慮すると対になるものは見当たらない。

(9)は他の耳環と異なり、鉛環である。他の耳環は、金箔・銀箔が一部でも遺存しているが、(9)は全面白く錆化していて、一見して他の耳環とは異なっている。第1次面から出土している。



第81図 1号墳出土
耳環分布図

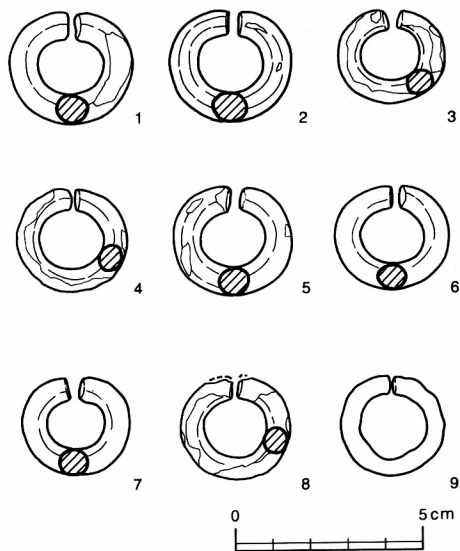
(4) 再利用時の遺物

1号墳の石室は、追葬が終ったのち後世にも使用され、若干の遺物が出土している(79~85・87)。

(87)は土師器の甕で玄室内より出土しているが、第3次面よりもさらに、上方からの出土である。約2分の1が遺存している。全体的に器壁が剝離しているため調整が不明瞭であるが、体部には不定方向の粗いハケ目(1cmに4条位)が施され、口縁部はヨコナデ、体部内面はナデが施されている。口径15.5cm・腹径15.4cmを測り、器高は底部が欠損しているために推定ではあるが13.8cm程度と思われる。

(79)は墳丘南側を巡る溝状部分に堆積した黒色土中から出土した広口壺である。口縁端部および底部は欠損している。肩部および胴部は直線的で、肩部は鋭角に屈曲する。胴部下半は回転ヘラ削りを行い、その他はヨコナデ調整を施している。口頸部は広く外反し、口縁部に至っては更に外に広がり、水平に近くなる。

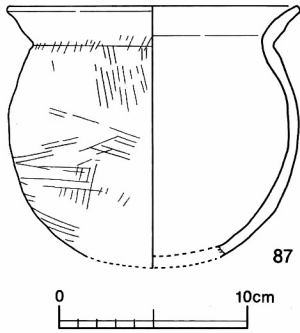
(80)も同じ場所から出土した三耳壺である。口頸部と底部が欠損している。肩部は丸く稜をなさない。肩部上半分と胴部下半は回転ヘラ削りがなされており、それ以外の部分にはヨコナデ調整がなされている。胴部下半分の底部に近い部分では、粘土の継ぎ目が明瞭に見えるほど粗いヨコナデがされている。耳はカタカナの「フ」の字形をしており、端面は全て面取りがなされている。実測図の右側の耳は欠損しており推定復元である。耳を壺本体と接合する際についたナデが見られる。



第82図 龍子向イ山1号墳出土耳環実測図

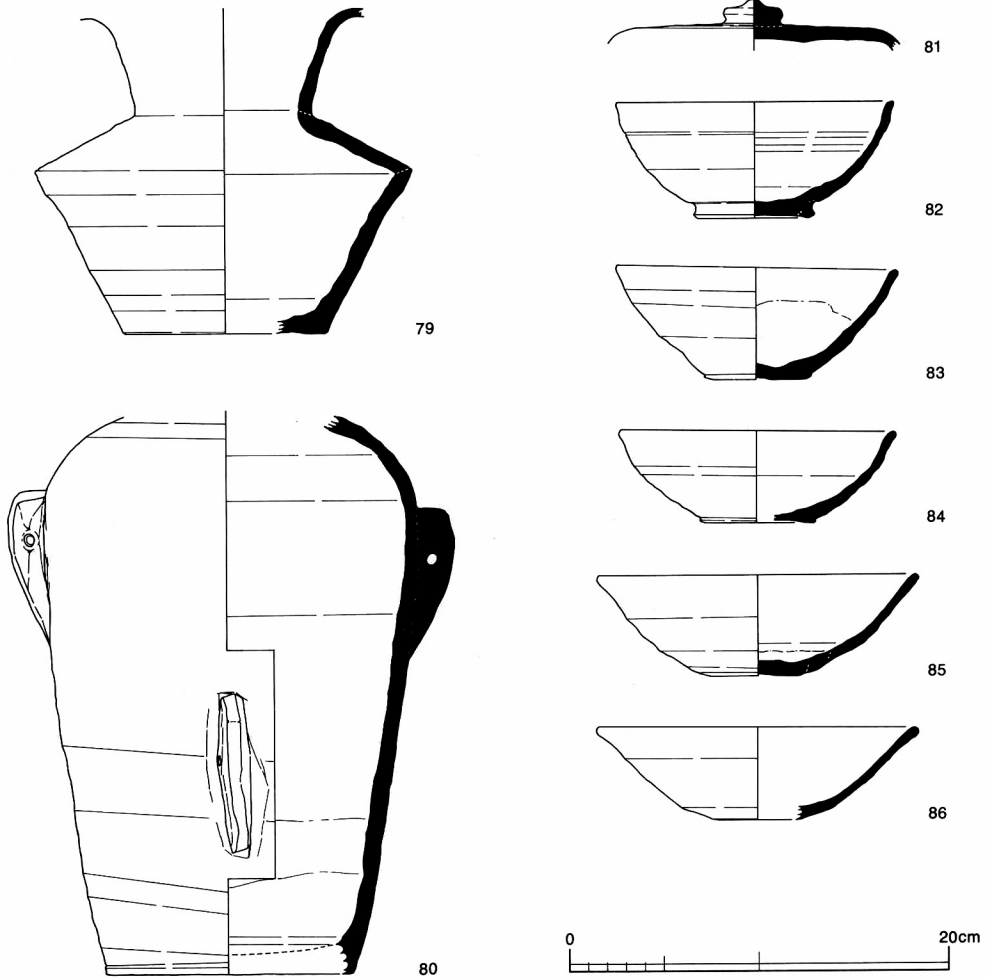
(81)は宝珠つまみがついた杯蓋であり、開口部前方から出土している。つまみはまだ宝珠状を呈しているが首が短いものである。

(82~85)は石室内出土の椀である。(82)は口径14.5cm・器高6.1cmを測る。平底に糸切りの輪高台を貼り付け底としている。体部に比べると口縁部が若干厚くなっており段をなす。玄室内の南東隅近くで出土している。(82~85)のう



第83図 1号墳出土土師器

ちで最も出土レベルが高い。(83・84)は羨道内の閉塞石寄り、北側側壁際で出土している。(83)は焼成が甘く、調整はヨコナデがされていることが推定できるだけである。口径15cm・器高6cmを測る。(84)は低い高台を持ち、底部は糸切りである。体部上面から口縁部にかけては外反しており、端部は丸く作っている。(85)は玄室内の北側側壁際、袖石から1.5m奥壁に寄った地点から出土している。全体の4分の1が欠損している。底部は糸切り未調整で、体部は内外面ともヨコナデが施されている。(86)も(85)に似た碗であるが、1号墳の東側墳丘から出土しており、1号墳ではなく2号墳に伴う遺物かもしれない。



第84図 龍子向イ山1号墳出土 再利用時の須恵器実測図

8. 小結

龍子向イ山1号墳は、前述したように長軸13m・短軸11mの楕円形の墳丘を持つ円墳で、古墳群中最も大きな横穴式石室を埋葬施設とする。南支群に属する3基の中では最も下方に位置している。南支群については、その石室の形態などから1号墳・2号墳・4号墳の順に構築されたものと考えられる。

1号墳からは古墳群中最も多くの遺物が出土しており、須恵器・土師器・鉄鏃・鉄製刀子・馬具・鉸具・鋌留金具・耳環など多種にわたっている。

想定される埋葬面は3面あり、第1次の埋葬面は敷石面、第2次面は人骨の検出面、第3次面は更に上層の追葬面が認められた。遺物は各面から出土しているが、異なった面から出土した資料が接合した場合は、最も下層から出土した破片の埋葬面に伴う遺物として取り扱った。しかし、第1次～第3次面のレベル差は10cmしかなく、特に羨道部分については破片の移動も激しく、原位置を保っていると断定するのは難しい状態である。従って出土面の認定に誤りがある可能性がある。

遺物は古墳時代の埋葬に伴うものとして、須恵器・土師器・鉄製品・耳環がある。1号墳出土の須恵器杯蓋・杯身のうち最も古い型式のものは、石室の開口部の外から出土している。これは第1次の埋葬に伴う遺物が、追葬が行われた際に石室外に掻き出されたものであろう。この他にも石室内出土の遺物が石室外出土のものと接合する例が認められ、追葬時の掻き出しが多かったことを示している。

第1次面の敷石の間からも多くの遺物が出土しており、須恵器の他にも鉄製品・耳環が見られる。これらについては敷石面での埋葬時に伴う遺物が落ち込んだものと考え、敷石面の遺物と同じ扱いを行った。敷石を敷く以前に埋葬を行った可能性もあるが、調査では積極的な根拠が見出せなかった。従って敷石面での埋葬を第1次埋葬と考えるものである。

第2次面では、人骨が炭・焼土を伴って、奥壁寄りの北側側壁際で検出された。この人骨の頭蓋骨は欠損しているが、橈骨など手足の一部と思われる骨が遺存しており、原位置を保っていると考えられる。検出状況から奥壁方向に頭を向けた、東枕で埋葬されたものと推定される。足元と考えられる付近で、棺材と思われる炭が出土している。また焼土も人骨を取り囲むように焼けの強い部分が「コ」の字形に分布し、その内外も明瞭ではないが焼土が見られる。以上のような状況から、この面で遺体が焼かれたと考えられる。この上面にも一時期新しい追葬面(第3次面)がある。第3次面出土の遺物が古墳時代後期に属するものであることと第2次面の出土遺物から、第2次面も古墳時代後期と考えられる。

本例のように「遺体を焼く」という行為を「火葬」と称するのは、水野正好氏の述べているように^{註1)}、「仏教における火葬」と区別する意味で好ましくないが、適切な用語がないためここでは便宜上「火葬」という言葉を使用するものとする。火葬は、文献上では僧道昭が最初と

されるが、龍子向イ山1号墳・2号墳の例は、それを遡る「火葬」の一例である。「火葬」の始まりを扱う際に持ち出されるものとして、聖神社2号墳の調査に始まる「カマド塚」・「横穴式木芯室」・「横穴式木室」などと呼ばれる埋葬施設がある。名称は研究者によって異なっているが、ここでは「横穴式木室」を使用するものとする、「横穴式木室」でも焼けているものと焼けていないものがあるが、焼けているものは龍子向イ山1号墳・2号墳同様に僧道昭の例を遡る「火葬」例である。「横穴式木室」の構築時期は概ね6世紀後半から7世紀初頭であり、龍子向イ山1号墳・2号墳と同一時期である。また龍子向イ山1号墳では「火葬」面上に追葬面(第3次面)が存在するが、この面では明瞭な「火葬」の痕跡は認められず、「火葬」から「非火葬(横穴式石室内での通常の埋葬)」へ変化していると考えられる。つまり1号墳では、「非火葬」→「火葬」→「非火葬」という葬法の変化が認められ、この変化も「横穴式木室」に見られる「火葬」→「非火葬」という変化と一致したものと考えられる。以後のように龍子向イ山1号墳・2号墳の「火葬」例と「横穴式木室」の間には共通点が多い。この「火葬」の問題については、構造・社会背景・出現の契機など解明しなければならない問題が多くあるが、現時点で論を進めるには力不足であり、石室内「火葬」の一例として報告するに止めたい。

鉄製品のなかでは馬具が注目される。轡1点と兵庫鎖2点であるが、鉸具類も馬具に伴うものかもしれない。馬具とともに金環(1・2)が出土している。馬具と金環は一括で副葬された可能性が大きく、1号墳に埋葬された人物のなかで最も上質な副葬品を有していたと考えられる。

石室開口部外から須恵器甕片がまとまって出土している。2号墳でも同様な状況が見られるが、墓前祭祀が行われたのかもしれない。

1号墳から出土した遺物、とくに須恵器杯蓋・杯身から構築時期はTK43頃に求められ、TK217まで追葬が行われたと考えられる。従って1号墳は6世紀後半から7世紀初頭まで使用され、耳環のセットなどから6回以上の埋葬があったと推測される。

古墳時代の埋葬が終わった後、後世に石室が再度利用されている。敷石面の上方50~70cmで須恵器椀が4点出土しているが、森内秀造氏によると⁽⁸²⁾(83)が大陣原あるいは緑ヶ丘周辺で焼かれた製品、(85)が魚住古窯址群の製品とされ、12世紀半ばないし後半に比定されるものである。石室の再利用の目的については不明である。

なお1号墳は調査終了後、日本道路公団と協議の結果現地保存されることとなり、石室内に砂を入れて埋め戻されている。

註1) 水野正好 「蒲生郡日野町小御門古墳調査概要」 1966 滋賀県教育委員会

註2) 森内秀造 「兵庫県相生古窯址群について—平安時代の窯址を中心に—」

第8表 龍子向イ山1号墳出土土器観察表

No.	器種・器形	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴	備考
					口径	器高		
1	須恵器 蓋	黒色粒を含む密	良好	(内) 灰白～青灰色 (外) 灰白～青灰色	15.0	4.4	体部外面に稜が巡る。天井部はへら切りの後、ナデ調整を施す	口縁部約3/4欠損
2	須恵器 蓋	内面に径1～4mm程度の長石含む	良	(内) 黄灰色 (外) 灰～灰白色	16.6	4.4	天井部は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す	口縁部約2/3欠損
3	須恵器 蓋	径1mm～4mm程度の白色粒と、3mmの黒色粒を含む	良好	(内) 褐灰色 (外) 灰～褐灰色	15.1	(残存) 3.5	ヨコナデ調整	天井部欠損やや歪んでいる
4	須恵器 蓋	径2mm程度の白色砂粒と黒色微砂粒を含む。密	良好	(内) 明緑灰色 (外) 青灰色	14.4	3.8	天井部は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。 体部内面に沈線が1条巡る	完形
5	須恵器 蓋	径2mm程度の石英と黒色粒を含む	良	(内) 灰白色 (外) 灰白～淡黄色	12.0	3.2	天井部は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す	口縁部約1/3欠損
6	須恵器 蓋	径1～3mm程度の石英・チャートを含む	良	(内) 灰白色 (外) 明緑灰～灰色	15.0	4.1	天井部は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。口縁部内面に凹線が1条巡る	口縁部約1/3欠損
7	須恵器 蓋	径3mm以下の石英と1mm以下の黒色砂粒含む	やや軟質	(内) 淡黄色 (外) 淡黄～灰白色	16.2	4.6	天井部外面は回転へら削り、他はヨコナデを施す	ほぼ完形

8	須恵器 蓋	1mm 程度の白色・黒色砂粒を含む	良好	(内) 灰色 (外) 緑灰～紫灰色	15.0	4.5	天井部外面は回転へら削り、他はヨコナデを施す	口縁部約1/4欠損
9	須恵器 蓋	1mm 程度の石英と黒色・白色の微粒を含む。密	良好	(内) 明緑灰色 (外) 明緑灰色	14.3	4.3	ヨコナデの際の痕跡が器壁に強く残る。他はヨコナデを施す	口縁部若干欠損
10	須恵器 蓋	径2mm 程度の石英と黒色微粒を含む	良好	(内) 灰白色 (外) 灰白～暗灰色	14.6	5.1	天井部外面はへら切り未調整、他は内外面ともヨコナデを施す。天井部は厚さ約1cmを測る。口縁がやや外方へ開く	口縁部若干欠損
11	須恵器 蓋	5mm 以下の石粒と砂粒を含み、3mm 以下の石英を含む	良好	(内) 明緑灰色 (外) 明緑灰～緑灰色	14.0	4.15	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施し、天井部内面は不定方向のナデで仕上げている	口縁部約1/3欠損
12	須恵器 蓋	径2mm 程度の砂粒と1.5mm の石英・0.2mm 程度のチャートを含む	良好	(内) 明緑灰色 (外) 明緑灰色	12.6	4.7	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す	ほぼ完形。外側から内側へ歪んでいる。内面に自然釉がかかっている。
13	須恵器 蓋	黒色粒と白色粒を含む	良好	(内) 明青灰～青灰色 (外) 青灰～灰色	12.8	4.1	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す	口縁部約1/3欠損。やや歪んでいる。部分的に自然釉がかかっている。

14	須恵器 蓋	黒色粒と白色粒を含む。密	良好	(内)明緑灰色 (外)明緑灰～灰白色	14.2	3.8	天井部外面は回転へら削りの後、中央部にだけナデを施す。他は内外面ともヨコナデを施す。体部と口縁部の境が若干屈曲し甘い稜をなす	ほぼ完形
15	須恵器 蓋	黒色粒と白色粒を含む。密	良好	(内)明緑灰色 (外)明緑灰色	14.3	3.9	天井外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す	完形
16	須恵器 蓋	径2mm程度のチャートを含む	良好	(内)灰黄～明黄褐色 (外)灰黄～褐灰色	14.6	3.6	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。更に天井部内面は不定方向のナデで仕上げる	口縁部約2/5欠損
17	須恵器 蓋	内面に径2mm程度の小石粒と1.5mm程度の石英を含む。密	良好	(内)灰白色 (外)灰色	13.7	4.1	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。口縁部は若干内傾する	口縁部約1/2欠損
18	須恵器 蓋	黒色粒を含む	軟質	(内)浅黄橙色 (外)灰白色	13.6	4.5	天井部外面はへら切り未調整、他は内外面ともヨコナデを施す	口縁部約1/2欠損
19	須恵器 蓋	径2mm以下の白色粒・石英を含む	良好	(内)灰白色 (外)灰白色	13.7	4.3	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す更に天井部内面は不定方向のナデで仕上げる。器壁は全体的に厚く、外形は丸味をおびる	欠損
20	須恵器 蓋	径2mm程度の白色砂粒と1mm以下の砂粒を含む	良好	(内)明灰色 (外)暗灰色	12.3	3.8	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す、口縁部は垂直に下る	口縁部約1/4欠損。部分的に自然軸が付着

21	須惠器 蓋	径1mm程度の砂粒と1.5mm以下の石英を含む	良好	(内)浅黄橙～灰白色 (外)灰白～灰色	14.1	4.0	天井部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。全体的に扁平な印象を与える	口縁部約1/5欠損。全体的に焼け歪んでいる
22	須惠器 蓋	黒色粒を含む。外面に径2mm以下の石英を含む	やや軟質	(内)灰白色 (外)灰白色	13.7	4.1	天井部外面は回転へら削り未調整、他は内外面ともヨコナデを施す天井部内面は更に不定方向のナデで仕上げる	完形
23	須惠器 蓋	径1.5mm程度の黒色砂粒と1mm程度の石英を含む	やや軟質	(内)灰白色 (外)灰白色	13.4	4.65	天井部外面はへら切り未調整、他は内外面ともヨコナデを施す	ほぼ完形
24	須惠器 杯身	チャート、石英の小石粒含む	やや軟質	(内)淡黄色 (外)淡黄色	15.0	4.5	底部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。受部と立ち上りの接合部は貼り付けの際の押えによる沈線が巡る	口縁部若干欠損
25	須惠器 杯身	黒色微砂粒を含む	良好	(内)緑灰色 (外)灰色	14.0	5.0	底部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。受部は水平方向に延びる	口縁部約1/2欠損
26	須惠器 杯身	黒色微砂粒を含む。密	良好	(内)緑灰色 (外)明緑灰～灰白色	13.8	4.5	底部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。受部は三角形状をしており、水平方向にはあまり広がらない	口縁部約2/3欠損
27	須惠器 杯身	外面に径1.5mmの小石粒と白色の砂粒を含む	良好	(内)灰色 (外)灰～青灰色	13.0	3.7	底部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。受部は端部が上方へ屈曲する	口縁部若干欠損

28	須恵器 杯身	チャート・石英の 小石粒を含む	良好	(内)灰白～灰赤色 (外)灰白色	8.8	2.8	底部外面は回転へら切り後ナデを施し、他は内外面ともヨコナデを施す。底部内面は更に一方のナデを施し仕上げている。内面に朱が付着している	ほぼ完形
29	須恵器 杯身	黒色微砂粒と径 1.5mm程度の石 英を含む	良好	(内)緑灰色 (外)灰～明紫灰色	14.7	4.95	底部外面は回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを施す。全体的に四角い印象を与える	ほぼ完形
30	須恵器 杯身	白色・黒色の微 砂粒を含む。密	良好	(内)明緑灰色 (外)明緑灰色	15.6	4.2	底部外面はへら切り未調整で一部回転へら削りが見られる。他は内外面ともヨコナデを施す	ほぼ完形
31	須恵器 杯身	外面に1mm程度 の石英を含む	良好	(内)明青灰色 (外)暗青灰色～灰 色	12.8	4.45	底部外面はへら切り後ナデを施し、底部内面は同心円の当て具の痕跡がある。その他は内外面ともヨコナデを施す	約1/2残存
32	須恵器 杯身	径1mm以下の黒 色砂粒を含む	良好	(内)明青灰色 (外)明青灰色	10.45	(残存) 3.1	底部は欠損しているが、一部回転へら削りが見られる。その他は内外面ともヨコナデを施す	口縁部約1/4欠 損
33	須恵器 杯身	径1.5mm以下の チャートを含む。 密	良好	(内)明青灰色 (外)明青灰～浅黄 色	11.1	3.75	底部中央はへら切り後ナデを施し、底部から体部下半にかけて回転へら削りを施している。他はヨコナデを施しているが、底部内面にはナデが見られる。受部及び立ち上がりは非常に短い。	ほぼ完形
34	須恵器 杯身	径1mm以下の子 チャートと3mm程 度の小石粒含む	良好	(内)明黄褐色 (外)浅黄橙色	13.1	4.2	底部から体部にかけての外面は回転へら削り、その他の他は内外面ともヨコナデを施す	完形。外面全体 灰かぶり
35	須恵器 杯身	黒色微砂粒含む。 密	良好	(内)灰白色 (外)灰色～青灰色	12.9	4.3	底部外面はへら切り未調整、その他は内外面ともヨコナデを施す	完形

36	須恵器 杯身	黑色砂粒と径1mm以下の石英と雲母を含む	やや軟質	(内)灰白色 (外)灰色～黄灰色	11.7	3.7	底部外面は回転ヘラ削り、他は内外面ともヨコナデを施す	完形
37	須恵器 杯身	黑色微砂粒・白色砂粒を含む	良好	(内)灰白～明黄褐色 (外)灰白～浅黄褐色	12.1	4.05	底部外面は灰がかぶっているため調整不明。他は内外面ともヨコナデを施す	ほぼ完形
38	須恵器 杯身	径1mm程度の白色砂粒を含む	良好	(内)灰白色 (外)灰白～淡黄色	11.7	3.6	器壁が荒れており調整不明	ほぼ完形 外面に窯壁付着
39	須恵器 高杯 蓋	径1.5mm以下の砂粒と1mm以下の石英を含む	良好	(内)灰黄色 (外)青灰色	13.9	4.5	全面にヨコナデを施しているが、特に天井部外面は板状工具によるヨコナデが施されている	完形
40	須恵器 高杯	0.5mm以下の微砂粒を含む。密	良好	(内)暗灰色 (外)暗灰色	12.4	7.9	杯部の体部外面は回転ヘラ削り、受部から体部内面にかけてはヨコナデ、杯底部内面はナデが施されている。脚部は三方に円孔があげられ脚端部は丸く仕上げられている	完形
41	須恵器 高杯	径4mm以下の石粒を含む	良好	(内)青灰色 (外)青灰～灰色	12.8	(残存) 6.5	杯部体部下半外面は回転ヘラ削り その他はヨコナデが施されている。杯部の受部は丸く立ち上りは内傾する	脚部欠損
42	須恵器 高杯	径4mm程度の石粒と1mm程度の白色砂粒を含む	良好	(内)明緑灰色 (外)明緑灰～灰色	13.2	8.2	杯部の底部～体部下半の外面は回転ヘラ削りの上にヨコナデを施し、その他はヨコナデを仕上げている。脚の軸と杯部の軸は一致しない。透し孔はない	ほぼ完形

43	須恵器 高杯	径1mm程度の白色砂粒を含む	良好	(内)明緑灰色 (外)明青灰～青灰色	12.45	7.45	杯部の体部下半の外表面は回転ヘラ削り、その他はヨコナデが施される。杯部底部内面に同心円の当て具痕がある	口縁部約1/3欠損
44	須恵器 高杯	径1mm以下の白色砂粒と若干の石英を含む	良好	(内)明褐灰色 (外)明褐灰色		(残存) 2.6	杯部の一部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデが施され、杯部内面はナデで仕上げられている	脚部、杯部若干残存
45	須恵器 脚部	径1mm以下の黒色砂粒を含む	良好	(内)淡黄色 (外)灰白色		(残存) 4.45	長方形の透しを有す。四方二段の透しかと想定される。透しの上端で沈線が1条巡る。脚端部は丸く仕上げる	袖部1/4残存 外面に自然軸が認められる
46	須恵器 高杯	径0.5mm以下の黒色砂粒を含む	良好	(内)淡黄～暗緑灰色 (外)淡黄～暗灰色	12.3	18.2	長脚二段方形三方透しの無蓋高杯で、上下の透しの間には2条の沈線が巡る。脚端部は下方に折れ曲る	裾部約2/3欠損
47	須恵器 高杯	黒色微砂粒を含む。密	良好	(内)灰黄～灰色 (外)灰～暗灰色	10.0	(残存) 4.8	杯部底部外面にカキ目を施し、2条の沈線を巡らす。沈線の間には、ヘラ状工具による刺突文を施す。他はヨコナデを施す。	杯部のみ約1/3残存
48	須恵器 高杯	黒色微砂粒を含む	良好	(内)淡黄色 (外)黄灰色	11.8	(残存) 4.2	杯部体部の外表面に2条の沈線を巡らし、櫛描きの列点文を施す	杯部の口縁約1/4残存
49	須恵器 盥	径0.5mm以下の黒色砂粒を含む	良好	(内)淡黄～灰色 (外)浅黄～灰色	9.3	6.4	底部外面は回転ヘラ削り、その他はヨコナデを施し、体部1/2にカキ目を巡らす	口縁部若干欠損し、やや歪んでいる。部分的に自然軸付着
50	須恵器 小壺	黒色微砂粒を含む	良好	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	4.4	5.7	底部及び胴部下半に回転ヘラ削りを行い、その他はヨコナデを施す	約1/2欠損

51	須恵器 小壺	須恵器 短頸	径2mm程度の黒色砂粒を含む	良好	(内)淡黄色 (外)淡黄色	5.9	5.4	胴部下半から底部にかけての外表面は不定方向のナデで仕上げられ、その他はヨコナデが施される。頸部にはへら状工具による刺突文が巡る	口縁部若干欠損
52	須恵器 壺	須恵器 短頸	径0.5mm以下の黒色微粒を含む	良好	(内)灰白色 (外)灰白～青灰色	8.1	4.7	底部外表面は回転へら削り、その他はヨコナデが施される	完形
53	須恵器 壺	須恵器 短頸	径1.5mm程度の石粒を含む	良好	(内)緑灰色 (外)淡黄～緑灰色	6.1	7.1	外面の胴部下半以下は回転へら削りが、他はヨコナデが施される。胴部上半には2条の沈線が巡る	口縁部4/5欠損
54	須恵器 壺	須恵器 短頸	黒色微粒を含む	良好	(内)灰色 (外)灰白～淡黄色		(残存) 9.5	外面の胴部下半以下には回転へら削りが、他はヨコナデが施される。胴部にはカキ目が巡る	口縁部欠損
55	須恵器 壺	須恵器 短頸	径1.5mmの砂粒を含む	良	(内)明褐色～橙色 (外)明褐色～橙色	10.2	10.3	底部は欠損しているが、外面の胴部下半以下は回転へら削りが施され、他はヨコナデが施される。器壁は比較的厚く、7mm～1cmを測る	約2/3欠損
56	須恵器 小壺	須恵器 小壺	径1mm以下の石英を含む	良好	(内)浅黄橙～灰白色 (外)淡黄～灰白色	6.85	7.2	底部外表面は不定方向のへら削り、他の内外面はヨコナデが施される。口縁は頸部から外方へ広がる	完形
57	須恵器 壺	須恵器 短頸	白色微砂粒を含む。密	良好	(内)灰色 (外)灰～淡黄色	8.55	8.8	外面の胴部下半以下は回転へら削り、他の内外面はヨコナデが施される	完形
58	須恵器 壺	須恵器 直口	黒色微砂粒を含む	良好	(内)淡黄～灰白色 (外)明緑灰～灰色	6.8	10.3	底部外表面は回転へら削り、他の内外面はヨコナデが施される。	口縁部1/2弱欠損。外表面に自然釉が見られる

59	須恵器 壺	直口	黒色微砂粒を含む	良好	(内)淡黄～灰色 (外)淡黄～緑灰色	8.5	13.7	器壁は自然釉と剝離のため、調整は不明瞭。底部外面にへう記号あり	口縁部1/2弱欠損。内外面に自然釉付着
60	須恵器 壺	直口	外面特に底部に径1～4mmの石粒を含む	良好	(内)灰色 (外)灰褐～灰色	6.9	13.1	胴部下半以下の外面は回転へう削り、他はヨコナデを施す。胴部・頸部・口縁部の外面にはカキ目が見られる	腹部1/2弱欠損
61	須恵器 壺	短頸	径2mm程度の石粒と石英を含む	軟質	(内)浅黄橙色 (外)浅黄橙色	—	8.6	全体に摩滅しており調整は不明瞭であるが、胴部外面はカキ目が施され、胴部下半から底部にかけて回転へう削りが施されている	口縁部欠損
62	須恵器 壺	直口	径1.5mm以下の黒色微砂粒を含む	良	(内)灰白色 (外)淡黄～灰黄色	8.85	15.8	外面は肩部から胴部上半にカキ目、胴部下半以下は回転へう削りが施される。他の内外面はヨコナデが施される	完形
63	須恵器 壺	台付	径1.5mm以下の砂粒を含む	良好	(内)浅黄橙色 (外)灰～灰黄色		(残存) 14.5	胴部の最大径部分の外面に櫛状工具による刺突文が巡り、その上方に2条下方に1条の沈線が巡る。外面の胴部下半は回転へう削りが行われ、他はヨコナデを施す	口縁部・脚台部欠損
64	須恵器 壺	台付	径1mm以下の砂粒を含む	良好	(内)淡黄色 (外)浅黄橙～灰白色		(残存) 18.4	肩部にへう状工具による刺突文が2～3条巡り、その上下に各2条の沈線を巡らす。胴部下半は回転へう削りが施され、他はヨコナデが施される。脚は、三方に長方形透しが開けられている	胴部・脚台部約2/3残存
65	須恵器 壺	壺	径4mm以下のチャートを含む	良好	(内)灰色 (外)浅黄色		(残存) 21.6	胴部外面はへう削り、頸部外面及び内面はヨコナデが施される。肩部には櫛状工具による扇形文が付けられる	頸部から胴部約1/4残存

66	須恵器 提瓶	径0.5mm以下の白色微砂粒を含む	良好	(内)淡黄～暗青灰色 (外)淡黄～暗青灰色		(残存) 22.6	前面がヨコナデ、背面は回転へラ削りが施されている。耳は屈曲する鉤形の耳が一対付けられる	口縁部と体部若干欠損
67	須恵器 提瓶	黒色微砂粒を含む。密	良好	(内)灰白色 (外)浅黄～暗青灰色	6.2	19.4	体部全面にカキ目が施され、前面・背面とも丸く仕上げられている。耳は退化して小突起のみとなっている	完形
68	須恵器 提瓶	径1mm程度の白色微砂粒を含む	やや軟質	(内)橙色 (外)浅黄橙～褐色	7.8	(残存) 14.5	体部全面にカキ目が施される。耳は欠損している	口縁部と体部1/2残存
69	須恵器 提瓶	黒色微砂粒を含む	良好	(内)灰色 (外)明緑灰～暗灰色		(残存) 17.8	体部前面がヨコナデ、背面には回転へラ削りが施される。耳は退化した小突起である。背面の中央部に一方向のナデが見られる	口縁部欠損
70	須恵器 提瓶	径1.5mm程度の石英と黒色微砂粒を含む	良	(内)浅黄橙～灰白色 (外)浅黄橙～灰白色		(残存) 17.4	体部背面は回転へラ削りが施されている。耳は痕跡すらとどめない	口縁部・体部約1/2欠損
71	須恵器 平瓶	黒色微砂粒を含む	良好	(内)浅黄橙色 (外)灰～緑灰色	4.0	(残存) 9.3	肩部にボタン状の粘土粒が2点貼り付けられる。外面の調整は、肩部以下がヨコナデ以上がナデである	口縁部2/5と底部欠損。外面に自然釉が見られる
72	須恵器 平瓶	黒色微砂粒を含む	良好	(内)浅黄橙色 (外)灰白～灰色	4.3	(残存) 2.8		口縁部のみ約1/2残存。外面に自然釉が認められる
73	須恵器 甕	径1mm以下の黒色砂粒を含む	良好	(内)淡黄色 (外)淡黄～灰白色	10.2	(残存) 4.3	口縁部は外方へ広がった後、端部は上方へつまみ上げられる	口頸部のみ約1/2残存

74	須恵器 甕	黑色微砂粒を含む。 密	良好	(内) 浅黄灰色 (外) 浅黄灰色	11.8	(残存) 3.7	口縁部は外方へ広がった後、端部は丸くまとまる	口縁部のみ約 1/2残存
75	須恵器 甕	径0.5mm以下の 白色微砂粒を含む	良好	(内) 紫灰色 (外) 灰～暗灰色	12.0	(残存) 6.1	口縁端部は丸くまとめられているが、小さな段をなす	口縁部のみ約 1/4残存
76	須恵器 甕	白色微砂粒と径 1mmの石英を含む	良好	(内) 明褐色～緑灰色 (外) 灰色	20.8	(残存) 4.35	口縁部は外方へ広がったまま端部に至る。口縁端部は若干つまみ上げる意識が認められる	口縁部のみ1/4 強残存。自然釉 が認められる。
77	須恵器 甕	白色微砂粒を含む	良好	(内) 浅黄～灰白色 (外) 浅黄～青灰色	19.4	(残存) 7.0	口縁部は外方へ広がり、端部は帯状の段を巡らす	口縁部1/2強残 存
78	須恵器 甕	径1mm程度の黒 色砂粒含む	良好	(内) 明褐色 (外) 明褐色～暗灰 黄色	18.8	(残存) 42.9		口縁部1/2欠損
79	須恵器 広口 壺	白色微砂粒と径 1mm程度の石英 を含む	良好	(内) 灰白色 (外) 淡黄～灰白色		(残存) 16.9	外面の胴部下半は回転ヘラ削り、底部外面は指頭 圧痕が見られる。他はヨコナデが施される	口縁部と体部 1/2程度欠損
80	須恵器 三耳 壺	黑色微砂粒を含む	良好	(内) 灰色 (外) 淡黄～明緑灰 色		(残存) 29.1	外面の肩部上半は回転ヘラ削り、肩部下半～体部 上半はヨコナデの上に部分的に縦方向のナデ、胴 部下半は回転ヘラ削りが施される。内面には粘土 の継ぎ目が残る、胴部上半はヨコナデ、下半は粗 いヨコナデが施される	口縁部、体部若 干欠損
81	須恵器 蓋	径0.5mm以下の 黑色微砂粒含む	良好	(内) 灰白色 (外) 灰白色		2.7	天井部外面は回転ヘラ削りを施し、内部は不定方 向のナデで仕上げられる	1/5程度残存

82	須恵器 椀	黒色微砂粒と内面に径1mm程度の白色砂粒含む	良好	(内) 灰～紫灰色 (外) 灰白～灰色	14.5	6.1	全体にヨコナデ調整を施す。高台は糸切りの輪高台を貼り付けている。器形は丸く仕上げられ、口縁部は幅の広い帯状をなす	口縁部4/5欠損
83	須恵器 椀	内面に径3mm程度の白色微砂粒と1mm以下の石英を含む	軟質	(内) 明黄褐色 (外) 明黄褐色	14.6	6.0	生焼けで器壁が荒れており、調整は不明瞭であるが、一部ヨコナデが認められる	口縁部約1/2欠損
84	須恵器 椀	黒色微砂粒を含む	良	(内) 灰白～灰黄褐色 (外) 灰白～暗灰色	14.2	4.9	底部は糸切りで全体にヨコナデを施す。体部から口縁部にかけて内側へ屈曲したのち、外反する	ほぼ定形
85	須恵器 椀	径1～2mm程度の砂粒・石英を含む	やや軟質	(内) 明緑灰～橙色 (外) 明緑灰～明褐色	15.6	5.3	底部は糸切りで全体にヨコナデを施す	口縁部約1/4欠損
86	須恵器 椀	径1～3.5mm程度の石粒を含む	良	(内) 灰白色 (外) 灰白色	16.6	4.85	底部は糸切りで全体にヨコナデを施す	口縁部約1/8残存
87	土師器 甕	0.5mm程度の黒色粒を多く含む	良好	(内) 浅黄橙～明褐色 (外) 明赤褐色	15.5	(残存) 13.4	口縁部はヨコナデ、胴部内面はナデ、外面は不定方向の粗いハケ目を施す	約1/2欠損

第9表 龍子向イ山1号墳出土 鉄器・耳環一覧表

遺物番号	種類式	重量(g)	出土面
1	有茎脇挾三角形鉄鍬	23.7	2
2	有茎脇挾三角形鉄鍬	11.9	2
3	圭頭斧箭形式鉄鍬	13.65	2
4	方頭斧箭形式鉄鍬	11.4	3
5	方頭斧箭形式鉄鍬	9.3	表採
6	圭頭斧箭形式鉄鍬	12.45	2
7	有茎三角形鉄鍬	12.8	1
8	有茎三角形鉄鍬	9.2	1
9	有茎脇挾三角形鉄鍬	7.0	2
10	柳葉式鉄鍬	14.7	3
11	柳葉式鉄鍬	13.5	2
12	柳葉式鉄鍬	11.9	1
13	柳葉式鉄鍬	9.35	1
14	鉄鍬茎	7.85	1
15	鉄鍬茎	6.4	2
16	鉄鍬茎	6.3	1
17	鉄鍬茎	3.75	2
18	脇挾三角形鉄鍬	6.0	表採
19	鉄鍬茎	3.25	1
20	鉄鍬茎	4.4	1
21	鉄鍬茎	6.0	2
22	鉄鍬茎	3.3	1
23	鉄鍬茎	1.8	表採
24	鉄鍬茎	1.6	2
25	鉄鍬茎	0.55	1
26	鉄鍬茎	7.45	3
27	鉄鍬茎	3.15	1
28	鉄鍬茎	3.0	2
29	鉄鍬茎	3.2	2
30	鉄鍬茎	3.8	2
31	鉄鍬茎	3.25	3

遺物番号	種類式	重量(g)	出土面
32	刀子	25.7	1
33	刀子片	4.05	表採
34	刀子片	9.45	3
35	刀子片	10.6	1
36	刀子片	8.8	表採
37	馬具(轡)	337.8	1
38	馬具(鉸具付兵庫鎖)	187.7	1
39	馬具(鉸具付兵庫鎖)	126.0	1
40	鉸具	12.3	3
41	鉸具	9.1	2
42	鉸具	2.9	3
43	鉸具	9.35	3
44	鉸具	6.75	1
45	鉸留金具(三点鉸)	11.5	3
46	鉸留金具(三点鉸)	11.65	3
47	鉸留金具(三点鉸)	8.4	2
48	鉸留金具(三点鉸)	7.5	2
49	鉸留金具(三点鉸)	6.85	1
50	鉸留金具(四点鉸)	19.5	2
51	鉸留金具(二点鉸)	5.9	1

耳環

1	金環	6.0	1
2	金環	3.3	1
3	鍍金銀環	1.8	3
4	銀環	1.6	3
5	銀環	0.55	2
6	銀環	7.45	1
7	銀環	3.15	2
8	銀環	3.0	1
9	鉛環	3.2	1

第2節 龍子向イ山2号墳

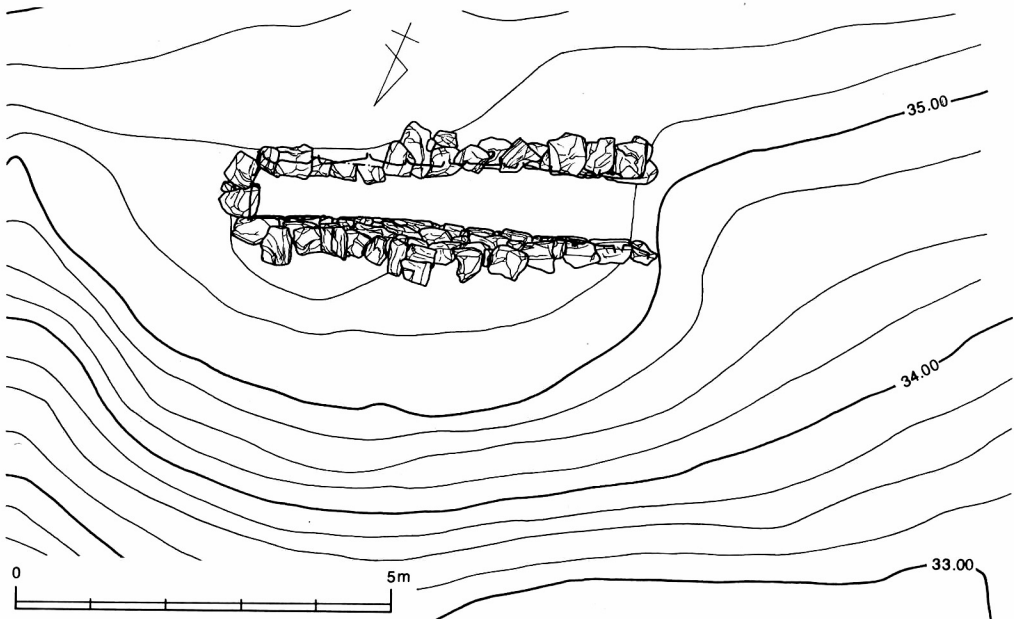
1. 位置

三ツ塚山塊の北西へ延びる支尾根の北側の緩斜面に位置する。2号墳の南側はやや急な斜面で、主体部構築部分のみ平坦面を築いた程度で斜面上に築造された古墳である。南地区を構成する3基の中央に位置する。1号墳は近接して築かれており、西側に裾と裾で4m離れて立地している。標高は3mの差があり、2号墳の方が高い位置を占めている。4号墳は、斜面の南側上方に築かれており、平面で24m、垂直で8mの距離を測ることが出来る。水田との比高差は8mである。

墳頂からの視界は、西北西の長山丘陵から北東の向イ山北地区の先端の範囲である。長山丘陵の龍子長山1号墳は裾部を見ることが可能である。群中の古墳は、5号墳が尾根上から一段下がっているため見えない。同一山塊の三ツ塚や鳥坂古墳群も可視できない。揖西平野の中央部分は視野に入っており、尾崎・佐江・清水遺跡などが遠望出来る。池の沢古墳群東半と新宮東山墳墓群・景雲寺古墳群が眺望関係にある。的場山も中腹より上は見る事が出来るが、山麓部の古墳や小神廃寺などは前地の独立丘陵によって妨げられている。

2. 外形

墳丘はある程度流失しているが、石材も2石露出しており、北半の墳丘は明瞭に看取され、



第85図 龍子向イ山2号墳墳丘測量図

分布調査で容易に古墳と判断出来た。

調査前の地形測量では、2号墳に関する地域では33.25m以下と36.25m以上のコンタラインに乱れはなく、ほぼ自然地形を示している。北側東半では33.25mから35.00mまでコンタラインが入り込んでいる。墳裾を示すものであろうと考えられるが、水の流れなどの改変の作用も受けているようである。墳丘北側西半は34.00mから内側に入り込んでいるが、築造後の雨水によるものと思われる。南側は墳丘が流出しており、調査前の状況では読み取ることは不可能であった。

調査を行った墳丘測量図では、流土を除去したため、墳丘は顕著になった。北側東半では31.75mからラインの乱れがあるが、西半では34.50mから明らかである。大きく入り込むコンタラインは34.75m～35.25mの3本で、墳裾を復原すると10m弱の径になる。墳丘は墳裾から3.5mの高さを測る。南側では堆積土だけで水平に測るとほとんど墳丘は残存していない。

3. 墳丘築成

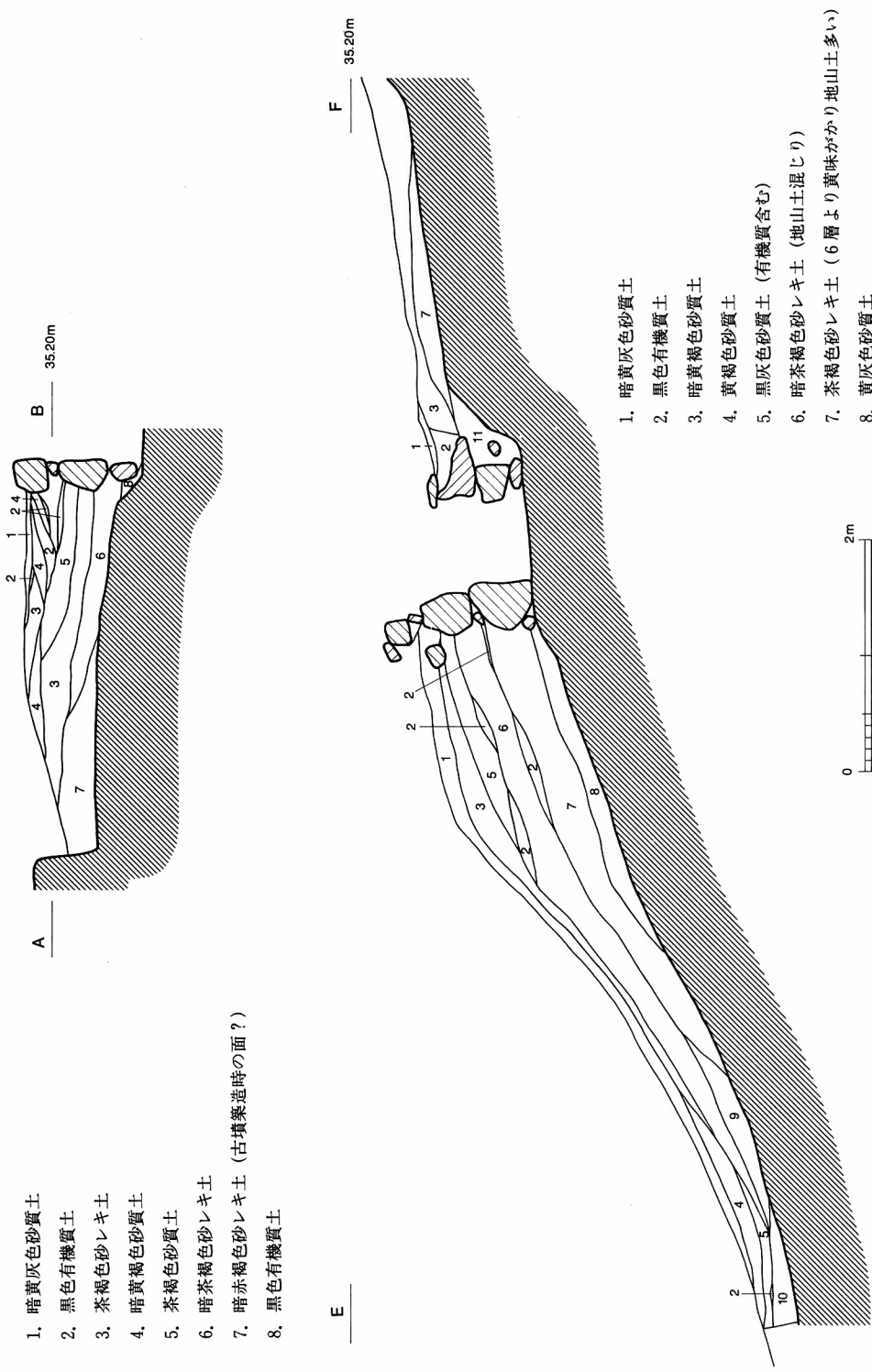
2号墳も斜面上に築造されていることから南側の標高の高い方は自然地形を利用しており、墳丘盛土の量は少なかったものと思われる。標高の低い北半は全て盛土によって墳丘を築いている。墳裾部分を削り出す作業は行っていない。標高の高い南側に石室構築のための墓壙を掘り下げ、平坦面を設けている。墓壙は楕円形の半分の形状である。墓壙は奥壁北側まで達しており、比高差0.8mを測る。

墓壙を掘り下げ、基底石を据え置く。その際、基底石を安定するために石を詰め、黒色有機質土と砂礫土を入れている。墓壙を黒色土・砂礫土で埋め、基底石上部まで盛土を施している。この盛土は茶褐色の砂礫土で墳裾までは達していない。2石目・3石目を積み、同様に墳丘を盛っていく。2石目に伴う盛土は墳裾に達している。2石目より上層は地山土である茶褐色砂礫土・赤褐色砂礫土と黒色有機質土が互層となっている。南側の高い方は基底石に伴う墳丘土だけで、上層は流入土で盛土は残っていない。

4. 横穴式石室

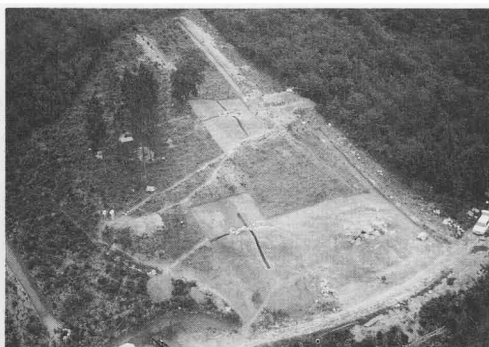
主体部は、無袖式の横穴式石室がある。天井石ならびに側壁の一部を欠いている。特に開口部寄りの方が損壊を受けている。土圧のためか石室は大きく傾いている。北側の標高の低い方は外傾し、南側の高い方は内傾している。天井石を欠いたことによって傾いたものと思われるが、石室構築そのものも粗雑であることは否めない。

石室の規模は、全長5.4mで奥壁での幅0.8m、開口部の幅も0.8mを測る。石室幅は部分的に0.85mくらいに広がる場所もあるがほぼ0.8mである。床面は旧態を保っていることから、石室の数値として問題ない数値である。力が加わって傾斜しているのは、3石目以上で、2石



第86図 龍子向イ山2号墳墳丘土層断面図

目も一部は動いている。奥壁近くは比較的变化が少ない。側壁の残存度は北側壁の方が良好で、ほとんど4石目まで残存している。奥壁寄りの部分で残存高1.5mを測る。開口部付近は1～2石しか残っていない。南側壁は、最も奥の部分のみ4石残り、残存高1.3mを測る。しかし、他の部分は2石しか残っておらず、一部3石目が残っていた個所もあったが原位置を移動している。



第87図 南地区空中写真

石材は他の古墳同様、チャートを使用している。裏込めの栗石に数石河原石が見られたが、石室用材はもちろんのこと裏込めに使われた角礫もチャートである。

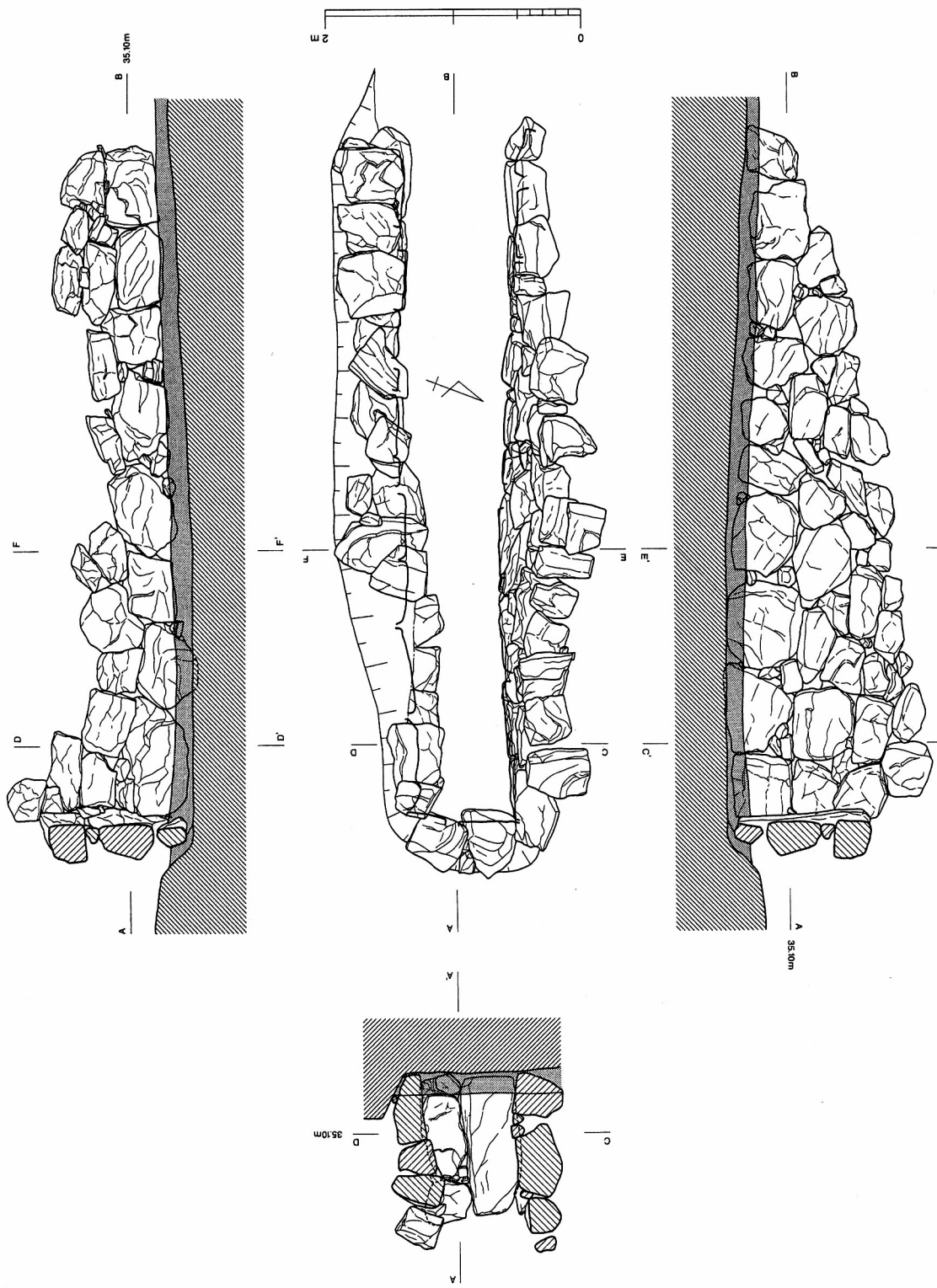
石室を構築するのに、標高の高い方を掘り下げ平坦面を築き、基底石を置いている。平坦面ではあるが、僅かな傾斜はあるようで南側の標高の高い方が高くなっている。最大の石材は奥壁に使用している。高さ1.05m、幅0.4m、奥行き0.5mの巨石で、この石のみ縦積みに石を用いている。奥壁は、この石と横積みされた部分の平面では2石から成っている。横積みされた部分の下から2石目も縦積みに近い用法で、縦に長く見せる意図が働いていたように思われる。だが、逆に狭い印象も与えられる。狭長な石材を縦積みしたようで不安感があるが北側壁の石は奥壁に力をかけており、奥壁を最初に置いたものと思われる。墓壙も浅く、石材全体を墓壙肩に接する方法は採っていない。構築は奥壁から開口部へ向かって実施したようである。基底石、2石目上面で意識の上では目地を通そうとしているようで低い部分には小型の石材を挟んで高さを近づけている。石材は奥壁寄りの方がやや大型である。

3石目以上の石材の用法は小口積みに近い方法に変わっている。裏込石や控えの石がほとんどないことから、横積みが困難だったものかもしれない。全体的に石材の最も広い面を内側に最大利用しており、3石目についても小口同士の広い方や長辺の面を内側にしている。

5. 遺物出土状態

床面は2面検出している。上層の第2次床面は1号墳とともに石室内で火葬を行っている。

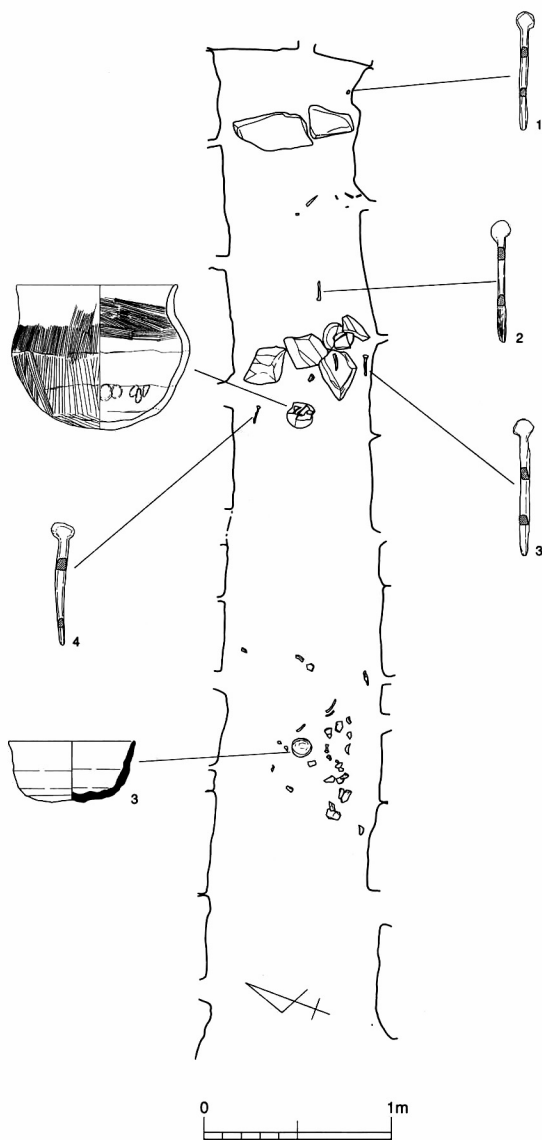
第2次床面は、奥壁から1.3mと1.5mの2ヶ所に石が数石据え置かれている。0.3mの部分は2石がほぼ石室幅に置かれており、最大長0.4mと0.25mを測る上面の平たい石である。1.5mの部分は4石が同じく石室幅に置かれているが、上面は平たくはしていない。この間から1.5mの石周辺に火葬骨が広がっている。2石の中央部分の方が火葬骨の量が多い。2ヶ所の石は棺台と思われる。石の周辺から鉄釘が出土している。奥から1本、手前から3本の釘が出土しており、奥のものは釘先を上に向けて原位置と考えられる出土状態をしている。離れて



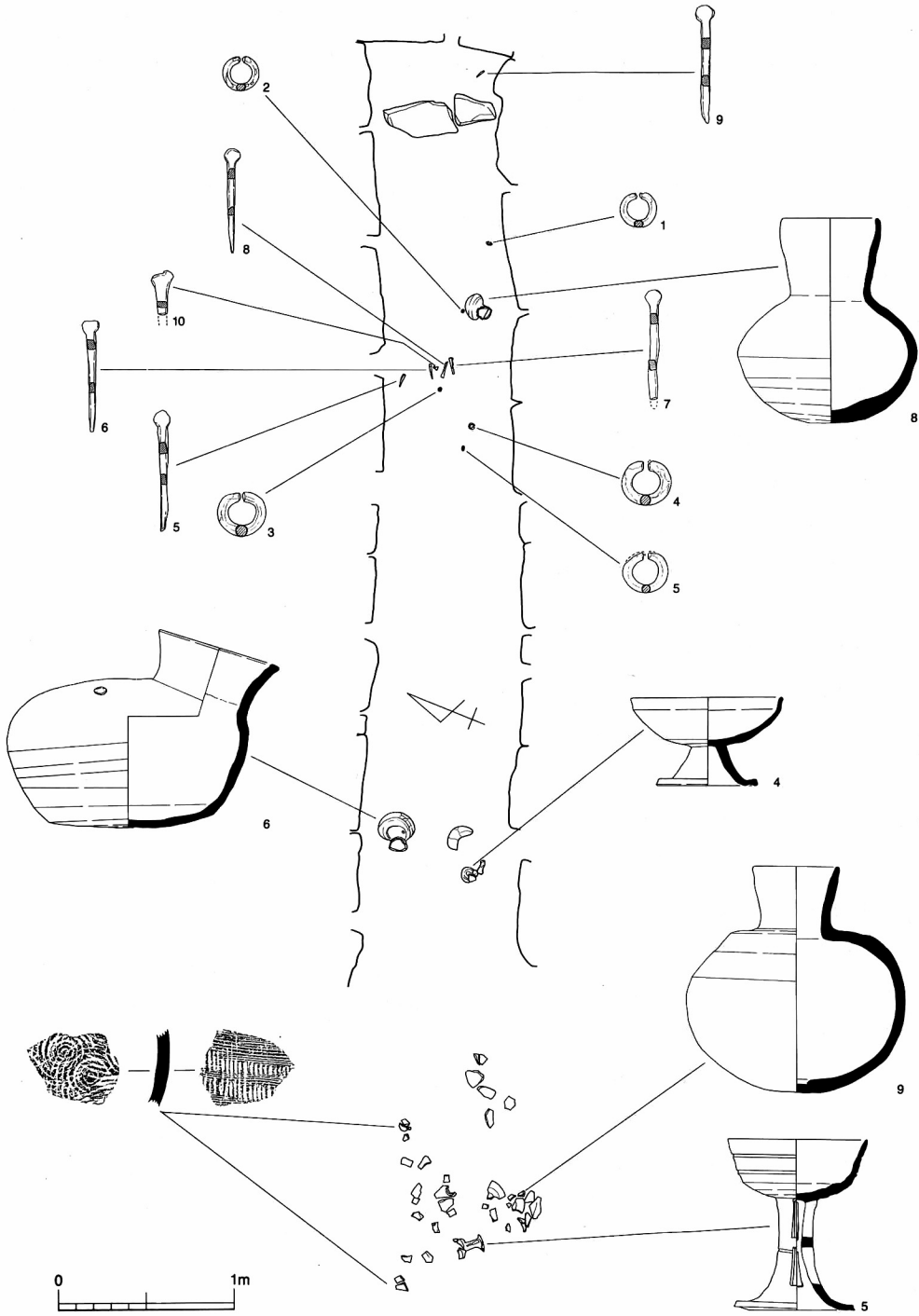
第88図 龍子向イ山2号墳石室実測図

いる釘の間隔は1.7mであり、棺の長さを示す資料となろう。棺の手前木口部分で土師器甕(10)が出土している。石室幅の中央付近から出土した完形品である。奥壁から3.1mから4.1mの間にも火葬骨が多数出土している。その中心付近から須恵器杯身が上向きに置かれている。その周辺から肋骨や頭骨など部位の判る骨が、厚いところで0.3mの厚さで検出された。平面的よりも上下に垂直的に広がっている。棺が伸展葬にした寝棺ではなく、座棺の可能性も考えられる。第2次床面は、面的に焼けており、棺台をはじめ側壁も火を受けている。特に北側壁は火を受けた痕跡が著しい。焼土・炭・灰も広がっていることから、石室内の火葬が考えられる。火葬骨の集中地点は2ヶ所である。石室幅0.8mを考慮すると棺は2棺並ばず、前後にしか納棺できないはずである。2ヶ所が各々棺の位置と考えて問題ないと思われる。

第1次床面は、第2次床面との間にはほとんど堆積土を挟まない床面で、厚くて10cmの土を置いている程度である。4ヶ所から遺物が出土している。石室内と開口部付近と石室前方と南側墳裾の4ヶ所である。石室内は中央より奥で、鉄釘6本、耳環5個、須恵器長頸壺1個が出土している。第2次床面の棺台と推定した石は手前の4石ははずれたが、奥の平たい2石は第1次床面に入り込んでおり、両床面に使われたものと思われる。奥壁手前に1本、手前木口部分と考えられる奥壁から1.8mのところから5本鉄釘が出土している。その間の奥壁から1.5mのところから、長頸壺(8)と耳環が1個(2)出土している。耳環は、釘出土の2ヶ所の中央部分で1個(1)、釘出土地点の手前から3個(3~5)出土している。中央の2個は原位置かもしれないが、手前の3個は追葬時などに移動したものと思われる。



第89図 2号墳遺物出土状態図1(第2次床面)



第90図 龍子向イ山2号墳遺物出土状態図2(第1次床面)

る。

石室開口部付近では2個の須恵器が出土している。平瓶(6)と無蓋高杯(4)である。平瓶は北側壁寄りに口縁部を開口部に向けて出土している。高杯は杯部を内側に、脚台部を開口部側に分かれて出土している。

石室前方は明らかな溝状の落ち込みはなかったが、やや窪んだ主軸延長上に多数の土器が集中していた。復原すると大甕・壺・提瓶・高杯の4個体になった。大甕・提瓶は小片となっており復原不可能であった。壺・高杯は出土状態は破片となっていたが、ほぼ完形に復原出来た。石室前方で遺物の出土する例は多く、特に揖保川流域では多数検出例がある。遺物の掻き出しと墓前祭祀の2つの考え方がある。2号墳側は、開口部の正面であることから、より両方のいずれかを決め難い例である。浅い窪みがより顕著であれば、墓前祭祀と考えられるが、現状では保留しておきたい。

墳丘裾からは、南側の標高の高い裾部で須恵器杯身の完形品が1個(2)出土している。器肉の厚いびつな土器であるが、墳裾に位置したことから意味が含まれていると考えられる。

6. 出土遺物

(1) 土器

2号墳から出土した土器は須恵器では、杯身(1・2)、杯(3)、無蓋高杯(4・5)、平瓶(6)、有蓋壺(7)、長頸壺(8・9)で、復原不可能な甕の破片が数片あり、土師器では甕が1点ある。

① 須恵器

杯身 (1・2)は、体部外面の底部はヘラ切りを行い未調整で、他の部分は内外面ともヨコナデを施している。また(2)は内面全体的に不定方向の仕上げナデを施しているが、全体的に器壁が厚く若干歪んでおり、外面の調整も粗雑である。

杯 口縁部は1/3程度欠損しており、全体的に軟質である。口径9.6cmに対し器高は4.6cmを測り、外面底部はヘラ切り未調整で底部から口縁部に約1/2上がったところまで回転ヘラ削りを行い、他は内外面ともヨコナデを施す。

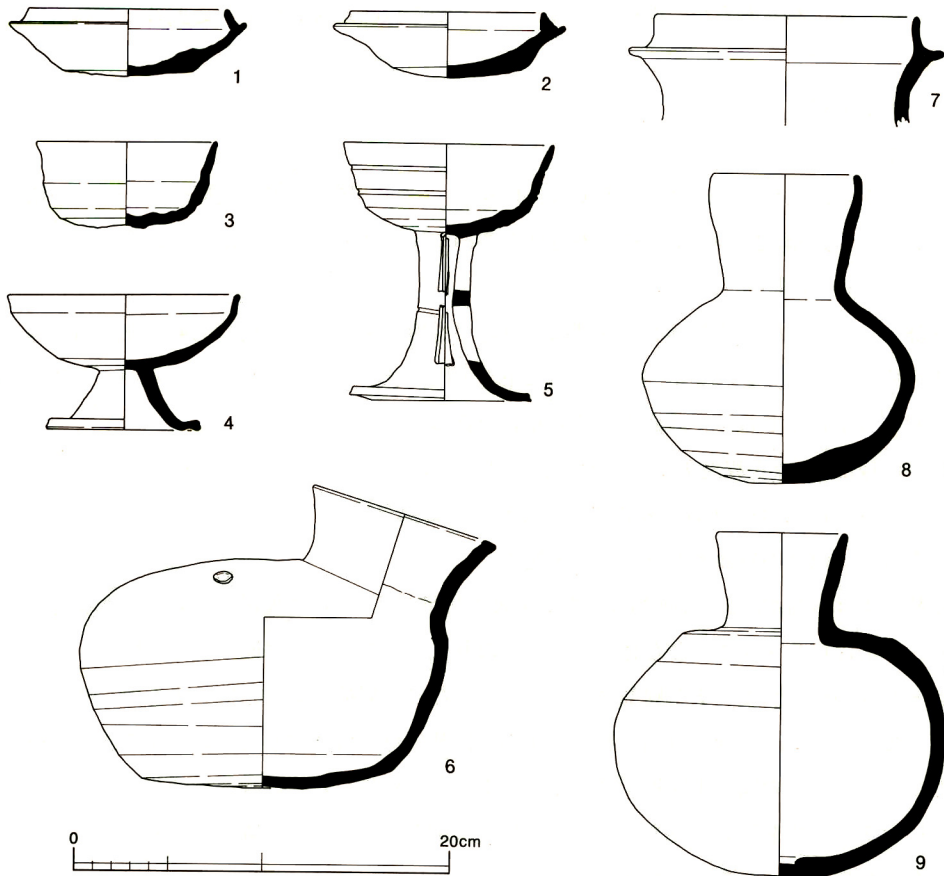
高杯 (4)は器高が8.0cmで脚部は完形であるが杯部は1/2程度欠損しており、かなり軟質である。杯部は杯蓋を逆さにした様な形をしており、脚部との境には貼り付けの際についたと思われる凹線が見られる。また脚部は大きくひらいたのち裾端部を下方につまみ出し側方に面をつくっている。(5)は口径11.1cm、器高13.6cmで杯部は体部外面中心近くに1条の沈線を持ち、また口縁端部とその間に不明瞭ではあるが1本の凹線が見られる。脚部は細長く裾部が大きくひらいたあと下端を下方にややつまみ出し側方に面をつくる。また脚部には外面中心に1条の沈線を持ち二方向の二段透しがある。

平瓶 器高16.0cm、最大径19.6cmを測り、底部は平らで、丸みをおびた肩部をもち、10cm前

後の口径を持つ器形である。底部から肩部下の広い範囲にわたって回転ヘラ削りを行い、肩部中心から約2/3までヨコナデを施し、肩部中心部分に粘土板を充填している。口頸部は体部から外方へ広がり、口縁端部の断面は方形を呈する。また肩部には頸部をはさんで2方に小さな円形の粘土粒を貼付しており、肩部の一部にカキ目調整のあとが見られる。

有蓋壺 口頸部のみが1/2程度しか残っておらず、全体の器形を復原することはできない。残存器高は5.8cmで、口径は14cm前後と考える。口頸部はやや外反し立ち上がりは若干の内傾をもって口縁端部に至る。また土器の断面から、立ち上がりは受け部をつまみ出したのち接合したことが観察できる。

長頸壺 (8)器高16.3cm、最大径14.5cmを測りやや楕円形の体部にほぼ直立する頸部をもつ壺である。体部の底部から肩部近くまで回転ヘラ削りを行い、その他肩部から内面にかけてヨコナデを施す。口頸部は上方へほぼ直線的にのびた後やや内彎気味に口縁端部に至る。(9)は器高18.0cm、最大径7.0cm前後と思われ、丸い平瓶の体部を転用してその底部にあたる平らな面に

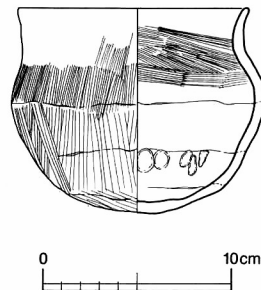


第91図 龍子向イ山2号墳出土土器実測図

直立した頸部を付けた様な壺である。体部外面肩部は頸部貼り付け部分から約2～3cm外へほぼ水平にのび、稜をもって体部中央まで回転ヘラ削りを行っており肩部内面には口頸部貼り付けの際のナデが明瞭に見られる。体部中央から底部にかけてヨコナデを行い、底部中心に粘土板を充填している。

② 土師器

全体的に丸いが、いびつであり、器高10.8cm、口径12.0cmを測る。肩部が少しはっておりやや外方に直線的に短めの広い口縁部をもつ中型の丸底壺である。内面はユビ成形・調整のあとが見られ、口縁部にハケ目調整を施す。外面底部から体部にかけて粗いハケ目調整を施す。体部の一部に横幅7.0cmの黒斑が認められる。



第92図 土師器実測図

(2) 鉄器

鉄器は、総数13点出土している。刀子と思われるもの(13)と茎(11)の2点を除く11点が釘と思われる。出土位置は、(1)～(4)が第2次床面、(5)～(10)が第1次床面、(11)～(13)が石室埋土からの出土である。

(1)～(10)は釘である。細かい数値は観察表に譲るが、(7)が釘先を欠き、(10)が釘頭だけの破片である以外は完形品である。長さは(3)が10.2cmと最大の、(1)が6.85cmと最小の数値を示している。全て断面方形で釘頭は平たく不定形に鍛き上げている。全て使用されたことが明らかで、頭に打痕が見られ、(4)(5)のように先が曲がっている製品もある。断面は大別すれば方形であるが、いびつな形状で細かく分ければ、長方形、台形、菱形状や隅円方形に分けられる。先端に近い部分はやや扁平になるか丸味をおびてくる。先端は両面から研いでおり、中心に先を持つとは限らず、片側から強く鍛いた片刃状の先端も見られる。(12)は破片のため、明言できないが、断面が厚く台形になっていることから、釘の可能性が高いものである。

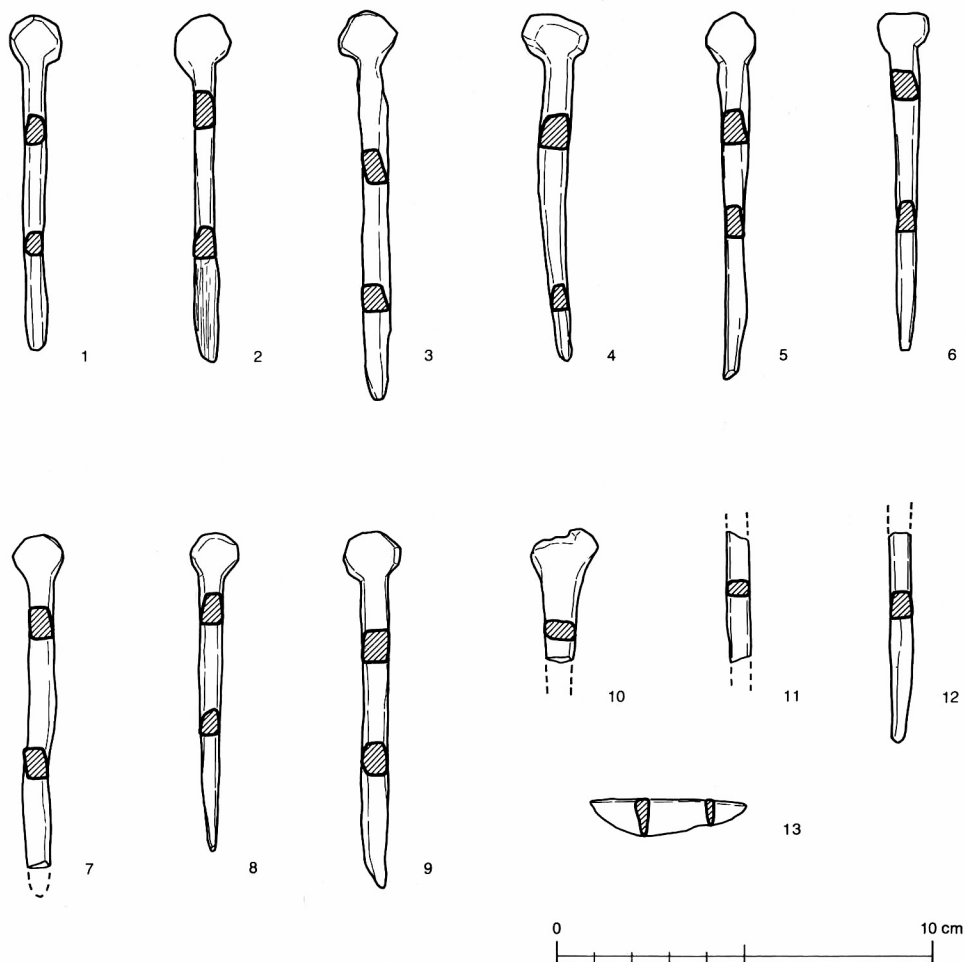
(11)も破片であるが、断面が扁平で釘とは異なっている。鉄鎌の茎の可能性が考えられるが、鉈の茎であるかもしれない。

(13)は小型の鉄器で、片刃を設けている。形状は刀子状をしているが、実用品とは考えられず、ミニチュアと思われる。重量1.9gと軽量である。近接する龍子長山1号墳にも同種の刀子が出土している。

釘は2面の床面から出土している。(1)は立った状態で出土しており、原位置と考えて問題ない資料である。また、(3)(4)も原位置は保っていないが、大きくは移動しておらず、棺台の存在とともに棺の長さを考えるのに良好な資料である。

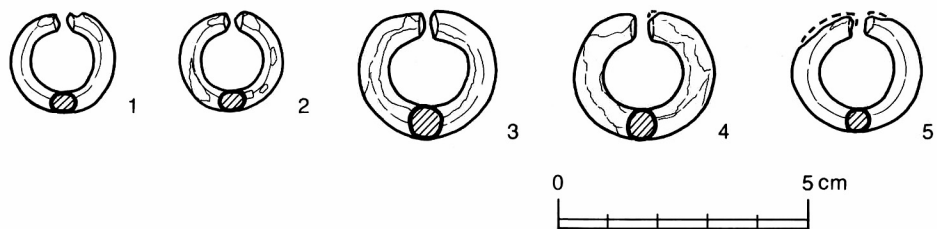
(3) 耳環

耳環は5点出土している。全て第1次床面からの出土である。(1)(2)は奥の棺の中央部から、(3)は奥の棺の小口部から、(4)(5)は2棺の間から出土している。(3)(5)は銀環で(1)(2)(4)は銀の上に



第93図 龍子向イ山2号墳出土鉄器実測図

金を施している。全て銅芯である。形状からは(1)(2)と(3)(4)が対になるもので、1個以上を欠失しているものと思われ、3体以上の埋葬は確実である。(1)(2)は最大径21.0mmと小型の耳環であるが、銀箔の残存状態は良好である。(3)(4)は形状から対と考えたが、現状では銀箔のみの(3)と



第94図 龍子向イ山2号墳出土耳環実測図

銀の上に金箔を施した(4)と異なっている。対と考えれば不自然で、(3)に銀の上に金が本来施されたと考えるべきか、もしくは4対以上と考えるべきであろうか。(1)(2)は小型の割に銀箔の残りが良いことから重量はある。

第10表 龍子向イ山2号墳出土 鉄器 計測表 ()は残存値

No.	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
1	釘	第2次床面	6.85	1.4	0.8	8.8	
2	釘	第2次床面	7.2	1.5	0.95	14.1	木質残る
3	釘	第2次床面	10.2	1.6	0.9	14.8	
4	釘	第2次床面	9.2	1.8	0.9	13.1	
5	釘	第1次床面	7.7	1.35	0.85	15.4	
6	釘	第1次床面	8.85	1.35	0.8	12.8	
7	釘	第1次床面	(8.75)	1.35	0.8	(11.2)	
8	釘	第1次床面	8.4	1.3	0.8	9.1	
9	釘	第1次床面	9.4	1.6	0.9	14.7	
10	釘	第1次床面	(3.5)	1.8	0.5	(5.3)	2次焼成を受けている
11	茎	石室埋土	(3.45)	0.6	0.45	(1.8)	鏃の茎の可能性あり
12	茎	石室埋土	5.55	0.6	0.7	(4.5)	釘頭は欠損
13	刀子	石室埋土	4.15	1.0	0.4	1.9	ミニチュアの刀子か

第11表 龍子向イ山2号墳出土 耳環 計測表

No.	種類	出土位置	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
1	金環	第1次床面	21.0	13.0	5.5	4.4	No2と対
2	銀環?	第1次床面	20.5	12.0	5.0	5.1	No1と対
3	銀環	第1次床面	27.5	15.5	6.0	14.0	No4と対
4	金環	第1次床面	28.5	16.0	6.5	11.3	No3と対
5	銀環?	第1次床面	26.0	14.5	5.0	5.9	銀箔(?)が僅かに残る

第12表 龍子向イ山2号墳 出土土器観察表

() は復原径

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴	備考
					口径	器高		
1	須恵器・杯身	4 mm程度の長石含む。	堅緻	(内) 外) 青灰色	10.5	3.5	口縁の立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げている。受部の先端も口縁部と同じく丸く仕上げている。内面には立ち上がりの折り込み手法かと思われる沈線が認められる。底部は回転ヘラ切り未調整、体部は底部から1/3程度回転ヘラ削りでその内面までヨコナデを施している。	完形
2	須恵器・杯身	径2 mm～3 mm程度の長石含む。 径1 mm～3 mm程度の石英含む。	堅緻	(内) 淡い灰色 (外) 濃い灰色	10.3	3.5	口縁の立ち上がりはやや内傾し、口縁端部と受部の先端は丸く仕上げている。底部は回転ヘラ切り未調整、その他は横ナデ、体部内面には、不定方向の仕上げナデが施される。全体的に断面は、太めである。受部から立ち上がり端部にかけて部分的に自然緑釉付着。	完形
3	須恵器・杯	径1 mm～2 mm程度の石英および白色砂粒含む。	やや軟質	(内) 外) 灰白色	9.6	4.6	底部は、回転ヘラ切り未調整。体部は底部から1/2程度は回転ヘラ削りの後ナデを施す。その他は、ヨコナデを施している。	口縁部1/3欠損
4	須恵器・無蓋高杯	径1 mm～3 mm程度のチャートを含む。	軟質	(内) 外) 灰白色	12.1 脚部底径 8.0	8.0	脚部は短く、脚部と杯部の貼り付け部に凹溝が見られる。磨滅のため不明瞭であるが、杯部の外面底部は回転ヘラ削りを行ない、その他内面及び脚部もヨコナデを施したと思われる。	杯部、口縁1/2残存 脚部完存
5	須恵器・無蓋高杯	径1 mm～3 mm程度の長石と雲母を含む。	堅緻	(内) 灰白色 (外) ～ 黒灰色	11.1 脚部底径 9.7	13.6	杯部、中央に沈線をもち、口縁との間に不明瞭ながら凹溝が認められる。脚部は細長くのび、裾部が大きく広がったあと下端を下の方にややつまみ出し脚方に面をつくる。また脚部に二段二方透しを施し、中央に1条の凹線が半周認められる。	杯部口縁1/5欠損、脚部1/2弱欠損

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量(cm)		特徴	備考
					口径	器高		
6	須惠器・平瓶	径1mm～3mm程度の長石・石英を含む	堅緻	(内)灰色 (外)灰白色～灰色	(10.1) 復径 19.6	16.0	口縁部は外上方へ広くひろわっている。口縁部上面は平らで断面は方形を呈する。体部の肩部はやや扁平で胴部及び底部との間に稜をもち肩部には口縁をはさんで二方に小さな円形の粘土粒を2つ貼付している。底部は回転ヘラ削りの後指等でおさええた跡がみられ、肩部まで回転ヘラ削りが続く。その他はヨコナデを施し、上面開口部を円板でおさいだのち肩部の一部をはずして口縁を接合している。	口縁部1/4残存
7	須惠器・有蓋壺	黒色粒を含む。	良	(内)(外)灰色	(13.8)	残存高 5.8	口頸部はやや外反している。受部端部はつまみ出して丸くおさめている。立ち上がりは受部つまみ出しの後貼り付けており、やや内傾気味に上端に至る。	口頸部のみで1/2残存
8	須惠器・壺	径1mm～3mm程度の長石、径1mm～2mm程度のチャートを含む。	良 底部に向ってやや軟質	(内)(外)灰白色	7.5 復径 14.5	16.3	体部外面の下半分は回転ヘラ削りを行ない。それ以外内外面ともヨコナデを施す。口頸部は上方へほぼ直線的にのびたのち内彎気味に上端に至る。	口縁部2/3残存
9	須惠器・壺	径1mm～2mm程度のチャートを含む。2mm程度の石英含む。	軟質	(内)(外)灰白色	(6.7)	18.0	底部から1/2はヨコナデ、体部上半は回転ヘラ削りをおこない肩部にいたり稜線が明瞭である。口頸部は直線的にやや外傾する。底部に粘土板をはめこんだ跡が内面に見られる。	口縁部1/2残存
	土師器・壺	石英・チャートなどの砂粒多く含む	良好	(内)淡褐色 (外)黄白色～淡褐色	12.0	10.8	外面底部から体部中央部まで粗いケハ目(4本/cm)、中央部から口縁近くまで細かいハケ目(9本/cm)を施す。内面、粘土ひも巻き上げの跡がみられユレビ成形、頸部のみハケ目調整を施す。	口縁部約6cm欠損

7. 小結

龍子向イ山2号墳は、三ツ塚山塊の支尾根の北斜面に占地する古墳で、西側に4m離れて1号墳が、南西方向に24m離れて4号墳が立地している。現状では3基で一支群を構成する1基と言える。3基とも緩斜面上に築かれており、占地からも1→2→4号墳と構築されたものと考えて大過ないものと思われる。2号墳からの視界は、北側は開けており、揖西平野の弥生遺跡や北縁の古墳群は可視出来る。西側は長山丘陵で遮られている。北支群の3号墳は望めるが、同一山塊の鳥坂古墳群や三ツ塚は見ることは出来ない。

古墳は径10m前後の円墳でやや楕円形に近い平面プランとなる。丘陵斜面(南北方向)の径がやや短い、斜面上に築かれた古墳では一般的で、顕著な楕円形というわけではない。墳丘は低い方の裾から3.5mを測るが、当然それより高いことは明らかである。墳丘は地山土と有機質土を互層に積むことを基本に築かれている。石室基底石上面までの墳丘をまず墳丘築式土下層として築いている。

主体部は、やや狭長な無袖式の横穴式石室である。天井石は全く残っていなかった。石室規模は、幅0.8m、長さ5.4mで残存高1.5mを測る。石室高は残存高に1石を加えた前後で1.7m前後かと推測される。石材は、地元山塊で採取される石材を使用しており、龍子向イ山古墳群の他の古墳や周辺の古墳と同一である。ただ、奥壁の1石のみ流紋岩が使われている。上方の4号墳は2石使われており、下方の1号墳は1石も使われていない。偶然かもしれないが、築造順に流紋岩が増えている。石室形態も明らかに築造順に簡略化している。石室は狭長なことが特徴で、また裏込石が少ないことも指摘出来る特徴であろう。そのため、石室が大きく変形して傾いた要因となっている。もちろん、斜面上に築造されたため土圧の影響を受けたことは事実であるが、控えの石材の少なさが大きな原因と考えられる。力学的に石室のような壁体構造を維持するためには、長くすることが挙げられているが、それでも余りに控の石材が少なかったであろう。

用石法は、奥壁を除いて基本的に横積みであるが、上の方の3石目以上は小口積みに近いものである。すでに控えの石材の少なさから、横積みが不可能になったためと考えられる。奥壁は残存部では4石から成っており、その立面の大半を占める2石は縦積みに築かれており、2号墳では大型の石材が使用されている。縦積みをすることによって大型化のイメージを与えることを意図したかもしれないが、石室が狭長であることから開口部から見た印象では逆に狭い印象を受ける。床面積では4号墳の数値を上回っているが、印象では小型化の印象を受ける。

石室形態とともに2号墳で特徴的なことは石室内での火葬である。1号墳ほど顕著でないが、明らかに2ヶ所での火葬が推定できる。詳細な点については後章に譲るが、大きな成果である。釘が原位置を保っており、棺の長さが推定出来るのも興味深い事実であろう。

石室前方に浅い溝状の落込みがあり、甕・壺・提瓶・高杯の4個体以上の須恵器が破碎され

た状態で出土している。周辺の古墳でも類似があり、同様の性格かと考えられるが、短絡的に墓前祭祀と言ってよいか疑問である。

出土遺物は、須恵器・土師器・鉄器・耳環があり、それらから6世紀末築造で7世紀初頭まで追葬されていたものと思われる。須恵器の型式ではTK43型式からTK217型式までの幅が認められる。

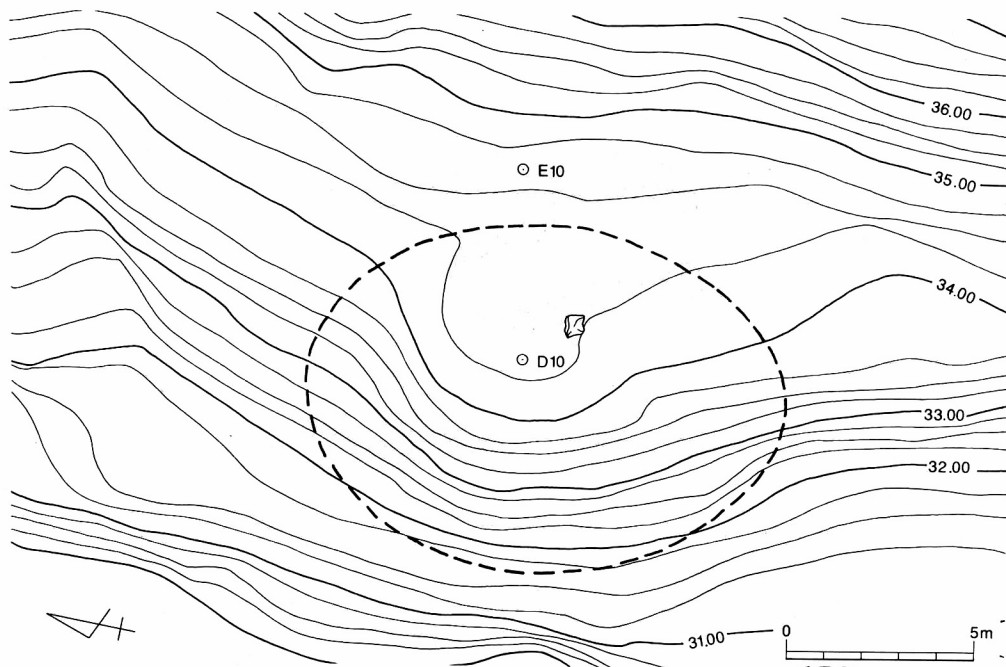
第3節 龍子向イ山3号墳

1. 位置

北地区の龍子神社の山腹に立地している。支尾根斜面山腹の傾斜が緩やかな部分に築いている。調査前の地目は、一部畑地が放棄された荒地になっており、大半は雑木林であった。しかし、全体にわたって戦後の開墾の手が加えられている。その際、側壁も崩された可能性は十分に考えられる。墳丘東半（標高の高い方）は、ほとんど墳丘が削られ、平坦化していた。

緩やかな斜面上に築かれ、水田面と8mの比高差があり、等高線と直交する方向の尾根から12m下がって位置に存在する。支尾根上に立地する6号墳と直線距離で90m、垂直距離で23mを測る。また、南地区の1号墳とは谷を隔てて140m離れている。斜面上方に弥生中期の集落跡が広がっており、墳丘などから弥生土器が出土している。

3号墳からの眺望は、支尾根によって北東～東方向を、主尾根によって南～南東方向が遮ら



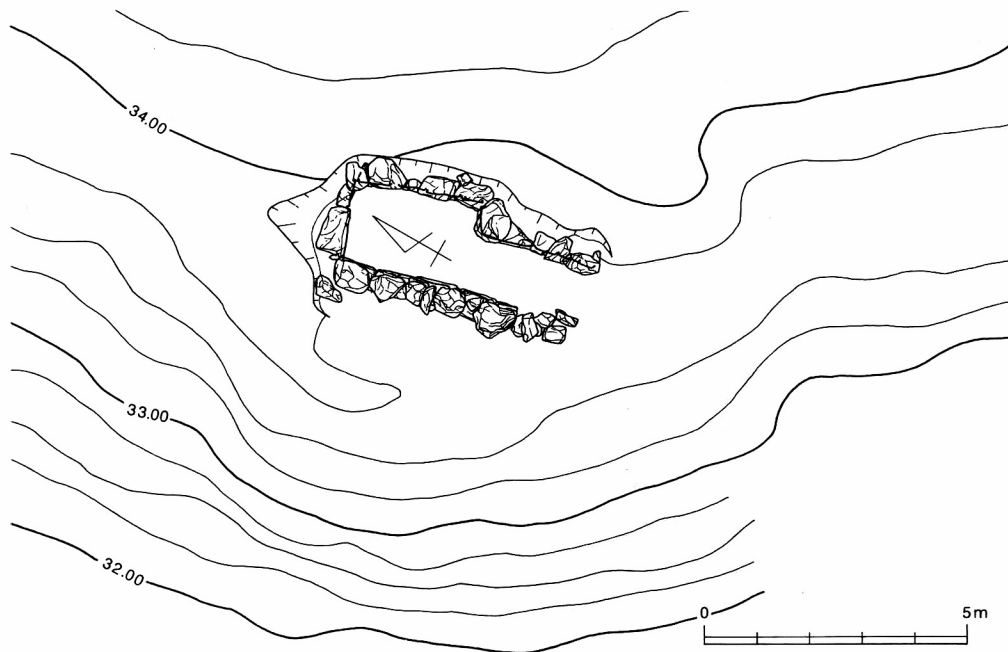
第95図 龍子向イ山3号墳地形測量図

れている。南西～北方向に限って視界が広がっている。同じ群中の1・2・4号墳や尾根上の6号墳は見る事が出来るが、同じ尾根でも尾根筋を東に下ったところに主地する5号墳は可視範囲に入っていない。南西方向の龍子長山1号墳は視野に入るが片島古墳群などは見る事が出来ない。北西方向は、尾崎遺跡を手前に池の谷墳墓群を見る事が可能であるが、池の谷墳墓群の立地する丘陵でそれより遠くの遺跡は望めない。北方向は、中垣内川によって開折された谷を見渡せ、中垣内古墳群・新宮東山墳墓群などと眺望関係にある。

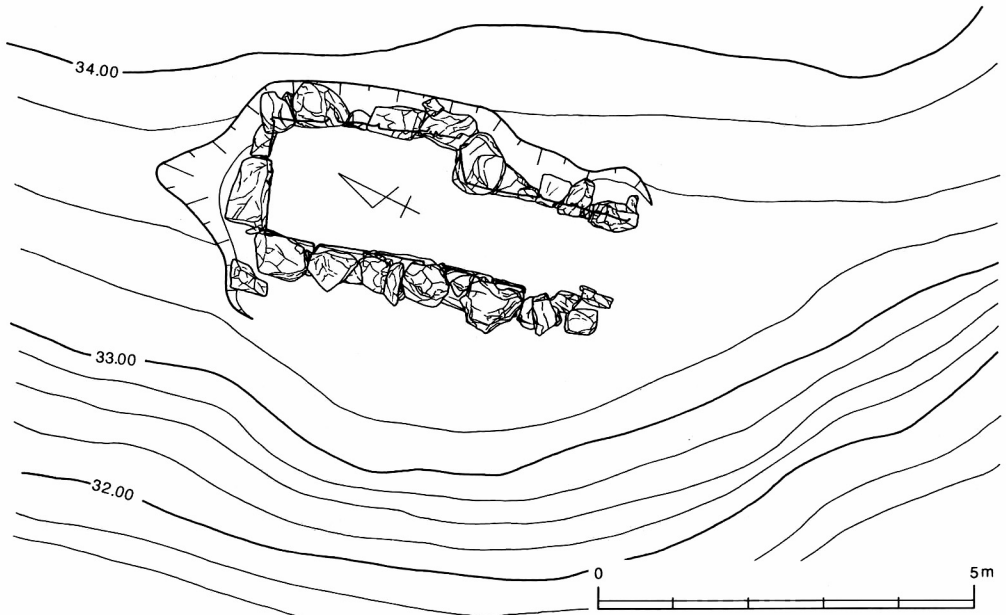
2. 外形

標高の高い方の東側は開墾によって削平されているため、墳丘を残しておらず墳裾も明確でない。調査段階には東半は緩斜面を呈していた。ただ、周辺の地形を微視的に見ると平坦部分が広く不自然ではある。畑地としての機能は早くに失われ、荒地化しており、斜面は、雑木林になっていた。袖石上部の石材は露頭していた。他の落石も露頭しており、細かく観察すると古墳と判断することは容易であった。しかし、調査前の外形から墳丘規模は確定出来なかった。僅かに東側で34.00m・34.25mのコンタラインが入り込んでいることと、31.50mと31.75mの間がやや平坦になることから墳裾を推定出来る程度であった。調査前の比高差は2.70mを墳丘として測ることが出来た。南北12m、東西9mの楕円形の墳丘が想定された。

調査を進めると、東側を中心に墳裾は明らかになった。東側は墳裾を削り出しているため、



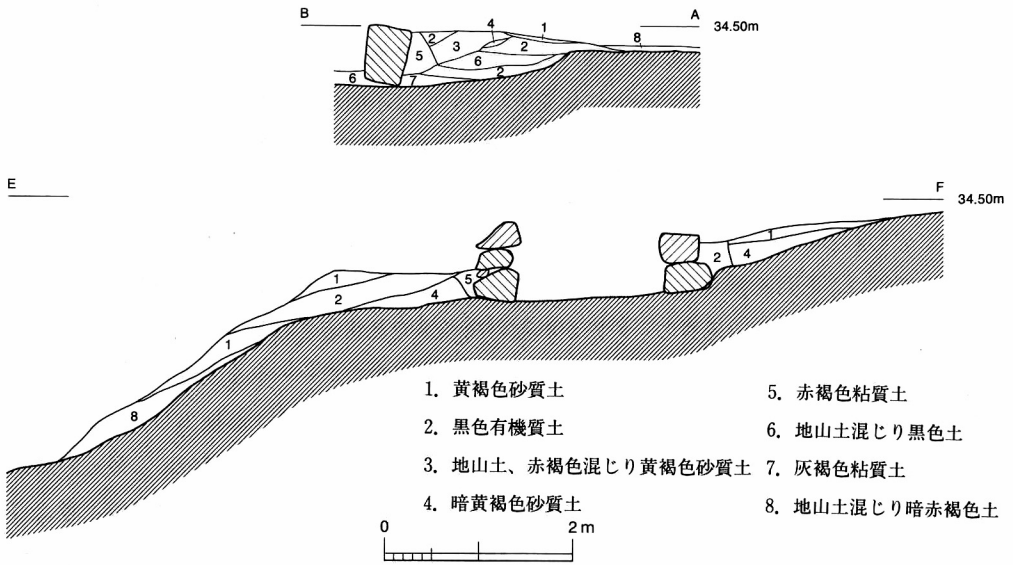
第96図 龍子向イ山3号墳墳丘測量図



第97図 龍子向イ山 3号墳地山面測量図

33.00mから34.00mまでの5本のコンタラインに変化が見られる。それらから復原すると径12mに近い規模のやや楕円形を呈する規模となる。

3. 墳丘築成



第98図 龍子向イ山 3号墳墳丘土層断面図

墳丘は、傾斜地に築かれた通有の古墳と同様で、斜面の高い方は自然地形を利用し、低い方は全て盛土によっている。そのため、下方は墳丘が流失しているため、墳裾部分は明確ではない。墳丘を築く前に標高の高い方のみ地山を成形している。墓壙を掘り下げ、墳裾部分を削り出しているが、後世の開墾のため明瞭ではない。墳丘もそのため、ほとんど残っていない。西側の低い方は墳丘を残しているが、主体部周辺の中央部分は削平を受けている。

石室基底石を置き、地山土と黒色土で墓壙を埋めるとともに基底石上面まで墳丘を築いている。この時点でも黒色の有機質を含む粘性のある土と地山ならびに堆積土である赤褐色～黄褐色の砂質土を交互に使用している。石室は2石目までしか残存していないため、墳丘上部は全く判らないが、基本的には2種の土を互層にして築いたものと思われる。西側の標高の低い方の土層観察からは、上部が流失しているが、互層の状況が推測出来る。低い方は土層が単純であるが、奥壁側はやや複雑である。層が細かく分かれており、墳丘を高くするために層を細分化しているであろうか。龍子長山1号墳でも尾根筋にあたる部分のみが同じことが指摘出来る。

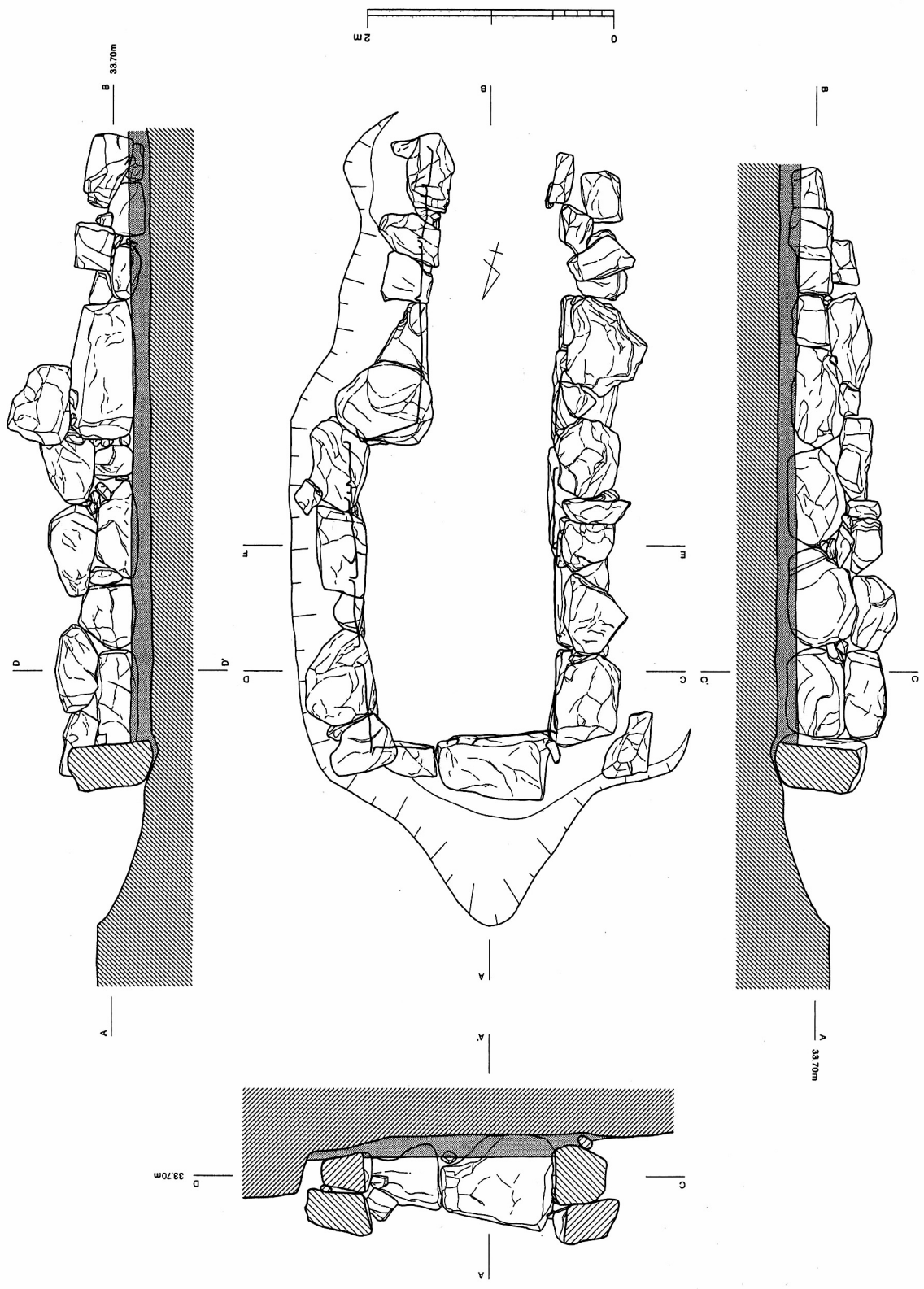
4. 横穴式石室

調査に入った段階で、石材が露出していたことから内部主体は横穴式石室であろうと考えられ、それに応じた方法を採用した。調査が進むと石室内に多くの石材が落ち込んでおり（図版33下）、開墾に際して石室が崩された可能性が高いものと思われた。そのため、基底石ならびに2石目までの1mまでしか残っていない。ただ、平面的には全て残っているものと思われる。

石室は、左片袖式の企画性のある横穴式石室である。全長4.80mで、玄室は長さ2.50m、奥壁前での幅1.50m、最大幅1.60m、羨道は長さ2.30mで、玄門幅1.10mを測り、羨門幅は不確定ながら1.10m前後と思われる。残存部の最大高は1mである。石室は、基底石と2石目までしか残っていないことから用石法など壁体構造については不明な点が多い。残存部だけから見ると、横積みの基本として石室を築いている。袖石に最大長1.1mを測る最大の石材を使っている。次に奥壁に大型の石を使用している。重量的には立方体に近い奥壁の方が重さでは上回るものと思われる。高さ0.8mあり、うち0.2mが床面下になっている。奥壁の高さ0.6m前後の高さに側壁は2石目を据えて、目地を通してようである。墳丘が残っていないことから推定の域を出ないが、築成過程の一段階が奥壁の高さまでと想定される。

石材は他の古墳同様、地元山塊で広く採取される粘板岩中のチャートを使用している。

直接石室構築に伴うものか断定は出来ないが、羨門外側でピットを1基検出している。墓壙下端に接した径25cmの円形のピットで、深さ28cmを測り、地山を掘り込んでいる。最近の調査では墓壙内や石室内でピットが確認される例が増えており、石室構造に関連する遺構と考えられている。本例はピットが1基であることから積極的に同じ例とは言えないが可能性は残されている。



第99图 龍子向イ山3号墳石室実測図

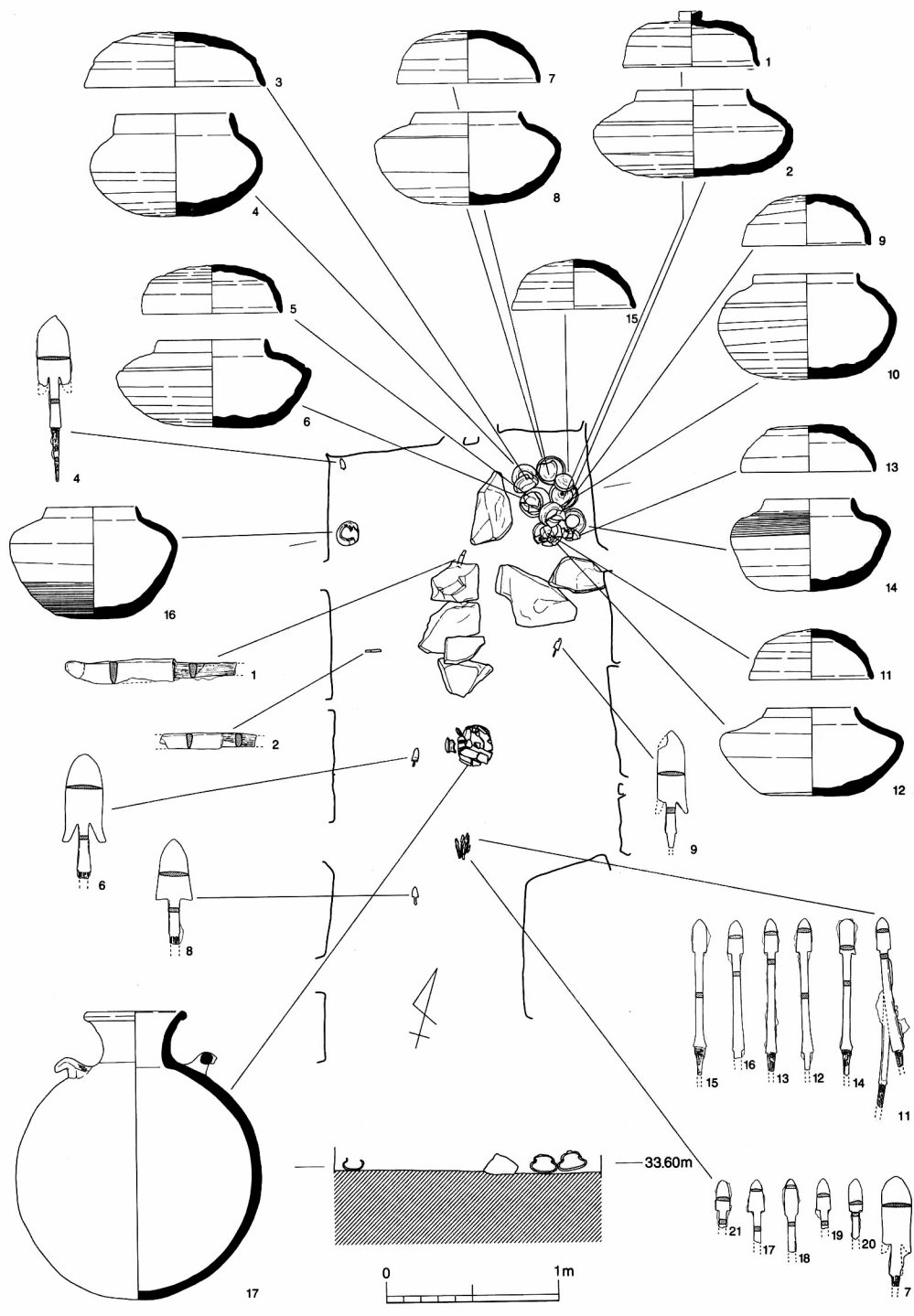
5. 遺物出土状態

意図的に側壁などの石材を石室内に落とし込んでいるが、床面は旧態を保っているものと思われる。遺物は、大別して3ヶ所から出土している。奥壁前方・玄室中央部そして玄門周辺である。奥壁前方は原位置を保っているが、他の2ヶ所は原位置を移動している可能性も考えられる。

奥壁前方は、奥壁の両隅に分かれている。左（東）隅は奥壁コーナーから幅1m、長さ1.2mに石材で囲っており、その中から7組の有蓋短頸壺と杯蓋1点が出土している。側壁第1石は主軸と平行でなく、奥壁から玄門部へ向かって開いており、出土遺物も主軸でなく側壁第1石に平行に置いている。2例3個の6組を接するように並べており、玄門寄りの4組の上にさらに1組の短頸壺が置かれている。7組のうち3組は焼成段階からセット関係になっている。灰被りの状況が同一なことから明らかである。当初からセットとして焼かれていないものは、西（中央）側の両端と西（側壁）側の手前端と上に乗っている4組である。奥壁隅の蓋は欠けており、埋葬時から欠けていたものと思われる。他は完成品もあり、割れてはいたが、接合すると完成となるものである。側壁寄り中央の蓋は、唯一つまみ部を付加した蓋であり、このセットの上に杯蓋が1点重ねられており、丁寧な置かれ方で意図されたものがあるのであろうか。奥壁右（西）隅からは鉄鏃（4）が出土しており、側壁沿いで短頸壺が1点出土している。この短頸壺には、左隅の須恵器群中央に置かれた杯蓋がセットとして焼成されていたことが明らかである。

玄室中央からは、須恵器提瓶と鉄器が数点出土している。提瓶は、焼成の悪いもので生焼けに近いものである。口縁部を西側に向けて割れている。ほぼ主軸と直交状態に置かれ、平たい面を下にしている。鉄器は、鉄鏃2点と刀子2点が出土している。刀子の1点（1）は石室中央の石組の下に入っており、追葬時の状態が残されている。他の3点は原位置を保っていない可能性が高い。石室中央部ならびに奥壁隅出土の鉄鏃は広根式の大型鏃である。玄室ほぼ中央から石棺材と思われる板石が出土している。揖西平野の南西部分の大陣原・竹原周辺で採取される流紋岩で、板状節理を呈することから早くから使われている石材である。近くでは、龍子三ツ塚1号墳の竪穴式石室の用材として使われており、現在でも墳丘上に散乱している。また、鳥坂1号・2号墳の箱式石棺の棺材としても使われている。同じ龍子向イ山古墳群でも4号墳の奥壁に使用されている。最大長23cmの石棺材で1石しか確認していないが、箱式石棺の存在を首肯する資料である。

玄門付近は、玄門の内側から鉄鏃が出土している。玄門中央から逆刺のない広根式の鏃が1本検出されているが、原位置を保っていない可能性が高い。玄門内側からは鉄鏃が集中して確認された。細根式の鏃12本以上が束ねられた状態で一塊りとなって出土、さらに広根式の鏃1



第100図 龍子向イ山3号墳遺物出土状態図

本も出土している。

石室埋土中から土師器小形丸底壺が1点出土している。遊離遺物であるが、埋葬時の遺物と考えられる。

6. 出土遺物

(1) 土器

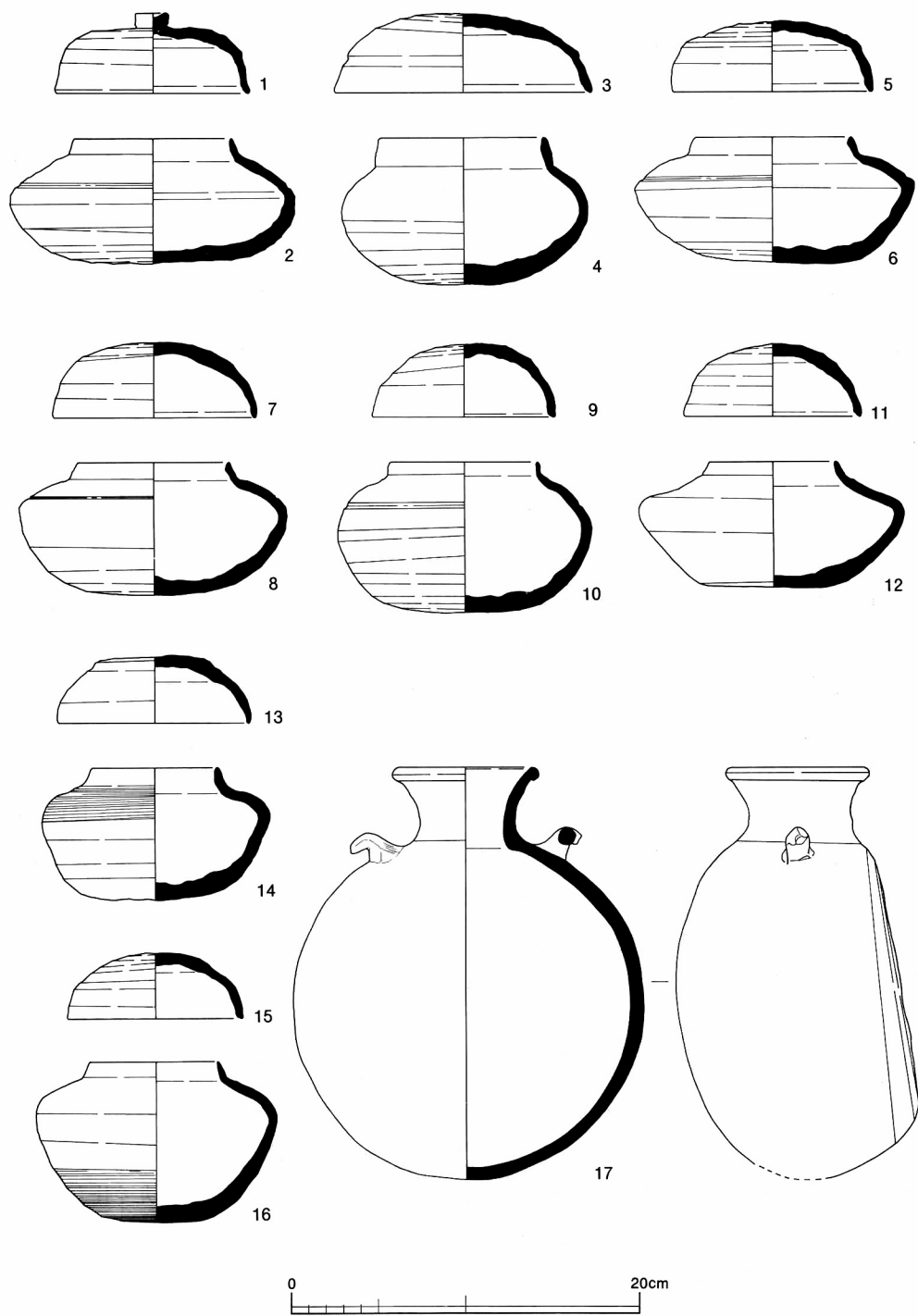
3号墳から出土した土器のうち古墳時代に属すると思われるものは、須恵器では杯蓋8点(1・3・5・7・9・11・13・15)、短頸壺8点(2・4・6・8・10・12・14・16)、提瓶1点(17)で、図化できなかったものに甕の破片がある。土師器では、小壺が1点図化できた。

その他、埋土及び表土層から若干の新しい遺物が出土しており、杯1点(18)、碗の底部3点(19・20・21)、壺1点(22)を図化したが、復原・図化の不可能なもので、碗と甕の破片が数個体分ある。

① 須恵器

杯蓋(1)は中凹みのつまみを持ち、天井部と口縁部の間に稜が見られ、口縁部は直線的にやや外方にのびて口縁端部は断面三角形を呈する。天井部は回転ヘラ削りを行い、それ以外は内面外面ともヨコナデを施す。(3)は全体的に他の蓋に比べやや軟質で口縁部は一部焼け歪んでおり口径は正確に測ることはできないが、14.5cm前後と考える。これは短頸壺の蓋としては大きく、杯の蓋を転用したものであろう。整形は(1)と同じく天井部外面は回転ヘラ削り、その他内外面ともヨコナデを行っている。口径が大きいためにやや扁平な感じで、口縁下端より約2cm上に凹線が認められ、口縁部は外方にのびて端部内面をナデている。(5・7・9・13・15)も整形は天井部外面、回転ヘラ削り、その他内面外面ともヨコナデを行っている。(5)は天井部やや扁平で口縁部やや内彎気味にのび、端部断面は三角形を呈する。(7・9・13・15)は全体に丸く、(7・11)は口縁端部が断面三角形、(9・15)は方形を呈する。(13)の天井部はヘラ切りがなされ、未調整である。それ以外は内面外面ともヨコナデを行う。口縁部はやや内彎して端部に至り、口縁部下端は丸くおさめている。また天井部内面には径4cm程度のあて具による同心円叩き、そのまわりにはヘラ状工具によるナデの痕が見られる。

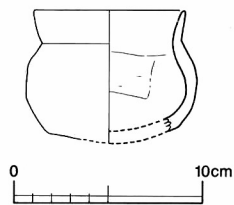
有蓋短頸壺(2・4・6・8・10・14・16)は底部を回転ヘラ削り、それ以外の内面外面ともヨコナデを行っている。(2・6・8)は全体的に扁平で、肩部には1条の凹線を認める。口縁部は立ち上がりが1cm弱と短くやや内傾気味にのびて(2・6)は端部を丸く仕上げ、(8)は端部断面三角形を呈する。なお、(2)は(1)と、(6)は(5)と、(8)は(7)と、灰被りの状況により、焼成時からセット関係であったと考えられる。(4)は体部が全体的に丸味をおび、口縁部は他の短頸壺より比較的高く、立ち上がりは1.7cmを測る。口縁部はつけ根部分より端部近くで器壁が厚くなり上端を丸く収める。(10)は全体に丸く、肩部外面には不明瞭ながら凹線が見られる。口



第101図 龍子向イ山3号墳出土須恵器実測図

縁部は5mm程度で短く、直線的にのび、器壁はかなり薄目である。(12)は肩部が扁平で図化された断面からはそり上がった感じさえうける。底部外面はヘラ切りを行い未調整で、それ以外の内面外面ともヨコナデを施す。外面の体部と口縁部の間には貼り付けの際に生じたと思われる沈線がある。口縁部はやや内傾気味に肩部の延長のごとく上端に至る。(14)は底部回転ヘラ削りの後一部をナデており、焼成時に付着した他土器片を認める。肩部外面にはカキ目調整を施し、口縁部は内傾気味に端部に至る。(16)は底部から1/3程度にカキ目を施す。肩部には蓋の口縁の一部が付着しており、これは(15)の蓋の破損部と一致する。このことから(15)の蓋と(16)の短頸壺が焼成時からセット関係にあったことは明確である。

提瓶(17)体部背面のふくらみは少なく回転ヘラ削りを行う。体部前面及び側面は非常に軟質で調整観察は不可能であるが、前面中央に粘土板を充填していることは確認できる。体部側の耳は小型でカギ状に屈曲する。口縁部は外反してのび、端部を外方に丸くおさめる。



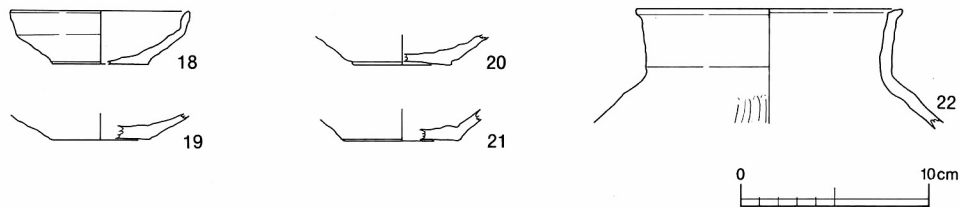
第102図 土師器実測図

② 土師器

器高7.6cm、口径8.0cmを測る、いわゆる小型丸底壺である。体部は全体的に丸く口縁部はやや外傾してのびる。全体的に磨滅が著しく調整は不明であるが、体部内面には粘土のつぎ目が確認でき、ヘラで削ったと思われる痕跡が残る。体部外面には若干ではあるが肩部に黒班が認められる。

③ 後世の土器

(18・19・20・21)は回転糸切り底の碗であるが、完形に復元できるものではなく、図面上では唯一(18)の小型の碗が復元可能である。(18)は復元口径9.4cm、器高2.8cmで体部は直線的に外方へ2/3程度のび、そこで稜をもって屈曲し、口縁部へとつづく。(19・20)は図のように口縁部にあたるところがほとんどないため口径など全体の器形は不明であるが、(21)は同一個体と思われる碗の口縁部の破片から所謂碗であることがわかる。壺(22)は体部はほとんど残っておらず、形態を確認することは不可能であるが、同一個体と考えられる破片から肩部は丸みをおびていると推察する。口縁部はほぼ真っすぐにのび、端部を外方へつまみ出ししながらナデている。器表面が荒れているため明確ではないが体部外面には平行叩きのちカキ目調整を施していると見られる。



第103図 龍子向イ山3号墳 後世の遺物実測図

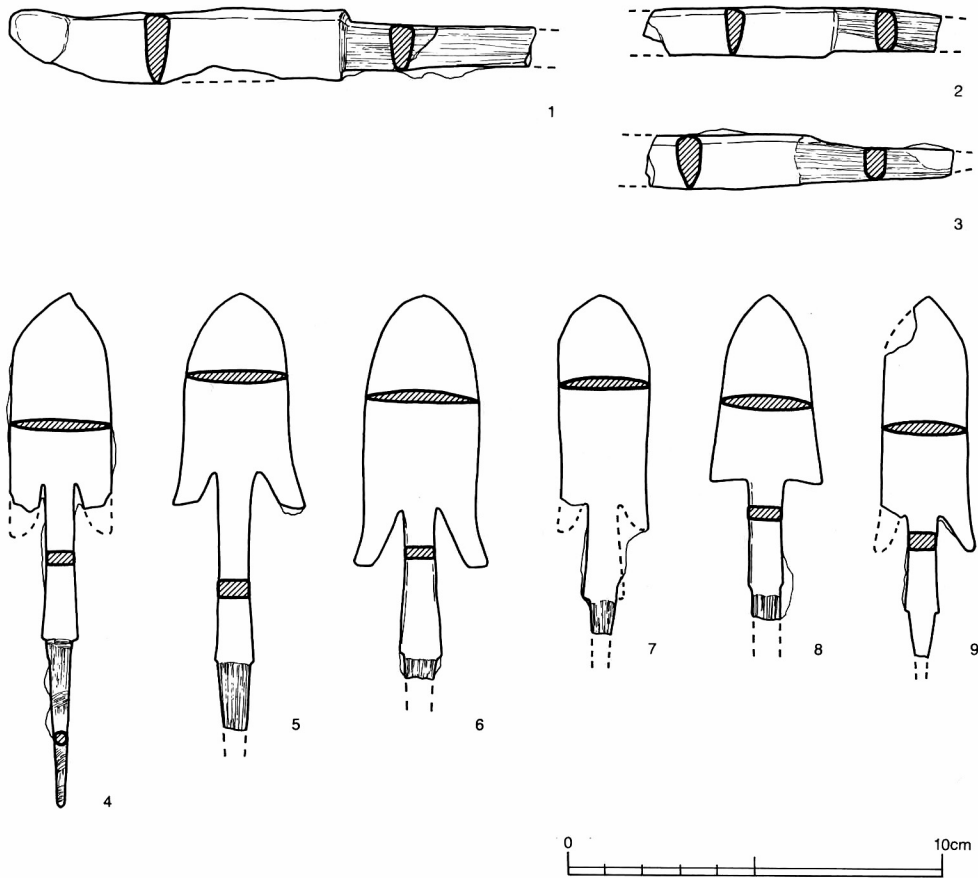
(2) 鉄器

刀子

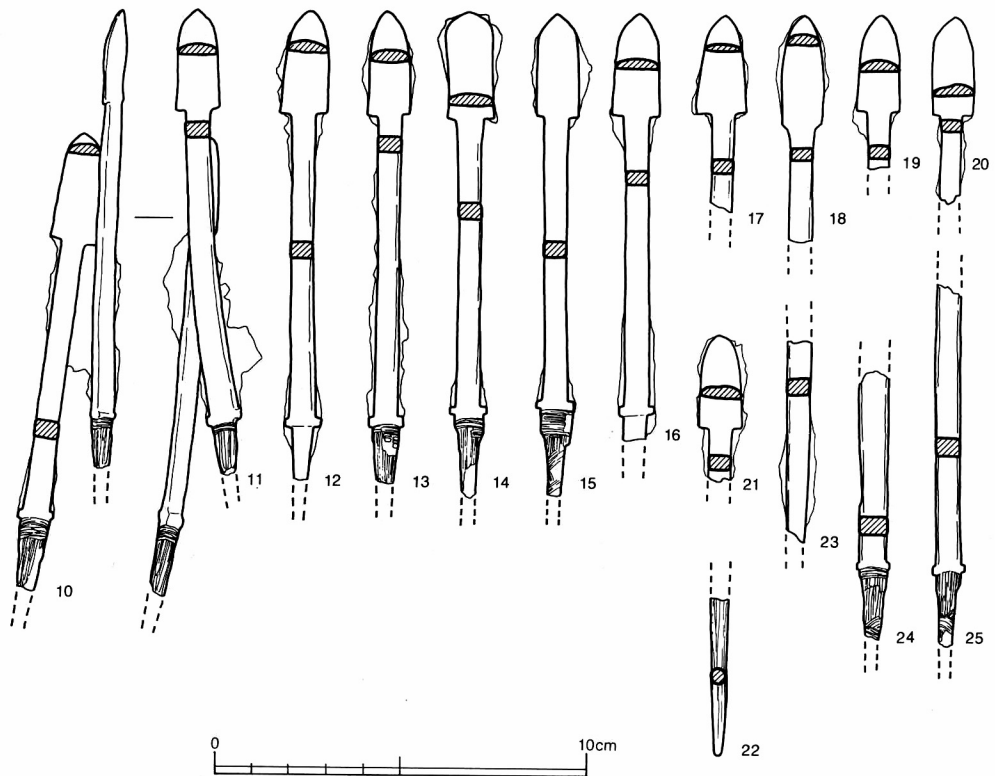
刀子は3点出土した。茎の一部を欠損してはいるが最も完形品に近い(1)は、刀部長8.9cm刀部最大幅1.8cm、峰幅0.5cm、茎部残存長5.1cmを測る。断面は刀部、茎部共に二等辺三角形を呈する。茎部には柄と考えられる木質が付着している。(2)(3)は、刀部・茎部を欠損し、全容はつかめないが、関部が残っている。共に関部から茎部にかけて木質が付着する為明瞭ではないが、(2)は片関、(3)は両関であろう。刀部残存部の峰幅は0.4~0.5cmを測る。

鏃

鏃は石室内より計22点出土したが、完存するものは無かった。ただ(4)は鏃身の脇袂部を欠損するのみで、全長13.5cm、篋被長4.1cm、茎長4.4cmを測る。鏃身は両丸造である。茎部には木質が付着しており、樹皮を巻いた痕が観察される。(5)(6)は茎部を欠くのみで、鏃身の形態は(4)に同じであるが、(6)は鏃身長(7.1cm)が篋被長(3.9cm)よりも大きい。(7)(9)は鏃身の一部と



第104図 龍子向イ山3号墳鉄器実測図(1)



第105図 龍子向イ山3号墳鉄器実測図(2)

茎部を欠損している。共に(6)と同じく篋被長よりも長い鍔身部を有するが、鍔身の幅は(6)よりも狭い。以上の鍔は、後藤守一氏の分類によると、篋被両丸造腸袂葉式に当たる。(8)は鍔身の底辺に腸袂も持たず鍔身が二等辺三角形を呈している。鍔身長(4.9cm)は、篋被長(2.7cm)よりも長い。分類では篋被挾鋒両丸造三角形式に相当する。また(5)~(8)の茎部にも木室が残っており、矢柄を装着した状態で副葬されたと考えられる。

(10)~(25)は玄門内側から一括して出土した。鍔身の数からおそらく12本を一束にまとめて副葬したのであろう。完存するものはなく全長はわからないが、(4)~(9)に比べて、鍔身長2.4~2.9cm、篋被長7.5~8.2cm、鍔身の最大幅1.1~1.3cmと、小型の鍔身と長い篋被長が特徴である。これらは、貫通力を増したより実戦的な鍔の形態である。また棘状の篋被を持ち、茎部には矢柄と考えられる木質が残っている。後藤氏の分類では、片丸造棘篋被鑿箭式に当たる。

参考文献：後藤守一「上古時代鐵鍔の年代研究」『日本古代文化研究』1942

第13表 龍子向イ山3号墳 出土土器観察表

()は復原径

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量(cm)		特徴	備考
					口径	器高		
1	須恵器・蓋	黒色粒を含む2mm程度のチャート、1mm～3mm程度の長石含む	良好	(内)灰白色～暗灰色 (外)淡灰褐色～暗灰色	11.0	4.5	天井部中央につまみがつく、つまみは中央部が凹む。 口縁端部はやや外傾する。天井部から1cm程度は貼り付けのためのナデが施され、あと1/2は回転ヘラ削りを行ない、稜をもつてその他ヨコナデにいたる。外面つまみ部分に若干自然袖付着器表面やや荒れている。	完形
2	須恵器・有蓋短頸壺	5mm～7mmの小石、2mm程度の長石含む。	良好	(内)灰色 (外)肩より上は淡灰色～暗黄灰色 底部は暗灰色～灰色	9.0 腹径 16.3	7.1	全体的に扁平で底部から体部最大径部まで回転ヘラ削り、肩部に1条の凹線を有し、他内面までヨコナデを行う。口頸部外面に1の蓋と重ねて焼いた跡が見られる。口縁部立ち上がりは1cm弱と短くやや内傾し、端部は丸く仕上げている。	完形
3	須恵器・蓋	2mm～4mm程度の長石含む。	良	(内)(外)灰色	14.6	4.4	天井部は回転ヘラ削りを行なっているが、稜線の上約2cm程度はヨコナデを施す。稜線すぐ下にナデによると思われる凹線状のくぼみが見られる。口縁部は稜線から下やや外傾しながら端部にいたり横ナデ成形を行う。口縁端部は丸くおさめているが内面にナデによる若干の凹みが見られる。内面天井部は一方方向の仕上げナデを施している。	ほぼ完形
4	須恵器・有蓋短頸壺	1mm～3mm程度の長石、8mmの小石を含む。	良好	(内)灰白色 (外)肩より上は淡灰色～黄灰色 底部は灰色～灰白色	9.3 腹径 14.1	8.3	底部は回転ヘラ削りで、他内面にかけて横ナデを行う。肩部口頸近くに蓋との重ね焼の痕が見られる。口縁部は立ち上がりは1.7cmあり、やや内傾している。口縁端部は断面、三角形を呈する。	完形
5	須恵器・蓋	最大径7mmの長石粒をはじめ2mm程度のチャートなど小石粒砂粒を含む。	良好	(内)灰色 (外)灰色～赤灰色	11.3	4.0	天井部外面に回転ヘラ削り、他は内外面ともヨコナデを行う。口縁部は外傾しながら口縁端部近くでやや内彎する。端部は断面三角形を呈する。	完形

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量 (cm)		特徴	備考
					口径	器高		
6	須恵器・ 有蓋短頸壺	最大径 3 mm ~ 5 mm の 小石をはじめ長石・ チャートの砂粒含む。	良好	(内) 灰白色 (外) 灰白色 ~ 灰色	8.8	7.2	全体に扁平な形で、底部、回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを行う。体部最大径 15.9 cm を測る。肩部後の上にナデによると思われる凹みが見られる。口頸部には蓋と重ね焼した痕がある。口縁部立ち上がりは 1 cm 弱でやや内傾し、端部は断面三角形を呈する。	完形
7	須恵器・蓋	最大径 5 mm 程度の小 石と、長石、石英、 チャートの砂粒含む。	良好	(内) 灰色 (外) 橙灰色	11.5	4.3	天井部外面に回転へら削り、他は内外面ともヨコナデを行う。全体的に丸く、口縁部は、断面やや内傾し三角形を呈する。天井部内面に一方方向の仕上げナデが認められる。	口縁部 1/5 欠 損
8	須恵器 有蓋短頸壺	最大径 3 mm ~ 5 mm の チャート、長石をは じめ黒色砂粒などを 含む。	良好	(内) 灰色 (外) 暗灰色 ~ 灰色	8.6	7.5	全体的に扁平、底部から体部 1/2 程度まで回転へら削り、その他内外面ともにヨコナデを行う。体部最大径 15.4 cm を測る。肩部少し上面にナデによると思われる凹線が認められる。口頸部に蓋との重ね焼のあとが見られる。口縁の立ち上がりは 1 cm で内傾し、端部は断面三角形を呈する。	完形
9	須恵器・蓋	1 mm ~ 3 mm 程度の石 英、長石を含む。	良好	(内) 灰色 (外) 浅黄橙色 ~ 暗灰色	10.4	4.2	天井部外面に回転へら削り、他は内外面ともヨコナデ、口縁部から約 2 cm 上までなだらかに下り、そこから口縁に、ほぼ垂直に下りる。口縁端部はやや四角形を呈する。	完形
10	須恵器・ 有蓋短頸壺	最大径 4 mm の長石を はじめ白砂粒含む。	良好	(内) 灰色 (外) 灰色 ~ 暗灰色	8.4	8.5	底部から肩部まで回転へら削り、その他肩部から内面までヨコナデ。体部は全体的に丸く、最大径 14.5 を測る。肩部はしにナデによる凹みが見られる。口縁部は 6 mm と短く、直立し、端部は断面やや三角形を呈する。	完形
11	須恵器・蓋	白砂粒多く含む。	良好	(内) 灰白色 (外) 淡黄灰色 ~ 暗灰色	10.0	4.1	天井部外面に回転へら削り、他は内外面ともヨコナデ。口縁端部は丸くおさめられているが、端部内面にナデによる凹みが見られる。天井部内面に一方方向の仕上げナデを施す。	口縁部 1/5 欠 損

No.	種別・器種	胎土	焼成	色調	法量(cm)		特徴	備考
					口径	器高		
12	須恵器・有蓋短頸壺	最大径4mmの長石をはじめ黒砂粒を含む。	良好	(内)灰白色 (外)底部灰白色 体部暗灰色 肩部黄灰色～灰白色	7.2	7.1	全体に扁平、肩部がはっている。底部へラ切り後荒いナデを施す。その他内外面ともヨコナデを行なう。口頸部に蓋との重ね焼の痕残る。口縁は1cmたらずで内傾、口縁端部は丸く仕上げている。外面自然釉付着。	口縁部約4cm欠損
13	須恵器・蓋	長石、チャートなどの砂粒を含む。	温度低く焼いたようでありや甘い	(内)灰白色 (外)灰白色～灰白色	10.8	3.9	天井部へラ切り未調整、その他内外面ともヨコナデを行う。天井部内面中心最大径4cm程度にあて具による同心円叩き、そのまわり3cmくらいにわたって、へラ状工具によるハケ状の痕残る。口縁やや内彎し、端部は丸く仕上げている。	1/3欠損
14	須恵器・有蓋短頸壺	石英、チャートなど黒砂粒を多く含む。	良好	(内)灰白色 (外)灰白色～灰色	7.1	7.5	底部回転へラ削りの後中心部にナデを施したとみられる。その他体部内外面ともに横ナデを行う。肩部全体に、カキ目を施す。口縁部約1cm強で内傾してのび端部は丸く仕上げている。口頸部には蓋との重ね焼の痕が認められる。また底部には他土器片付着。外面一部器表面荒れている。	口縁部1/3欠損
15	須恵器・蓋	最大径3mmのチャート及び黒色砂粒とその他白色砂粒を含む。	良好	(内)青灰色 (外)褐灰色～灰色	9.9	3.8	全体に丸く、天井部は回転へラ削り、その他内外面ともヨコナデを行う。口縁端部は断面やや四角形を呈する。外面器表面は全体的に荒れている。	口縁端部約2/3欠損。この欠損部は次の40の肩部に付着している
16	須恵器・有蓋短頸壺	黒砂粒含む	良好	(内)灰白色 (外)底部暗灰色～灰色 肩部淡黄灰色～灰白色	7.2	9.1	底部から約1/3まで回転へラ削りの後カキ目調整を施す。その他内外面ともにヨコナデ。口頸部には10との重ね焼のあとがみられる。口縁部は1cmで内傾し、端部は細くまとめている。肩部外面器表面が荒れている。	体部弱干欠損
17	須恵器・提瓶	最大径4mmのチャートをはじめ石英など黒砂粒も多く含む。	口縁部やや甘い程度であるが、体部はかなり軟	(内)(外)口縁部ちかくは灰白色であるが体部など全体的に淡黄灰色	7.6	残存23.8	体部背面はほぼ平らで回転へラ削り、体部全面は丸くふくはれヨコナデを行い、中央部に粘土の円盤を充填する。口縁部は4cm程度で外反し端部をやや外へそりだして丸く仕上げている。肩の両側にはカギ状にあさく屈曲する耳がつく。耳の先端はやや尖っている。	体部、部分的に欠損
	土師器・小型丸底壺	長石、チャート、酸化粒を含む。	良	(内)(外)面とも淡橙褐色	(8.0)	残存6.8	口縁部はやや外傾気味にのびる体部内面に粘土のつぎ目が確認できる。内面底部近くにはへラで削ったと思われる跡が残る。体部外面の肩部に黒斑が認められる。	口縁部2cm残存 底部1/2残存

第14表 龍子向イ山3号墳 出土鉄器計測表

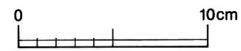
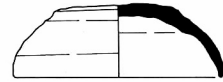
No.	種類	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	刀子	床面	14.05	1.95	0.65	28.8	木質残存
2	刀子	床面	7.9	1.3	0.5	10.4	木質残存
3	刀子	床面	8.1	1.45	0.7	10.9	木質残存
4	鍬	床面	13.5	2.75	0.35	12.2	木質残存、樹皮を巻いている？
5	鍬	床面	11.45	3.55	0.5	16.4	木質残存
6	鍬	床面	10.05	3.6	0.35	15.5	木質残存
7	鍬	床面	8.9	2.4	0.35	13.1	木質残存
8	鍬	床面	8.55	2.95	0.35	12.1	木質残存
9	鍬	床面	9.5	2.3	0.5	10.5	
10	鍬	床面	12.15	1.2	0.45	27.0	木質残存
11	鍬	床面	12.3	1.15	0.4	27.0	木質残存
12	鍬	床面	12.35	1.3	0.4	11.9	
13	鍬	床面	12.4	1.15	0.4	10.7	木質残存
14	鍬	床面	12.75	1.35	0.4	11.3	木質残存
15	鍬	床面	12.7	1.1	0.4	11.6	木質残存、樹皮を巻いている？
16	鍬	床面	11.25	1.3	0.35	10.9	
17	鍬	床面	5.2	1.35	0.4	4.0	
18	鍬	床面	6.0	1.1	0.35	5.8	
19	鍬	床面	4.1	1.15	0.35	3.1	
20	鍬	床面	4.9	1.15	0.3	3.4	
21	鍬	床面	3.8	1.15	0.4	3.2	
22	鍬	床面	4.15	0.4	0.45	1.5	木質残存
23	鍬	床面	5.3	0.65	0.45	4.4	
24	鍬	床面	0.7	0.8	0.5	5.2	木質残存、樹皮を巻いている？
25	鍬	床面	9.5	0.9	0.5	7.0	木質残存、樹皮を巻いている？

7. 小結

龍子向イ山3号墳には三ツ塚山塊の支尾根北斜面に築かれた古墳で、北地区に支群分けされる。北地区で調査を行ったのは3号墳だけである。緩斜面上ではあるが、1・2・4号墳に比べると、平坦に近いところに占地している。ただ、山裾に近く、戦後の開墾など人工の力が最も加えられており、墳丘の残存度も良好とは言えない。石室の保存状態も劣悪で2石目までしか残っていなかったが、平面プランは把握出来た。3号墳からの眺望は、大局的には、1号墳

などと同じであるが、立地から北東部の視野は狭められている。逆に揖西平野はやや広く視界に収めることが可能である。

外形は、やや楕円形を呈するものの約12mに近い円墳で、墳丘は2.7mが残っていた。標高の高い南側のみ三日月状に地山を削り出し成形している。墓壙を掘り下げ、基底石を据え置き、まず基底石上面まで墳丘を築いている。墓壙は、奥壁部のみ突出した平面形態である。奥壁石材を据え置くために必要だったのであろうか。残存する墳丘は少ないが、他の古墳同様2種の土を互層に積んでいる。標高の低い方は単純な盛土の積み方を示すが、高い方、特に奥壁側は細かい層で築いている。



第106図 須恵器内面の成形痕

主体部は横穴式石室で、高さは1mだけ残っており不明であるが、平面規模は確認されている。左片袖式の石室で企画性のあるタイプである。全長4.80m、奥壁幅1.50m、玄門幅1.10m、羨門幅1.10m、玄室長2.50m、羨道長2.30mを測る。玄室は中央がやや幅を広げ、最大幅は1.60mである。石室の用石法は、1・2石目の下部のみが残存していることもあろうが、横積みである。袖石と奥壁に大型の石材を使用している。ともに奥行きもある立方体に近い安定感のある石材である。石材は、他と同じく粘板岩を使用している。墓壙掘り方底面でピットを1基検出しており、石室構築に関連するものではないかと考えられる。

3号墳の遺物の出土状況は興味深い。須恵器・土師器・鉄鏃・刀子が出土している。調査結果からは床面は1面と思われる。床面は地山土を精製して化粧土として置き、床面としている。一括遺物の中に土器の時期差があり、調査した床面が築造時のものでないと考えれば、当初の床面遺物が掻き出された推定も考えられるが、物的証拠のない結果から、追葬面はないと考えている。出土位置は4ヶ所に分けられるが、奥壁前の北東隅での遺物群が注目される。短頸壺7個と蓋8個が一括出土している。全て蓋をした状態で出土しており、短頸壺の1点には蓋を2個重ねて副葬していた。7組のうち3組は明らかに焼成前からセットとして決められていたようで、両者の接合面が合致したり、灰被りの状況が同一である。短頸壺は非常に扁平なものが多く、蓋もバラエティに富む。個々で出土すれば時期差と考えられる個体差があるが、同時期の埋葬であることは出土状況から明らかである。石棺材と考えられる石材は1点床面から出土している。

第4節 龍子向イ山4号墳

1. 位置

1・2号墳と同じ三ツ塚山塊の北西へ延びる支尾根の斜面上に位置している。1・2号墳の上方に存在し、1・2号墳の立地する部分に比べて、斜面はやや急である。立木伐採を行った

段階で墳丘が認められたように、小規模ながら外形から古墳と判断できた。水平距離は1号墳と10m、2号墳と8mを測る。古墳を築造したところは、斜度に変化がなく自然地形に平坦面を作って古墳を築いたものと思われる。水田面とは16mの比高差を持つ。

4号墳からの視野は、基本的に1・2号墳と同じであるが、標高の高いところに立地することから、僅かに眺望範囲は広がっている。しかし、遺跡について言えば、ほとんど同じで、僅かに的場山山麓や揖西平野が多少広がっている程度で、白鷺山などは眺望関係にない。4号墳の位置は、1号墳の真上に当たり、コンタラインに直交する上方位置に占地している。1・2・4号墳とも主体部主軸方向は同一で、親縁性が求められる。

2. 外形

墳丘は斜面に立地しているため、自然流失は免れず、少なからず流れているものと思われる。矢井石も全く残存せず、石室内にも落ち込んでいなかった。調査前の地形測量図では、標高の高い南半はほとんど墳丘を示さず、かろうじて43.75m～45.00mの間が平坦面に近い緩斜面を呈しており墳丘と判断出来た。標高の低い北半は、42.25mから44.00mまで墳丘を示している。

墳丘測量図も地形測量図と大きな変化はなく、南半は斜度が緩くなっている。石室上面は南北に約2.8m平坦になっている。墳丘北半は、調査前に比べて墳裾がやや明らかになっている。墳丘北半は、調査前に比べて墳裾がやや明らかになっている。特に石室開口部側の西側はコンタラインが入り込んで墳裾が明らかである。東西方向は8mを測り、南北方向は明確でないが8mをやや下回る数値になるように思われる。コンタラインに平行に8mの長径となる楕円形を呈する墳丘と思われる。現状での墳丘の残存高は、北側墳裾からの最大値は2.5mを測るが、墳丘は1m前後である。

3. 墳丘築成

墳丘築成は他の古墳と同様である。標高の高い方は自然地形を利用しており、削り出して墳裾を画する作業は行っていない。逆に上方から流入した堆積土があり、墳裾は不明瞭である。

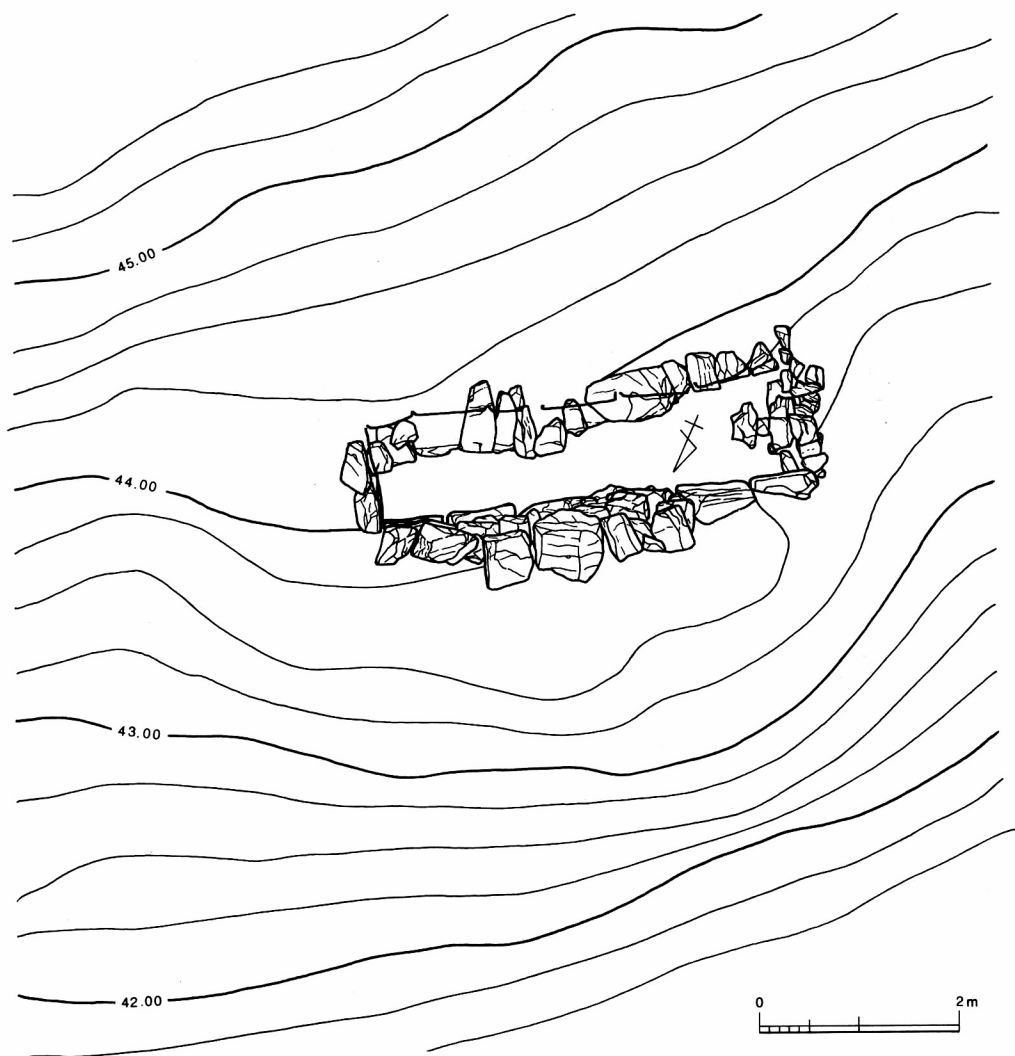
まず、標高の高い方を掘り下げ墓壙を築き、主体部築造のための平坦面を築いている。標高の低い方は堆積土があり、地山面まで下げたわけではなく、旧地形を利用している。北側の下層の茶褐色砂質土は旧地表面と考えられる。上層の茶褐色砂質土とその間の黒灰色有機質土は、石室構築前に盛られた土であろう。その後、基底石を据え置き、石室構築にかかるが、他の古墳と比較すると石材が小型であることから基底石だけの段階で墳丘を築き始めず、南側は墓壙が埋まるまでの部分の盛土を施している。石室はほとんど裏込石が使われておらず、比較的軟質の暗赤褐色土が裏込土として使われている。その上層は、基本的に地山客土と有機質土を互層にして墳丘を構築している。有機質土は10cm以内で薄い層で長さも短い、地山客土を中心

とする砂質（砂礫）土は厚く長い部分を1層にしている。

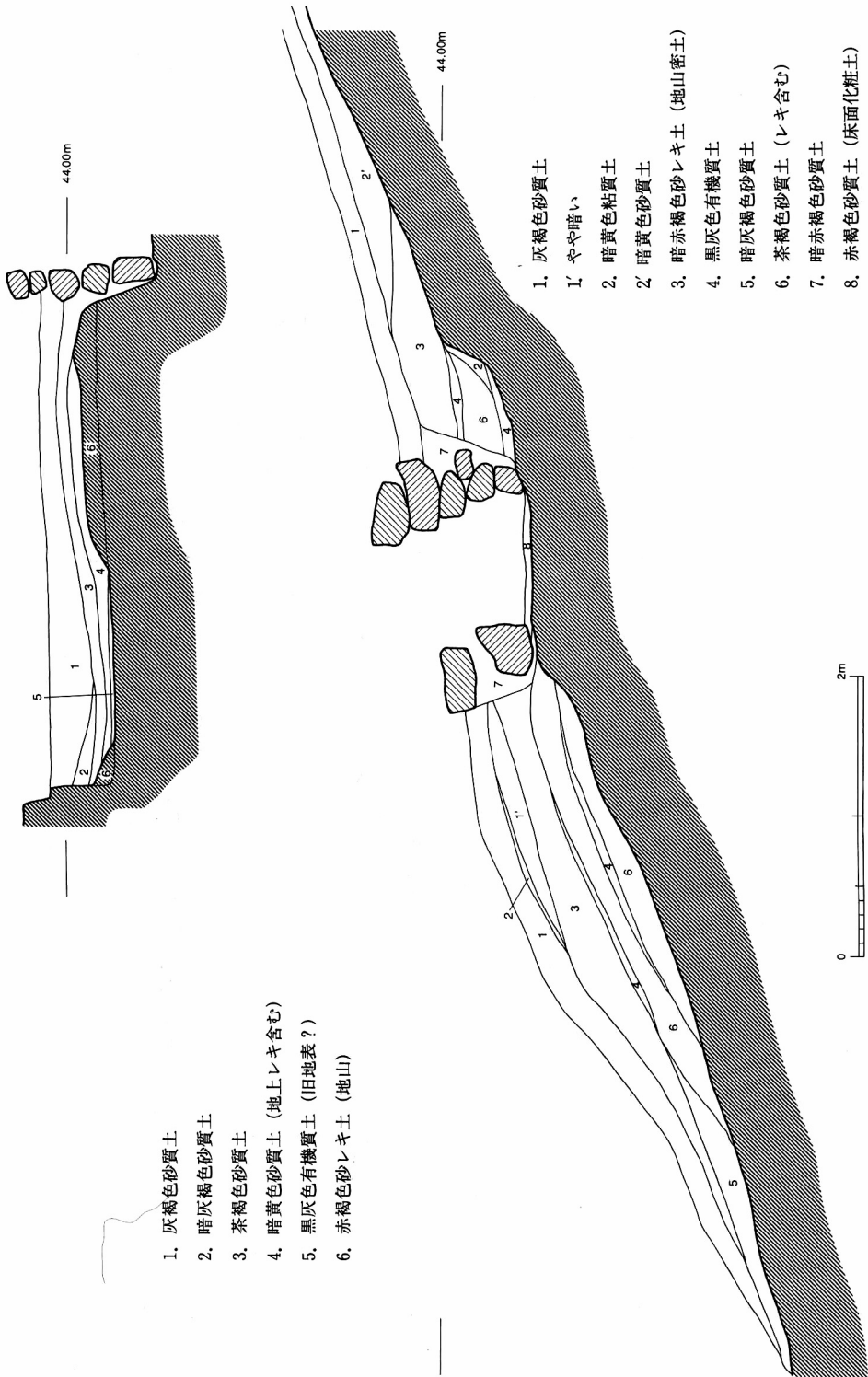
墳丘規模も小さく、墳丘の築き方もやや粗雑な印象を受ける。墳丘規模の違いは墳丘土量の大きな差になり、墳丘築成の丁寧さの相違は築造時期の多大な差になるものと思われる。

4. 横穴式石室

調査着手段階で、すでに天井石は全く残存していなかった。また、石室内にも落石はほとんどなく、天井石に該当しそうな大型の石材は認められなかった。石室内埋土や流土からは大甕の破片を除いて出土遺物は見られなかったので、天井石の欠失時期や石室が埋まった時期は不明である。



第107図 龍子向イ山4号墳墳丘測量図



- 1. 灰褐色砂質土
- 2. 暗灰褐色砂質土
- 3. 茶褐色砂質土
- 4. 暗黄色砂質土 (地上レキ含む)
- 5. 黒灰色有機質土 (旧地表?)
- 6. 赤褐色砂レキ土 (地山)

- 1. 灰褐色砂質土
- 1' やや暗い
- 2. 暗黄色粘質土
- 2' 暗黄色砂質土
- 3. 暗赤褐色砂レキ土 (地山密土)
- 4. 黒灰色有機質土
- 5. 暗灰褐色砂質土
- 6. 茶褐色砂質土 (レキ含む)
- 7. 暗赤褐色砂質土
- 8. 赤褐色砂質土 (床面化粧土)

第108図 龍子向イ山4号墳填丘土層断面図

内部主体は無袖式の横穴式石室である。石室の主軸はN63°Eで等高線に平行よりやや北へ振っている。石室の開口方向は西南西である。龍子向イ山古墳群の主体部の明らかな5基の中では最も規模の小さな石室である。天井石の全てと側壁の一部が欠失しているが、平面形態は計測出来る。全長4.3mで奥壁前の幅0.9m、開口部の幅1.0mを測る。奥壁から石室全長の4分の3付近までは0.9mと同じ幅であるが、4分の3付近から開口部へ向けて幅を広げる平面形態である。石室の残存高は1.0mで、開口部付近の側壁の残存状態が悪く、0.4～0.5m残存している。奥壁が最も保存しており、1.1mを測る。石室の高さは、石室の形態や保存状況などから見て高い石室は想定しにくく、現状に近い高さに天井石を安定するための1石が挟まる程度と思われる。

石材は、他の古墳と同様にチャートが使用されているが、他の古墳は裏込に円礫が混入している以外はチャートのみで築造されている。4号墳は奥壁の基底石と側壁の1石に流紋岩が使われている。流紋岩は揖西平野の南西縁の大陣原～竹原の山塊で採取される石材で、龍子向イ山3号墳石室内と鳥坂1・2号墳の箱式石棺の用材として利用されている石材である。

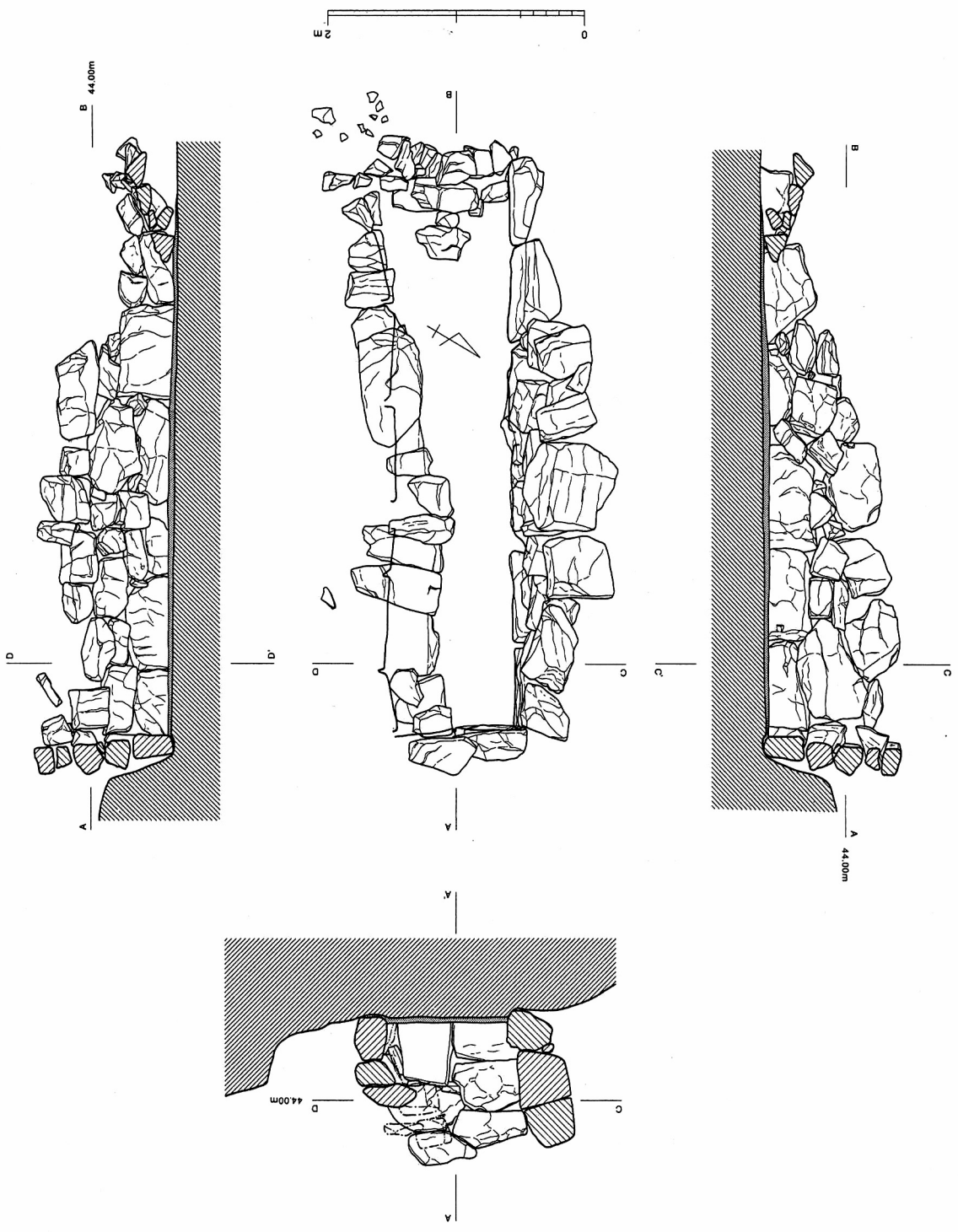
用石法も奥壁が石材が異なることから、他の古墳と異なっている。板状の流紋岩は縦積みに用いられ、その上に2石目のチャートを横積みに用いている。裏込石は使わず、控え積みも行っておらず、不安定な印象を受ける。側壁は基底石をはじめ横積みしている。ただ、2石の大型の石材の間は詰め易いように石を使っている。おおまかには、基底石や2石目で目地を通してはいるが、全てではなく2・3石目に相当する幅のある大型石材を使っている個所もある。

奥壁部分の墓壙は他の古墳に比べて小型で、墓壙に接するように石材を積んでいる。裏込のない分、石材を墓壙に接して安定を測っている。特に奥壁の流紋岩のところは明瞭で、板石を立て墓壙の間に土を埋め、2石目を積むのに安定が得られるようにしている。

石室は、南側の標高の高い方は内傾し、北側の標高の高い方は外傾しており、崩壊しかかっている。天井石が消失したことによる傾きかもしれないが、裏込石の不足はより傾いた原因と思われる。大きく傾いている部分では0.5m近く平面距離でずれている。開口部周辺の欠壊部分を除いて全体的に内外傾している。

開口部で閉塞施設を検出している。奥壁から3.7mの部分から開口部に分けて石を積み閉塞施設にしたものである。石材は石室用材と同じチャートの角礫が使用されている。3.7m付近から開口部へ向けて積んでいる。石材は0.2～0.3mの人頭大の石を主に使っているが、一部0.5mを越える大型の石も使っている。閉塞施設は、1号墳のように羨道内ではなく開口部に存在する。石室規模に比例して、閉塞方法も簡略化している。

石室の石材は奥壁よりも側壁の方が大きく、奥から開口部へ向かって築いていったと思われる。石室中央付近まで目地が通っていることから、ここまでを先に構築した可能性も考えられる。右側壁では中央付近で石材の積み方が粗くなっている。左側壁では中央より開口部側の大



第109図 龍子向イ山4号横石室 実測図

型の石材個所の前後で変化がある。この変化点は、石室平面プランが開く部分に担当する。0.9m幅で最初に構築した可能性が高い。

奥壁の積み方も安定感がなく、小型化した石室の状況を示している。石材が縦積みされていることなど、石室から見ても龍子向イ山古墳群中最も遅れて構築された古墳と思われる。

5. 遺物出土状態

4号墳の出土遺物は少なく、石室内で土師器1点が開口部周辺で須恵器大甕1点が原位置を保っていた。他に上層で須恵器1点が出土したが、掻き出された状況の遺物と思われる。石室開口部付近で、(3)の土師器甕片も散乱していた。

石室内の遺物は、土師器杯1点だけである。石室主軸上の開口部に近いところから出土している。この部分は、横穴式石室の項で記したように左側壁の大型の石材が使われている部分で、側壁の築き方に変化がある部分に相当する。1点の遺物で論議するのは早計と思われるが、唯一の出土遺物であることを考慮すると、祭祀的な意識が働いたものと考えられる。奥壁から3mのところ位置する。

開口部前の須恵器大甕は、開口部主軸上より南側の標高の高い部分は散布していた。一部は、奥壁近くの石室上方にまで広がっている。出土状況の中心は開口部前方であるが、破碎した原位置かどうかは不明である。完形に復原出来なかったので破碎に際しての打撃個所などで明らかではないが、底部の方が欠失した破片が多いことから、底部に力を加えたものかもしれない。1号墳裾近くまで流れており、流出した破片も相当あるようである。全て同一個体と思われ、使用した甕は1個体と考えられる。一般的に考えられているように墓前祭祀の1例と考えている。

6. 出土遺物

(1) 土器

4号墳から出土した土器は、須恵器では甕1点、土師器では杯1点と中型の甕の一部が残っており図化できた。

① 須恵器

器高42.9cm、復原最大径41.0cmを測り、体部は丸く、復原口径18.8cmの口縁部を持つ甕である。体部外面全体に平行叩きを施したのちカキ目を行う。体部内面にはあて具による円弧状の叩きが残る。口縁部は外反しており、端部は丸く先端をやや内側につまみ出している。

その他、長頸壺と思われる断面4mm程度の薄い破片が1点ある。